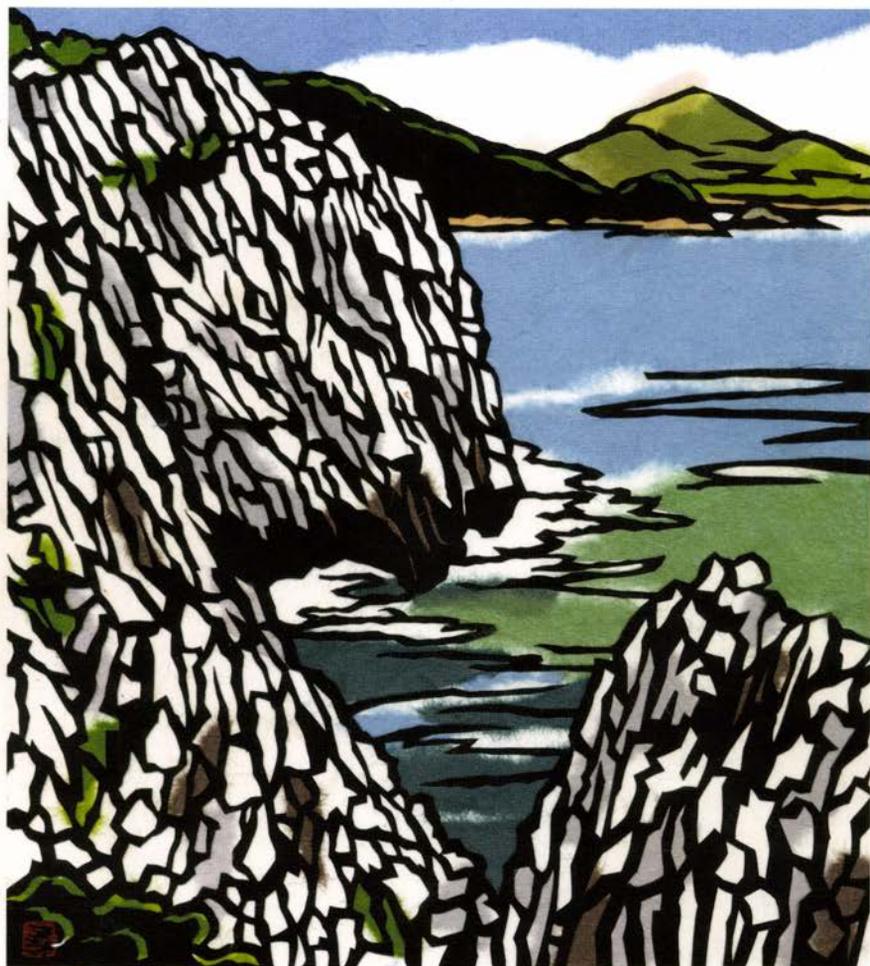


川柳塔



平成三十一年八月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一〇九五号

日川協加盟

No.1095

八月号

第24回 川柳塔まつり

と き 平成30年10月6日(土)

開場：午前11時 出句締切：正午 開会：午後1時

ところ ホテル・アウリーナ大阪 4階 金剛の間

大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12(近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車) 電話 06-6772-1441

《同人総会・議事》午前10時より

平成29年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告

平成30年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

《各賞表彰式・記念句会》

表彰式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・各地柳壇賞

おはなし 「自嘲と自慢」 川柳塔社 新家完司氏

兼題 「カラフル」 大阪 平井美智子選

「配る」 広島 鴨田昭紀選

「不思議」 東京 川名洋子選

「芯」 大阪 水野黒兔選

「遙か」 奈良 大内朝子選

事前投句 「男と女」(9月1日必着) 川柳塔社 主幹 小島蘭幸選

◎各題2句・勝手ながら欠席投句は拝辞させていただきます

出句締切 正午(午後5時頃終了予定) ※各題の「天」位に賞呈

◎会費 2,000円(当日頂きます) ご昼食は各自でお済ませください

◎呈 記念品

《懇親宴》

と き 平成30年10月6日(土) 午後5時～7時

ところ ホテル・アウリーナ大阪 3階 葛城の間

☆会費 7,000円 先着申込み 130名様

* 事前投句および懇親宴のお申込はチラシに刷りこみのハガキ(ご希望の方は事務所)にて
9月1日(土)までに本社事務所宛、お送りください。

* 懇親宴のご送金(句会費除く)は同封の振込用紙でお願い致します。

主催 川柳塔社

大阪市天王寺区大道1丁目14-17-201
〒543-0052 ☎・FAX 06-6779-3490
振替 00980-4-298479

川柳塔みちのく

三十周年記念句会

小島 蘭 幸

全国大会で三連覇を達成した渋谷和生さんの店、津軽三味線ライブあいやでの前夜祭は、関西から出席した八名と私、そして川柳塔みちのく主幹の福土慕情氏と地元の方々と一緒にカンパニー!!美味しい郷土料理とお酒、日本一の津軽三味線を特等席で味わうことが出来た最高の夜でした。

記念句会は、宿泊先の弘前プラザホテルで午前十一時半開会、私は、「川柳初心の頃」と題して約三十分お話をさせて頂きました。宿題三題の共選と特別選一題、私は特別選「森」の選者を務めました。

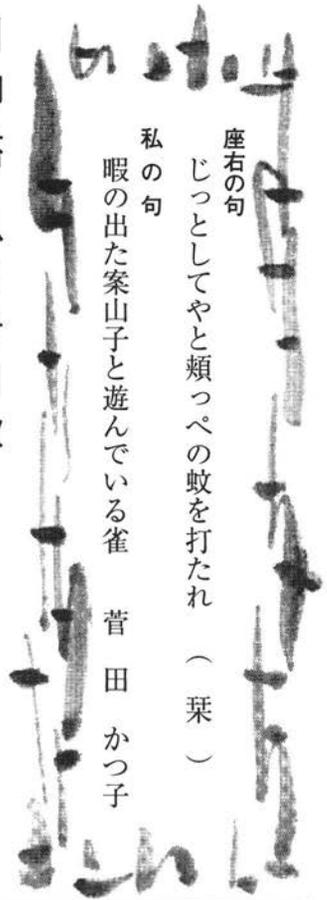
六名の選者の披露、私はずっと青森の川柳人って凄いなと感じながら聞いていました。作者の個性と郷土愛が際立っていたのです。いい川柳を直接生で聞くことが出来て、とても幸せな時間でした。懇親会も和やかで素晴らしいものでした。

さて最後の楽しみは、なんといってもシャンソン居酒屋「漣」です。シャンソン歌手秋田漣ママは、五年前に初めて来た時とちつとも変わっていませんでした。変わっていたのはピアノリストが女性になっていただけでした。漣ママの見事な歌声に、男と女の哀しさ、切なさ、愛しさ、美しさをしみじみと思ったことでした。ママから色紙を一枚所望されて、あなたにもほくにもきつとある翼 蘭 幸

西日本を中心とした各地では記録的な豪雨に見舞われ平成最悪の被害を被りました。

犠牲者の方々に衷心より哀悼の意を捧げます。また被害に遭われました皆様には心身共に疲れのことと拝察致しますが一日も早い復旧を心よりお祈り申し上げます。

川柳塔社



座右の句

じつとしてやと頼っぺの蚊を打たれ (葉)

私の句

暇の出た案山子と遊んでいる雀 菅田 かつ子

川柳塔 八月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「南紀・白崎海岸」

| | |
|------------------------------------|---------------------|
| ■巻頭言 川柳塔みちのく三十周年記念句会…………… | 小島 蘭 幸 ……(1) |
| 川柳塔 (同人吟)…………… | 小島 蘭 幸 選 ……(4) |
| 川柳塔の川柳讃歌 ⁽⁶⁶⁾ …………… | 木津川 計 ……(43) |
| 自選集…………… | ……………(44) |
| 句集の森…………… | ……………(47) |
| 温故知新…………… | ……………(47) |
| 水煙抄…………… | 川上大輪 選 ……(48) |
| 橘高薫風句抄…………… | ……………(66) |
| 英語 de Senryu ⁽⁸⁰⁾ …………… | 吉村 侑久 代 ……(67) |
| 誹風柳多留一二篇研究 62…………… | ……………(68) |
| 愛染帖…………… | 新家 完司 選 ……(70) |
| 檸檬抄「像」…………… | 山口光久・斉尾くにこ共選 ……(74) |
| せんりゆう飛行船 ⁽⁹²⁾ …………… | 新家 完司 ……(77) |

鹿野みか月

川柳大会の中止

森 山 盛 桜

永年ご愛顧を頂きましたが、昨年三十七回大会をもつて打ち切りに致しました。少し振り返ってみたいと思います。

第一回鳥取県川柳大会が行われたのは昭和五十三年三月の事でした。右も左も分らない中、一人で参加致しました。

その後、両川洋々氏、小林由多香氏を知ることとなり、そのご縁で昭和五十四年十月に鹿野町文化祭協賛として山紫苑で句会を開きました。参加者は十五名、投句者は父敬山一人でしたが、参加者の多くは「米子きやらぼく」の皆様であり八木千代氏、林瑞枝氏、政岡日枝子氏の方々と、この時が初対面であったような気がします。中原諷人さんはこの時は不参加で、二カ月後の第一回勉強会からの参加になっています。

発足記念大会は、昭和五十五年六月八日、旧和泉荘で行われました。参加者は

| | | |
|------------------------|--------------|-------|
| 一路集（「すんなり」） | 村上直樹選 | （78） |
| 「部屋」 | 多和田敬子選 | （79） |
| 初歩教室「汗」 | 居谷真理子 | （80） |
| 川柳塔鑑賞 | 川端一步 | （82） |
| 水煙抄鑑賞 | 山岡富美子 | （84） |
| 全日本川柳熊本大会結果 | 葉原道夫 | （85） |
| 『麻生路郎読本』余滴(47) | 大西泰世 | （86） |
| インスピレーション・ナビ 印象吟 | | （88） |
| 路郎賞・川柳塔賞 選考規定 | | （90） |
| 七月本社句会 | | （92） |
| 句会燦燦 | 弘津秋の子 | （96） |
| 各地柳壇（佳句地十選／鈴木いさお・松本文子） | | （97） |
| 八月各地句会案内 | | （110） |
| 柳界展望 | | （112） |
| 川柳塔WEB句会「年」 | 青砥たかこ・石橋芳山共選 | （114） |
| ■編集後記（ひとこと／まえでとよこ） | 朱夏・勝弘 | （116） |

座右の句

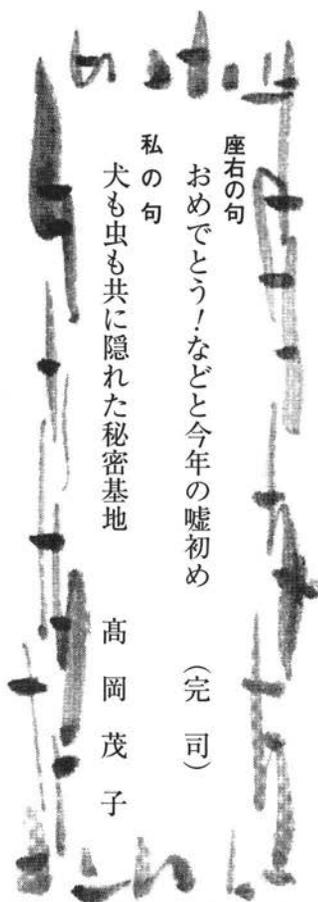
おめでとう！などと今年の嘘初め

（完司）

私の句

犬も虫も共に隠れた秘密基地

高岡茂子



六十九名と少なかったのですが、これのみか月のスタートになりました。

川柳塔の皆様とのご縁は昭和六十年の大会が最初で、黒川紫香先生を筆頭に大挙してお見えになりました。紫香先生のお孫さんのお嫁さんは鹿野の人で中原汲香さんの口利きによるものでした。

翌年、弓削からの初参加があり、川柳塔の歴代主幹の皆様や森中恵美子先生をはじめ関西方面からバスでお見えになるようになり、砂丘観光のあと気高町でのりんご狩りというのがお決まりのコースでした。平成二年には参加者百八十八名を数えており、この頃がピークでした。

そんな中、平成十四年六月に国文祭川柳大会が、新築なった鹿野小学校体育館において実施されたのは、思い出深いものとなりました。今年から鹿野町の教育は劇的に変わり、小中が合体して義務教育学校鹿野学園となり、一年生から九年生までという形になりました。川柳との係わりは続くので六月に二つの学舎で川柳のお話をさせて頂いたところです。

今後とも宜しくお願い申し上げます。



小島蘭幸選

松山市 栗田忠士

躓いた石にごめんと言っておく

脱線を繕いながら生きてきた

愚直という旗を一本持ち歩く

神の手の失敗例は映さない

生き抜いた昭和の誇りまだ捨てぬ

支持率というシーソーに乗っている

札幌市 三浦強一

九条に軍服着せる悪巧み

杖あればまだ履けそうなハイヒール

北斎の波をサーファー待っている

大宇宙ヒト科の棲める星ひとつ

生前葬なら義理友も来るだろう

いま少しこの世にいたい南無阿弥陀

土佐清水市 辻内次根

キラキラと年金月の初夏の風

眩きに応えもなく夜が更ける

本気だす二十三時の蠅叩き

庭の草咲くまで待ってみましょうか

独り居のしじまに慣れることはない

一日の隙間で今日も夢を見る

鳥取市 岸本宏章

あなたの倍生きたと父を喜ばす

ブラタモリ私が元祖かもしれぬ

通訳はいらぬ力士のインタビュ

受取りのサイン癖字が生きてくる

倍の手間かける覚悟がいる手抜き

発言の撤回庶民でもしない

大阪市 平井美智子

靴底の歪に慣れた老いの足

ほっとして欲しい構って欲しい

傷口を見せて納得してもらう

言いそびれた「ごめん」を抱いたまま眠る

海風の便り逢いたい人がいる

やがてやがてみんな淋しいみんな優しい

箕面市 中山春代

じゃがいもの花へ故郷のバス下りる
廃屋のポストへ届く風の文

埴輪の目にわか歴女の汗をふく
デバ地下へ寄つて故郷の魚買う

コンサートの余韻くちなしが薫る
空っぽと知つてる墓へ手を合わす

長岡京市 山田葉子

学業と七段両立のすこさ

羽目はずしたところから運が向いて来た
ブレーキは効かぬ行くとこまで行こう

運も味方に未知の後期へ紛れこむ
セピア色の写真一枚残される

一喝が胸のモヤモヤ吹っ飛ばす

大阪市 升成好

肩の荷を下ろし肩から老いて行く
本気だな目を合わせても外さない

ハードルを越えた数だけ向う傷
一途さに神もうつつすら細目あけ

許す気になると声までやわらかい
生きるとはブラスマイナスやがてゼロ

青森県 松山芳生

生きている証し呑めるぞ笑えるぞ
ピリオドをひとつ対岸に捨てる

ひと呼吸待つて微笑むランドセル
仁丹ひと粒上品なおじさん
混沌の群れが勝者の旗を待つ
淋しくて虹のしっぽを引き寄せる

三原市 鴨田昭紀

人間味あふれる不器用な歩幅

悔しいが全てが老いに当てはまる

信用が出来ないミスをせぬ男

三食が足りて貧しい音がする

途中下車するたび振り出しに戻る

不器用な男に泥濘が続く

大阪市 高杉力

肉ジャガは母さん作と後で知る

ダイエットが先とは言えぬ試着室

旅に出る便座電源オフにする

串カツを食べて庶民派を気取り

内科歯科ハシゴが出来るまだ元氣

亡き父に似て来たそうな昼寝顔

大阪市 津村志華子

長生きも程がよい沙羅双樹

十人十色個性のままに老いてゆく

物ぐさになつて夕餉の冷奴

九十二歳まだ包丁はリズムカール

皺くちやの手に刻まれているドラマ

趣味ひとつ錆びてる脳を掻きまわす

和歌山市 磯部義雄

雷が落ちてでも止めぬ子のスマホ

子らくれた金婚式は銅メダル

爪を噛む癖は母から受けた愛

感謝して箸を置くまで日々ドラマ

釣友が魚拓広げてする自慢

和歌山市 上田紀子

正直でポーカーフェイス作れない

不束を通しストンと行くあの世

ユーモアが判らぬ人が一人浮く

黒猫が横切る月下美人咲く

脱皮して急に輝きだす娘

和歌山市 坂部紀久子

キャッチボールのお喋り楽し喫茶店

日々好日庭のつつじが満開で

息子より嫁が頼りになる電話

てにをはを間違えただけ一大事

物忘れ錯覚そんな日々続く

和歌山市 武本碧

軽やかに翼が付いて置き手紙

白旗は揚げぬ覚悟の万歩計

アンニュイな風と勝負の招き猫

勝ち負けをつけない主義でお人好し

ジョーカーが心の奥を出たがらぬ

和歌山市 土屋起世子

おはようの筈が返る通学路

人の輪に入って落ちた目の鱗

久久の遠出に心地よい疲労

針の穴くらいの見栄を張ってみる

不足ばかり言うから葉増えてゆく

和歌山市 福井菜摘

無印になって人間取り戻す

オクターブあげて陽気な輪にとける

骨太に生きて悔いない無位無冠

歳月の早さにほしい句読点

小吉でいいゆつたりと今を生き

和歌山市 古久保和子

一日はテレビ欄から動き出す

自画像の耳は大きく描いておく

明日晴れる空へビニール傘回す

車椅子の背なへ楽しい話する

結論は急かさぬように落とし蓋

和歌山市 堀富美子

独り居を満喫して昨日今日

幸せな笑みに手招きされている

内心は老いという字を消している

新曲が老いのリズムに乗って来ぬ

傘寿坂何時も追われて忙しない

和歌山市 松原寿子

太宰の書人の弱さよ悲しさよ
角の出るときこそ女耐え忍ぶ
美しい言葉へ探り入れてみる
錆止めほどの油を差して切り抜ける
アレンジのしすぎで曲が狂い出す

岩出市 藤原ほのか

イヤリング揺らして自分主張する
かあさんのつぶやき今も活かされる
買物は慎ましくして謳歌する
今が旬ならばチャンス逃さない
旗のもと気持ち新たに歩き出す

海南市 小谷小雪

デパ地下も上客の顔して巡る
カッカきて顔には出さず私流
小癪にも褒める形をとっておく
葉桜は花の頃より勇ましい
ただいまを茶粥にちよつと勞られ

海南市 堂上泰女

花菖蒲一輪夫の長所見る
信じてる友以外には貝になる
飛行機音聞けば思わず手を合わす
少子化でもう見られない夏祭
バリ土産など要らんから無事帰れ

紀の川市 宇野幹子

鬼はまだ元氣キツチン取りしきる
ファーストを守り通してきた気迫
その先を読むセールの誉め言葉
偏差値をいつかは悟るランドセル
赤裸裸に生きてわたしの青い空

紀の川市 北山絹子

片減りの靴で仕事の鬼となる
どの場所においても貴女が光ってる
学舎の想い出遠い茜雲
晩学へ弾み出してる父の辞書
今朝会った人が柩の中に居る

紀の川市 楠原富香

過ぎし日を思えば悔いが絡み付く
歳月に固い絆も緩くなる
二世代の狭間で右往左往する
誤作動でたまに無口がしゃべり出す
台本がないと寄り道ばかりする

紀の川市 山東日出男

リーダーの象は水場を知っている
害獣になってしまったアライグマ
四季折々に海の幸山の幸
バーベキューでんやわんやの俄雨
根性が半端ではない夏の草

橋本市 石田隆彦

胃カメラにずばり指摘の不摂生
しゃぼん玉割れるがごとき記憶とぶ

億劫がついつい増やすロスタイム

予定よりかなり工面のいる老後

カタカナ語どんどん増える広辞苑

京都市 清水英旺

少子化がますます進み国細る

生きてるね傘寿の顔が笑い合う

夕焼けは人恋しさを募らせる

万歩計を満足させる程歩く

信用はせずとりあえず握手する

京都市 藤井文代

妻よりもソフトに洗う洗濯機

訴えるところない妻へのクレーム

記憶にない置いたところより置いたこと

馬鹿受けでかぶった仮面はずせない

ゆるくなつたベルト薄着になつただけ

京都市 榎本宏子

どうしようぐうたら虫が出て行かぬ

自慢料理地産地消の採りたてで

おばさんは卒業次はおばあさん

冬に愛かけた花たち恩返し

美白やめ陽をたつぷりの骨粗鬆

京都市 三宅満子

緑濃き御堂に雨もまた風情

新キヤベツ丸ごと買ってもてあます

雷が鳴ると一人はよけ恐い

年の差婚老後のことはケセラセラ

久々の墓参侘びてる花手桶

八幡市 今井万紗子

補聴器をはずしやさしい風入れる

二人して飛べたらいいね水たまり

もう少し笑っていたいネジを巻く

泣かんとききつとアシタは晴れるから

遊び心生きる意欲をかきたてる

大阪府 米澤俣子

今日よりは若い日は無い紅を引く

鯛の刺身食べるしあわせ夏が来る

お上手を言えぬ血筋を引いている

不老不死の薬送ると新茶着く

大地震今おきたらと風呂の中

大阪市 岩崎玲子

夫婦して違う趣味もちオアシスに

どの趣味もわかりかけると奥深い

便利グッズ亡母に見せたいものばかり

三姉妹お喋り旅行恙なし

やさし嫁もらつてくれた息子に感謝

大阪市 内田 志津子

しばらくはリハビリすると受話器から
病む友の見舞いいらぬというメール

荒行に神の領域大阿闍梨

さるすべり燃える紅さす寡婦のごと

バラ園の蜘蛛の子ちらす通り雨

大阪市 宇都 満知子

ピンクの水筒いつでも持ち歩く

嫌いではないのですただ人見知り

梅雨あけを待って梅干し天日干し

筑前煮残った二日目が旨い

鳥のさえずり雨の止み間を教える

大阪市 江島谷 勝 弘

どうしても大きい方に目は動く

朝の二時妻就寝夫起床

もう一軒行こかと友が言うてくれ

孫五歳そろそろ将棋教えよか

学問も勝負もてんで弱いオレ

大阪市 榎本 日の出

好きなこと出来る間は先ず感謝

リハール無しに終った家族葬

この国は居心地良いと外来魚

病院で検査人生変えられる

脳味噌を時どき孫が埋めにくる

大阪市 榎本 舞夢

太陽の塔チケット当り行くことに
春風に日本庭園素晴らしさ

学友と草原の旅実行す

三度目の再会疲れ吹っこんで

同じ場所どこかが違う風に合う

大阪市 大川 桃花

若いつていいな悩みもピンク色

ご近所も今日は何所へともう聞かぬ

意地の張合い世界が見てるその行方

御無沙汰の電話がくれた青い空

ちよつと足延ばし鶯聞きに行く

大阪市 大治 重信

落し物相談出来ぬ事情あり

目を奪うハルカスからの大阪市

貧乏をもつとせぜずに大昼寝

川柳を笑いながら泣いていた

緑陰のベンチに座る夏帽子

大阪市 奥村 五月

熟練の大工口から釘をうむ

記憶力無いが議員はまだ止めぬ

若者にまだまだ負けぬ酒ならば

食欲は無いと言いつつ呷る酒

おねだりは今日は止めとこ休肝日

大阪市 笠嶋 惠美

星組公演プレゼントされ付き添いも

医者通い会えてうれしいお友達

借りた本夢中になって五度も読む

産着から作る腰ひも鮮やかに

欲抜けたおだやかな顔ちよつと好き

大阪市 金川 宣子

老い過ぎて副音声で見るテレビ

百歳を目指して生きるスクワット

愛された思い出だけで生きられる

悲しみは力に変えて踏み出そう

時々は生きているかと確かめる

大阪市 川端 一步

紫陽花が咲いたら思い出す人よ

時どきは天声人語書き写す

余命など知らぬ完走だけめざす

登山道終えてお山に最敬礼

目標の半分できた拍手する

大阪市 熊代 菜月

友の声さがして今日も塔誌見る

亡母の年追いぬきましたまだ元氣

生きているあかし指折る五七五

春彼岸亡夫にグチをまた聞かせ

真夜中の静けさ一人しみじみと

大阪市 古今堂 蕉子

耳遠くなって覚えた薄笑い

磨いてるつもりが磨耗したわたし

誘われて手ぶらで行ってちよつと鬱

生意気を言うなど昭和の正座

七十七鏡見るのも日に一度

大阪市 近藤 正

近いうち飲みに行こうは行かぬ腹

身を守るために改ざんさせた罪

機密費が使われた先非公開

たんとまあ天には水が溜めてある

メモが出た虚偽答弁をあぶり出す

大阪市 坂 裕之

お互いに趣味があるのでそれなりに

余裕など全くなしで喜寿近し

走ってる方が悩みは薄くなる

勝ち負けは付けず互いに競い合う

飲みながら話せば分かる人だった

大阪市 田浦 實

若冲が涅槃図にした京野菜

蝶蝶はお花に混ざり身を守る

一寸先闇だからこそ頑張れる

妻入院コンビニだけが頼りです

防犯カメラご苦労様と声かける

大阪府 高杉千歩

今日を生きるナンテ格好よくホーム
無言の行です老人ホーム静か
そうですか雨ですかカーテンに囲まれて
大丈夫だいいじょうぶだと担当医
ごはんお持ちしました朝昼晩

大阪府 田中ゆみ子

ジープの穴からいらいを逃がす
老いという壁歩かねば歩かねば
未解決事件誰かが嘘をついている
戦争体験語ろう記憶失せぬまに
平成の最後の梅雨だ機嫌よう

大阪府 谷口 義

フルコース菓を飲んでハイポーズ
バスは行く元気なおばあさんに乗せ
千円のまことしやかな黒真珠
こんなぐらいでは死ねへんわと思う
家に入ると形くずれしてしまふ

大阪府 津守 なぎさ

病窓へ殊更侘し梅雨最中
梅ラツキヨ 漬ける夢見も鬨病中
わかし湯でない温泉を上高地
滔滔と昔を偲ぶ梓川

上高地車椅子でも河童橋

大阪府 寺井弘子

イベントのアイデア冴える町おこし
持てている妻の選んだスーツ着て
毒舌の頑固あるうち未だ元気
カーニバルこどもの声の弾んでる
誉められたダイヤ老いの手重くなり

大阪府 寺本 実

叱るほど愛はないので黙つとく
尖るのはよそう春風吹いている
遅刻魔のくせに俺より先に逝く
年金日朝から妻の丸い声
財産は隠したいけど残はない

大阪府 栃尾 奏子

美しくなって言いたいことがある
気付いてね今日パーマ屋に行きました
愛されていたいな鳥籠の中で
遠花火いまでも少女ですワタシ
夫婦です同じ匂いのシャツを着て

大阪府 原田 すみ子

老い二人食卓が地味トマト足す
作る手間食べる楽しみまだ続く
かかりつけ医と世間話し安堵感
余分な物買って要る物を忘れ
自宅の鍵一人開けてるランドセル

大阪市 平賀国和

里を出た兄弟集い慕しまい
断捨離の手始め実家処分する
食事会卒寿の叔母に過去を聞く
守るものあるから皆耐えている
美しい日本はどこにモリとカケ

大阪市 藤田武人

起承転 読んで頷く四コマ目
夏の夜蛍一匹母の膝
今ならば素直になれる影法師
自画像は本音を話したがらない
儲けゼロそれでも美味いもんを出す

大阪市 藤原千恵子

参拝者監視しながら庭仕事
花の株分けてあげると寺女
五十円供え河原の浄土道
五百羅漢まあるくなつてミーティング
さわさわとお喋り楽し羅漢さん

大阪市 山本加お里

財よりも心の杖は夫です
還暦の子に無理するな風邪ひくな
トコロテンのような人でも意地がある
許したら心のもやが消えました
遺影見て好き好き好きと手を合わす

大阪市 吉内タカ子

暑かろう植木水やりアアしんど
暑くとも二匹の蝶が覗き窓
ウォーキングも癒えるコーヒー店の猫
河内弁たのむ通訳はあちゃんに
梅雨くもり紫陽花ほこる内の庭

大阪市 若本安代

介護5の父が笑った今日は晴れ
溜め息をつけば介護が重くなる
介護してやっとお返し出来ました
物置きに役割終えた車椅子
もう今は自慢話になる介護

堺市 奥時雄

ターニングポイント過ぎてから長い
その時は節目であると気付かない
神仏が節目のたびにいで給い
名簿から知人が減っていく焦り
無為の日々どこかに焦る心あり

堺市 柿花和夫

青嵐別な心でいる二人
男なら泣くなと友は泣きながら
戦争で何を学んだのか日本
改憲を目指すひらひらした理屈
談合を相談と呼ぶお偉方

カーテンを開け戦鬪を開始する
堺市 加島 由一

最悪の事態に備え朝の風呂
いのちとは抜いてもはえてくるハコベ
三食に昼寝長生きしたいから
生きているわけに表と裏がある

堺市 源 田 八千代

若う見えたらしい座席譲られず
高齢者の集いコーラスフラダンス
個性派女優樹木希林さん嵌り役
梅雨時のメランコリーに包囲され
去る者は追わずに登る八十路坂

堺市 齋 藤 さくら

六月の北海道に雪が降り
ワイン買ひ父さんと古希しみじみと
あの頃と古い記憶は間違わぬ
お元気でしょうかに話途切れ無い
チャンネルを変えても話題みな同じ

堺市 坂 上 淳 司

お待たせと北海道の旭大星
大横綱白鵬関にやや陰り
怪我直し再起がなるか稀勢の里
ばらばらの客だが熱い前相撲
協会が折れるか土俵上の女子

父の逝く暑い日だった蝉しぐれ
堺市 澤 井 敏 治

フィトンチッドの効果に惚れて樹木葬
泣いて泣いて瘧えが取れたシャボン玉
ツバメの巣だけの出迎え無人駅
音のない遠花火見る北陸路

堺市 遠 山 唯 教

控え目に譲る気持を忘れない
哲学を抱きただひたすらに歩く
優しさに触れた男が重くなる
風呂めし寝る順は変わらずありがたい
手を振って別れた孫の物語

堺市 内 藤 憲 彦

おたがいに脳トレになるクラス会
趣味の会まず鉛玉が配られる
昼のんびり夜はちょこまかする血管
御下がりを食べることから子の糞
車間距離守る夫婦のどっこいしょ

池田市 栗 田 久 子

からだは資本生きてつくづくそう思う
贅沢な時間と思う一人の身
一人居の日々の静かさ穏やかさ
水茄子は口の至福と買うことに
サボテンの華一日のショーでした

茨木市 島田 誠一

遠吠えにされた世論がまだ熱い
ざりざりの財布は見せぬ鬼瓦
直行で帰れば五分マイホーム
稀勢の里そろそろ武運さんか
バーゲンのネタに問屋のクビがのる

貝塚市 石田 ひろ子

リハビリで歩行者免許頂いた
玄関に背の丸みを置いて出る
節くれた指歳月を華にする
ひそひそ話周りの空気沈めてる
六月の風若竹の衣更え

河内長野市 大島 ともこ

忘れてくれ重いひと言忘れぬ
忙中閑なつてみようか本の虫
いつものように目覚めた朝にただ感謝
メタボへの停止線もう振り切った
白旗を懐に断酒宣言

河内長野市 梶原 弘光

オリックスの勝利を祝しひとり酒
救急車のタクシー代わり未だ止まず
決定力不足野球もサツカーも
叱られた覚えないままトップの座
老いてなおかくしゃくそして自然体

河内長野市 黒岩 靖博

低金利金庫がわりと痩せ我慢
車にたより運動不足よわる足
また増えた薬一日十二錠
カラオケで囁れ声で元気づけ
待ちわびる出番まだかと空元氣

河内長野市 木見谷 孝代

野遊びの香りふくいくよもぎ餅
やいやいと氣遣う人が居てくれる
母の歳越えて万感迫る古希
古希の字を孫が調べるタブレット
梅らつきよ今年も無事に漬けられた

河内長野市 辻村 ヒロ

老いと言う未知の世界で立ち泳ぎ
古希になり少しは丸く演じてる
病名が検査のたびに押し寄せる
食欲に翻弄された付けが来る
古希すぎて強烈になる私色

河内長野市 藤塚 克三

痩せ我慢意地つ張りなら俺が勝つ
年金管理冷めた夫婦を熱くする
朝日課テレビと散らし〇印
年頭に俺を見てると吠えたのに
虫干しの背広今年も着ないのに

河内長野市 村上直樹

岸和田市 岩佐ダン吉

紫陽花とゆらり静かに聴くシヨパン

城壁の小石ひとつに見る気概

ご大役素顔でどうぞ雅子さま

周回遅れそれでも僕は休まない

逆鱗に触れて悟った師のころ

大勢は決まるが旗は下ろさない

年金のやりくり増えてきた不義理

四面楚歌そして私が試される

河内長野市 森田旅人

岸和田市 雪本珠子

思考回路時々ジャンプして俯瞰

久し振り富良野の風に逢いにゆく

むらむらとあがる闘志をまずなだめ

上辺だけの言葉ころに響かない

文体に私の見えてくる怖さ

今の世は思わぬとこに落とし穴

元氣かいその一言で晴れる鬱

性格も妻に似てきた家の猫

直球をはずして和みだす会議

残り火を抱いたまままで風になる

河内長野市 山岡富美子

四條畷市 吉岡修

鞆には保険証スマホ見栄少し

若い日の穴場の地図が役立たぬ

駆け抜けて失くしたものと得たものと

お隣の猫の躰がなつとらん

カフェテラス街角にある句読点

百歳のようにそろ食べて寝て飲んで

パスワード忘れ私が開かない

目差しにぞつこんですよ阿修羅さま

巨匠にも描ききれない青葉風

あの世へはどうせ手ぶらで行くだろう

河内長野市 山室光弘

吹田市 木下敏子

脳みそがぞつとするほど朽ちてきた

ひとり居に馴れてのんびり五七五

土地神話消えてローンが追いかける

善と悪ふたつの耳が聞き分ける

靴下にお洒落のセンス詰めている

前向きに今日も歩いてきた笑顔

税金を払いたくない記事ばかり

生きている証拠に痛いいたい足

吠えぬなら必要ないぞ特捜部

コーヒード胸の底まで温める

吹田市 須磨活恵

朝夕に仏拜んで癒されて
ずっしりと思ひ出詰める頭陀袋

貧しくも今は静かで穏やかに

気怠さも邪気も払拭青葉風

あゝついに跳べなくなった水たまり

吹田市 野下之男

特養の妻の笑顔を忘れない

カレンダーとにらめっこしてる高齢者

とにかくよく働くな赤い服

寄りそって犬の人形親子かな

せきどめの飴テーブルに鎮座する

高槻市 片山かずお

少しゆっくりしてとシトシト雨が降る

水がないと困るでしょうと雨が降る

生とし生きるもののためにと雨が降る

木も草も大きくなれと雨が降る

付度をしながら降って欲しい梅雨

高槻市 島田千鶴子

断捨離もついでに済ます衣更え

先送りしてもいい案出てこない

異常気象天地の怒りあちこちに

頷いたこの迂闊さは罪ですか

旅支度晴れだと決めていた靴

高槻市 初代正彦

のほほんのわりにまともな腹時計
とき卵のような起き抜けのわたし

太陽の塔なお脈脈といのちの樹

くせ球を素知らぬふりで投げける人

ひやひやとさせた孫にもサクラサク

高槻市 杉本義昭

温かな人情出合う無人駅

活断層の上とも知らずよい寝息

食事の頃になれば階段下りてくる

夜の地下鉄階段にある殺気

迷い乍ら選んだ道で共白髪

高槻市 富田美義

我がプラン通りにゃ行かずまた自腹

お布施には未だ税の無い不思議

不似合いな奇妙な髭が街に増え

こうのとりにプラン通りに来てくれず

快方の先読み誘う旅プラン

高槻市 富田保子

お早うと言える相手が今日も居る

足腰にエール送ってから起きる

取れ取れのトマト作者の顔で買う

青汁を一気に飲めば妻も笑み

撫で肩に女の欲が重過ぎる

高槻市 原 洋志

シヤネルだけ残して影は遠去かる
酔えばすぐ青い山脈タクト振る

言い訳に多忙を少し使い過ぎ

革靴に足を合わせる月曜日

ありがたうもう言わなくていいスープ

高槻市 松 岡 篤

靴音がいざ出陣と聞こえます(通勤風景)

階段を二段投びする通勤路

歩きスマホぶつかりもある通勤路

あの方は昨日も電車飛び乗って

時間あるのに走らねば落ちつかず

高槻市 安 田 忠 子

朝日浴び足音軽くする散歩

薄味が好きになつてる年かな

水溜り飛び越えられずびしょ濡れに

眼鏡はずし鏡を見れば良い笑顔

起伏に富んだ人生歩み今の幸

豊中市 池 田 純 子

雨漏りの落書き残る応接間

梅ラッキョ梅雨も母さん忙しい

リハビリはくもりガラスの青い空

切れ味が良すぎナイフしまつとく

考えて考えて出ぬその一步

豊中市 上 出 修

異状なしドックの後の酒旨し
守つてと言われた妻に守られて

三浪にやつと届いたサクラ咲く

西日受け高層の窓生き返る

教え子に罪押し付ける鬼コーチ

豊中市 藤 井 則 彦

ヒマワリに貴男だけよと見つめられ

無言電話に心一日晴れぬまま

ネクタイを外すと裏の顔が見え

モノリザと夢で出会って運が向き

身も心も拭えるラジオ深夜便

豊中市 松 尾 美智代

お茶ばかり飲んで浮かばぬ五七五

黄昏時ひらがなになる脳回路

何時の間にかテレビ見ながら眠つてる

心地好い宵を楽しむもう少し

感謝して今日一日を終える葦

豊中市 水 野 黒 兎

微積分解けた昔は痩せていた

思い出も一緒につつむさくら餅

ていねいに解いた紐をもてあます

原稿の柘目が歪むのも加齢

お茶漬にワサビ効かせて夏しのか

富田林市 片岡 智恵子

いくさの過去捨て新世紀まですこし

いじめメモ隠蔽の指示許せない

四島の解決逃げてゆくばかり

次の手を考え明日の靴を履く

命燃やした足跡は宝物なり

富田林市 関 よしみ

群れにいて予測できない一瞬後

芋虫の野心揚羽へエアメール

燻し銀選りによつてるマスカット

からからを晒す心に水を打つ

力みない笑みに合掌萩の寺

富田林市 中村 恵

魂が揺れる感動の辺りで

向き合えば私の秘密教えます

いくつもの素顔の替えを持っている

バランスの悪い男ですぐに泣く

古い名で呼ばれ時計が燥いでる

富田林市 山野 寿之

父と子の二人三脚プラモデル

報酬に無縁な汗を掻く奉仕

冗談も本音も混ぜて絆の輪

田に水を今宵蛙のコンサート

夢にまで出てくる趣味はまだ未完

寝屋川市 籠島 恵子

遮断機の警報やけに響く夜

古希古希と言つてるうちに七十二

おばあちゃんにあげるとおもちゃおいてゆく

畳み方しらない人が着る羽織

伸び代にドリック剤とスクワット

寝屋川市 伊達 郁夫

同情をされて惨めになる蛙

花びらが土に還つていく無情

願いただけの情に救われる

冷たい手温い手どれも私の手

毎日を一人芝居をして欠伸

寝屋川市 富山 ルイ子

三度豆やつと花咲く実が待たれ

三度豆可愛い莢が見えてきた

夏やサイぼつぼつ取れるようになる

朝ほらけブルーベリーが紫に

けじめを守る人としてしつかりと

寝屋川市 平松 かすみ

方角でお断りする菖蒲園

五十回囃んだ三粒の落花生

葬儀社に招待されて笑いヨガ

五十人ワツハワツハの一時間

葬儀社が長生きしろと言うてくれ

寝屋川市 森 茜

もうみとせ迦陵頻伽を見ましたか
松葉はたん敷く路地裏のやさしくて
庄迫骨折激痛だった初夏だった
梅の雨心療内科に行くと言う
真夜中のリビング消えたキー光る

羽曳野市 安芸田 泰 子

アルバムを開き昔に会いに行く
調子づき大きくなって行く話
ねずみ捕った昔を猫は語らない
長電話犬のことやら猫のこと
押し切った後から自信ゆらぎ出す

羽曳野市 徳 山 みつこ

バラバラと夏を零していく雷雨
八十の夏はカラリと駈け足で
灯明がゆらり答えはまだくれず
私から同居といい出しはしない
逃げまわる的は巨万の富を持つ

羽曳野市 中 川 ひろ介

ふる里は土用の丑のなまず捕り
ゆるキャラのバイトダウンし昼寝中
免許返納田舎じゃちよつと無理がある
紗の着物汗さえ見せぬ芸妓さん
誕生日の思い出母のちらし寿司

羽曳野市 仲 谷 真

八月だけハト派になる議員たち
処暑のため別荘に行く入院す
原爆の慰霊の日々が続きます
飛行機やヘリコプターが良く落ちる
朝顔の開花を見たく早起きす

羽曳野市 藤 原 大 子

多忙も暇も三日以上はお断り
柔らかな目に泣き事をつい洩らす
道徳を学んで欲しい財務省
守る人あつて暮しに張りのあり
この先も若くありたい好奇心

羽曳野市 三 好 専 平

鶴匠去りさみしい月の長良川
ウォーター・ベッドに夏の夢をみる
能登の湯に鮑甘海老蛭烏賊
エンディングノートにしろす 生きる意味
夏草もすでに生えない永田町

羽曳野市 吉 村 久仁雄

見て見ない振りして老いにけつまずく
継ぎ足して生きる力にコクを出す
空気にもなつて妻とは同志愛
嘘すこし混ぜて生き方案にする
みそ汁を温めて待つ新元号

東大阪市 北村 賢子

ありのまま氣負いてらいもない素顔
そんなもんやこんなもんよと納得す

一人ではないとささやく里の風

バランスはどうあれ共に半世紀
開運のヒントひたすら汗を積む

東大阪市 佐々木 満作

人生の節目に置いてきた微罪

薄氷を踏んだ勝利にある値打ち

わだかまり捨てれば広がる視界

レギュラーから洩れて再起を目指す輩

同情は要らぬ甘えは為ならず

枚方市 海老池 洋

独居かと小鳥も猫も来てくれる

耳傾けて心の声を聞いてやる

寂しさをスマホでカバーしてみても

同類でもヒラメとカレイ君と僕

赤ちゃんのいやいやならば愛らしい

枚方市 丹後屋 肇

あじさいが妻の周忌を告げにくる

消えるまで見送っているエアポート

田植機が舗装の畦でスタンバイ

頓珍漢な台詞で湧かす一人芸

酔眼朦朧鏡に舌をべエと出す

枚方市 寺川 弘一

バワハラの手前で止める叱り方

古新聞で古いニュースが生きている

今日もまた非通知電話すぐ切れる

ステージ5現人神に脱皮中

怖くないあの世は何処も極楽だ

枚方市 二宮 山久

ポランテア終わると心すつとする

絵手紙に一言添える思いやり

ハーモニカ心を癒すポランテア

手の痛み忘れさせてる発表会

おはようで今日が始まるありがたさ

枚方市 二宮 紫鳳

古い二人補い合って今日も生き

失敗も笑い飛ばして年の功

陽だまりをぬけ出て挑むジム通い

誉め言葉元氣印のエッセンス

縛られず縛らず生きる夫婦仲

枚方市 藤村 亜成

ひまわりの情熱くらくらする帽子

朝顔の蔓がからんでくる不気味

理智的な女の唇が薄い

外人が日本文化を褒めちぎる

これだけは自慢といえるものがない

枚方市 山口 弘委智

山頂の母のおにぎり世界一

蛇口から雫がポトリ句を仕上げ

だんごより花より好きな五七五

咲いて散るけじめのよさといさぎよさ

菓子折りの下にかくれた裏話

藤井寺市 太田 扶美代

あとの祭りみんな巢立ってゆきました

出不精を促す桃色カーディガン

多忙なふりして元気をアピール

神様がこの頃少し不機嫌で

五月晴れ迷うてばかりおられない

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

それぞれに傷をもつてる立ち話

あじさい祭また招かれた雨女

残り福と言う楽しみに生かされて

カード氾濫みな中流へ背伸びする

眼鏡の曇りが気にならなくなった

藤井寺市 鈴木 いさお

ほんの少し玉音のこと覚えてる

生きている喜び生きてゆく辛さ

かあさんのひらがなだけのぬくいふみ

身の内に強がり虫といじけ虫

とっておきのジョークが妻に通じない

死に神から届くアイラブユーとある

二円不足のハガキが届く雨の午後

八十以上歳は取らないことにした

モリカケの不味いニュースがまだ続く

新幹線に暫く乗らぬことにする

藤井寺市 吉田 喜代子

痛む腕それでも作る夏野菜

初取りは野菜嫌いな亡夫に供え

梅雨近し心の中も干して置く

手作りのお味噌が買えた道の駅

驚いた名も付け高値付くメダカ

藤井寺市 若松 雅枝

何処からお祝いくれぬ誕生日

AIも使えず世間狭くなる

先輩の訃報がいやに目に沁みる

寂聴さんを一つ違いで追いかける

心旅画面の土筆懐かしい

松原市 森松 まつお

高熱と虚脱が襲う午前二時

食欲も気力も熱に奪われる

復活の兆し点滴四日間

言われた事すぐにやらねばすぐ忘れ

金運はかすかながらもあるらしい

箕面市 大浦 初音

置き場所を決めて整理の第一歩
穴のあいたジーンズ買う気にならない
いざ行かん頼り頼られ老いの道
老い二人葉のむのを教え合い
心の中そつとしまつた傷一つ

箕面市 酒井 紀華

腕時計はずして主婦の顔になる
介護日誌途中で終り母しのぶ
座敷童ひよいひよい歩くいろり端
父の日に聴かせるように黒田節
近況を込めて父の日五七五

箕面市 出口 セツ子

長男が全て企画のプレゼント
誕生日子の優しさの中に居る
超豪華旅館貸し切り露天風呂
食べきれぬご馳走ニキロ太る幸
必需品次男バッグのプレゼント

箕面市 広島 巴子

梅雨晴れ間友と満足グルメ旅
スランプの友に紫陽花七変化
アロハシャツ友の見立てで若返る
さっぱりとシヨートへアアで梅雨を越す
蛭狩り双眼鏡を持って行く

八尾市 内海 幸生

真似できぬ花の気品と鮮やかさ
節穴も素人目にもルノアール
難聴で死ぬ話など聞こえない
七度二分仕事休めと祖母本気
人間をよく知ることやと仏さま

八尾市 寺川 はじむ

旅の朝久しラッシュと会う車内
張り合つて張り合い人は磨かれる
カルチャーに焦点当てて回る日日
よほどのことがあるのだらうよ北の国
目に青葉信貴の出で湯で吟の会

八尾市 宮崎 シマ子

席譲られ左右の人にも礼を言う
私の妻は超長生きの美人です
歌がうたえるから当分は大丈夫
涼を呼ぶ扇子団扇は日本の美
無口な人が言うからそれは本物だ

八尾市 村上 ミツ子

投句締切いつも律義にやつてくる
吉か凶か米朝会談の行方
目覚し時計寝坊することもある
家計簿にきいてエアコン買い替える
辞書のように教えてくれる父でした

八尾市 山根妙子

晴れた日は二上山と笑い合う
生きたとは晴れも雨にも添ってゆく
薄物の母美しく思った日
街はずれグルメブログで人の列
うちの子にほしい十代飛躍する

神戸市 上田和宏

紫陽花に真珠が混じる雨あがり
日本庭園躑躅梔子鬱金草
同病と知って旧知のようになる
影薄くいつも後ろに並ぶ癖
八十路過ぎ分水嶺を自覚する

神戸市 奥澤洋次郎

やる事に必ずヘマが付き纏う
横断歩道ひとの後ろについて行く
産めるよにせず三人を産めと言う
サメの顔がかわいいと言う女の子
断酒宣告受けるだろから呑んでおく

神戸市 富永恭子

失敗も味わいですと作品展
六月の棚は果実の酒の瓶
根回しも付度もせず一人旅
頷いて聞いたはずだがもう忘れ
晴れの日は来るさとトマト雨に耐え

神戸市 能勢利子

誕生日にトランポリンが息子から
トランポリンで毎朝ジャンプしてる古稀
もやもやはトランポリンで飛んでゆく
ジャンプすると心身共に若くなる
ジャンプして今日の元気を確かめる

神戸市 細川花門

キリストもマリアも泣いていた踏み絵
青い空大地の緑鯉のほり
万緑の六甲山はほくの庭
摘まみ食い見ていた猫にかつお節
子子が蚊となりドラキュラになった

神戸市 山口光久

生き方をがらりと変えた癌告知
医学への興味をそそる癌告知
癌細胞をきつと征服する叡智
癌手術天に任せる八時間
癌手術明日の医療に役立てば

神戸市 山口美穂

梅雨晴れの忙しい朝にピンポン
老いの眼に木木のみどりのやさしさよ
サンガラスの美人と挨拶交わしたが
父の日は亡父とコーヒー語り合う
トップニュース今夜も胸が痛うなる

神戸市 山崎武彦

身に覚えがあるので妻は子を庇う

百過ぎて頑張ることは無いんだよ

善人の仮面外してほっとする

妥協するつもりか妻の熱いお茶

ハンカチの汗がいとしい棒グラフ

明石市 糀谷和郎

少額もすんなりいかぬ遺産分け

句点ならここと決めてる老いの旅

ロボットが付度する日やってくる

踏ん切りがつかずふあつと風に乗る

記憶にはないと小指がシラを切る

芦屋市 黒田能子

喜びも悲しみも知るハンケチだ

庇いすぎひ弱に育つ子供たち

やれやれだ息子春から社会人

独演の自分自身に酔っている

いさぎよく桜のように散りましょう

芦屋市 竹山千賀子

飛ばされたところで咲こうと種の意地

咲く花のそれぞれに見る美の個性

明日は咲こう競い合ってる蕾達

ふる里へ夕日の色を見に帰る

のびのびの不義理を詫びる重いペン

尼崎市 加川靖鬼

タックルに油断召さるな昼の街

幸せな犬が寝ている乳母車

お辞儀したらみんな吐き出すランドセル

温水トイレ何の証拠も残さない

ノラ猫が夕日眺めている波止場

尼崎市 永田紀恵

無理矢理なルビで読ませる子の名前

トラファン勝つも負けるも酒のアテ

仕事だと思えば出来ぬボランティア

不揃いの野菜がいばる道の駅

背にシップ貼り合うだけの夫婦です

尼崎市 藤井宏造

炊きたては何が何でも塩むすび

お祈りのかわりいただきませすを言う

隠し事いくつかあって夫婦です

無表情の人ばかりいる喫煙所

アメリカにやっぱりしがみつく日本

尼崎市 藤田雪菜

お似合いですつい真にうけた派手な服

姉妹に会っておきたい会える日に

待つことに気長になつて月日

あじさいの艶にとまどう散歩道

森は青葉いのち弾ける音がする

尼崎市 山田 耕治

ハモニカの合奏を聞く皆笑顔
十年はすぐだと風が通り過ぎ
自転車のカゴは眠たいものらしい
学校のサクラお城に咲くサクラ
子の声にそうか世間は連休か

川西市 岡 一心

背伸びして明日へ歩く不安定
お気軽に総理夫人の脳天気
高齢化社会支える高齢者
名前にも昭和の香り忘れない
花も実も落としてからの人間味

川西市 山口 不動

鐘が鳴る時計台ある街に住み
この池の鯉はまだ見ずさつき咲く
定位置に酸素ポンベのおじいさん
お互いに二回返して意思疎通
就活の黒服女子の白い足

篠山市 北澤 稠民

法事しか逢わぬ兄弟でも温い
蛙鳴く田んぼの米は超うまい
川柳があるから憂さが晴れもする
農良仕事終えて晩酌する至福
句作りは淋しさ埋める時間帯

篠山市 酒井 健二

向こう傷よりも背中に深い傷
飲み放題どつと出ましたドーパミン
独り言たまに自分をほめている
ときどきは人に優しく年をとる
ポジティブにブーゲンビリア咲き誇る

篠山市 酒井 真由

思い立ち昔愛した人を訪う
訣別と哀のはざままで揺れる葦
しばらくは昔むかしの話など
ゆっくりしていけとやさしいことをいう
動くともみえず流れてゆく大河

三田市 足立 つな子

重宝な時季を逃さずらつきよ漬け
観たい行きたい望みつきない欲張りか
返り咲きたい花も実もある五十代
米朝のおもわく秘めた探り合い
一筋にただ肅肅と生きること

三田市 上田 ひとみ

声かけてくれるみんなにアリガトウ
私にもあなたの涙拭かせて
幸せになろうあなたと歩きたい
疲れたら君のサブリになりましょう
おだやかに暮してますか君の窓

三田市 尾崎 一子

更衣姑がせかせか動き出す
憩いのひととき孫との晩ごはん
久久さに孫と問答する夜半
手料理を旨いと姑を喜ばす
行つて来ます孫の青春今日も晴れ

三田市 北野 哲男

言霊の幸ある国ぞ五七五
天道虫飛びたつまでにひまがいり
コーヒーにトースト浸し食べた母
凡人で見たら聞いたらすく喋る
いい仲間仕事が好きで遊び好き

三田市 久保田 千代

遠い日の欠片をもらう数え歌
その次の言葉の奥に火をつける
馳けてきた一本道を振りかえる
人生はパズル二人で探す道
日本のころを食べる朝ごはん

三田市 多田 雅尚

無宗教なのに御朱印集めてる
涙腺が緩み出したら高齢者
スーブでも冷めない距離に来た息子
孫が出来急に爺ちゃんらしくなる
透き通る呼子のイカに進む酒

三田市 谷口 修平

落書きも絶賛される考古学
腹減れば何でも食べるグルメ犬
目標は子等には世話をかけぬこと
辛くても泣かぬ男が情に泣く
読めぬ文字褒めて帰った書道展

三田市 野口 真桜子

ぴかぴかにしたくて心拭き掃除
アルバイト歩合給です必死です
君に似る羅漢に僕の羅漢置く
成り行きでロケ地が僕の家になり
あれもこれも欲しがらる妻の若作り

三田市 福田 好文

医者の前座ると消える胃の痛み
紙おむつサイズ気になるビール腹
時は残酷あのマドンナの様変り
うなずいて仲間になった顔をする
親の介護兄嫁だけにさせた悔い

三田市 堀 正和

予定などないけど天気予報見る
アサガオをゴーヤに変えている八十路
バス停に自販機が待つ過疎の村
ステーキを食べております年金日
手術して筋金入りとなりました

三田市 村田 博

チューリップワイングラスの顔をして
負け犬にならぬと吠えて酔っ払う
嘘少し入れて友よりよいしょされ
賽銭にピカピカ硬貨溜めている
一人旅アバンチュールの予感して

高砂市 松尾 柳右子

梅雨空へ気分転換へアカット
外出着区別せぬのが私流
孫ひ孫揃い亡夫の一周忌
送迎は電話一本冷房車
手入れせぬ庭に季節の花盛り

宝塚市 田中 章子

注意点たんともらったドック入り
怠惰な生活数値嘘つかぬ
食事の誘いワンクリックで決まる
父の日はみんなに会えてうれしいわ
幸不幸親にはちゃんとわかるのよ

宝塚市 丸山 孔一

転校を重ね転勤苦にならず
町内の人もベットも共に老い
薄味に慣れて味覚が呆けてくる
入院日水割りグラスさようなら
久々の入院大部屋も良し

西宮市 秋元 てる

この段差これで私がこけたとは
逝くまでは部品の手入れ怠らぬ
何もせぬ老いは楽だと思つていた
欲求は薄めてそっと出しましょう
老いを生きる当り障りない色で

西宮市 緒方 美津子

しつかりと背筋伸ばせとヘアピース
凸凹の道ていねいに押す車椅子
月下美人時間守った父でした
呆けぬよう先手を打って写経する
何度でもいいものですネハイタッチ

西宮市 亀岡 哲子

虹が出てみんな笑顔になる集い
受話器から猫も拗ねてる長電話
マイシヤンプー使ったパパを許せない
風邪の熱お粥梅干し母恋し
大笑いしてもらったのありがとう

西宮市 西口 いわゑ

お帰りと駅にやさしく迎えられ
自由だと思えばなぜかつまらない
花々のメロディーにのり散歩する
愉快です空気読めない人もいて
うきうきと梅酒作りに小半日

西宮市 福島弘子

母の日に届いたバラの優しい香
あじさいに誘われ降りる無人駅
甘え上手猫軽々と肩に来る
疲れますよ「考える人」そのままじゃ
宿題はいつもリビング小五孫

西脇市 七反田順子

介護ロボ情も交えてくださいね
脳活性ジグソーパズル続けてる
どっちみち何とかなるよ生かされて
川柳もそれなりの色蟻の列
荒波に心さらして穏やかに

南あわじ市 萩原狸月

なんとなく生きて天寿へあと少し
不自由は知恵が工夫をして埋める
CMのわからぬこともアナログ派
免許証返し受け身になる老後
チャンスにと残した代打出番なく

奈良県 安福和夫

若い芽を潰す指導者罪深い
理不尽なスパルタ覇道の具と化す
学府にも利権の魔の手動いてる
望まれる法に叶った精神論
王道の上意下達に指導見る

奈良県 谷川憲

病室の窓越しに見たカフェへ行く
ハップルの宇宙の景色息を呑む
居心地が良いのか子らが巣立たない
気がつけば上司は皆な若い人
心の奥めくつてもなおある我欲

奈良県 長谷川崇明

父の日も何もしないでくられてゆき
耐えられる孤独耐えられない孤立
喜寿過ぎて地獄天国未知のまま
酒飲みは効くと信じるしじみ汁
アジサイの雨に始まる七変化

奈良県 渡辺富子

目の届くところにいつも妻の笑み
深い山河持った男もひからびる
的少しはずすと見えてくるまこと
こっそりと嘘ばらまいてるメール
いくつもの山坂越えた燦光る

奈良市 阿部紀子

信念を持つている人澄んでる目
亡母の好き紫むくげやつと咲き
母の死後聞き手なくした父寂し
昼寝して元気モリモリ草を引く
三吉に比べおしゃれな将棋棋士

素顔です心に纏うものもなく

奈良市 宇賀史郎

記録はシュレッター記憶焼場まで
乱反射アンバランスの美を見つめ

質問をそらし自説説く無意味

八十歳妻と始めて飲むワイン

奈良市 大久保眞澄

言われた日は守る食事運動も

スマホ連れのママを子供が追っている

ゆるい服着ると体もゆるくなる

バランスよく食べて部分的に太る

おばあさんが老いて知恵袋も老いた

奈良市 高橋敬子

目覚しはいつでも起きた後で鳴り

けじめだと就職した子家探し

ラインには友のユーモアあふれてる

信じてた会社次々虚偽表示

蛭狩り予報が曇から雨に

奈良市 辻内げんえい

フェアプレーを壊す大人の悪巧み

ゴルフ代株で稼げと言われても

ランチでもさすが老舗は手を抜かず

パスワード断捨離したいほど多い

ゲームする孫にタイマーかけておく

友の位置ポツカリ穴が空きました

奈良市 山本昌代

耐えがたい友の手はるか遙かなり

会わずとも耳にやさしい声がある

現実を見よう足下見つめよう

つややかな個性園児の声が咲く

奈良市 米田恭昌

辛辣な本音冗談から洩れる

堅物のジョークに満座黙り込む

凸凹夫婦アンバランスが面白い

吃水線ざりざり守り生き上手

おどろおどろし事件が続く昨日今日

生駒市 飛水ふりこ

うさうきと紫陽花揃うリトミック

ほんのりの慈顔が皆を引き寄せる

労りと少しの笑みで生きやすく

煌めきのシャワーなすびの伸び盛り

膝痛む古稀への誤算どっこいしょ

香芝市 大内朝子

被爆者にまだ戦争は終わらない

防空壕の土の匂いを思う夏

ごめんなさい素直に言える夢の中

晩成の希望に遠くなる傘寿

さわやかな目覚めへ感謝生きていた

香芝市 山下純子

五月晴れ出窓の花もはしゃいでる
子育ても夫育ても甘すぎた
暗い顔しているけれどオーラある
環境を守る一步のエコバッグ
先々の心配よりも今の夢

榎原市 居谷真理子

保護色は脱いだ真つ赤な実になった
瞳にもさざなみ生まれ十二歳
駅出ればバラの街ですああ五月
泪橋この小説のこのページ
火山灰降り積むこいのぼり泳ぐ

桜井市 安上理恵

我を忘れて追いかけていたこの背中
あと十年生きると夫小さく笑う
夏草ぼうぼうはたるぶくろはただ白し
再起への根性今がみせどころ
太陽が三つ昇ってくる明日

岩国市 上村夢香

心にもアイロンかけて靴を履く
彼方からほほえみくれる人がいる
ひとりでも模様替えして旅気分
氏神様もコースに入れる散歩道
草刈りを終えて青空広々と

宇部市 平田実男

ダイヤ婚絆はダイヤより固い
二人から四人になってまた二人
安倍夫妻針のムシロに座らされ
家事全般奥儀極めて嫁き遅れ
嘘も方便でまみれた財務省

下松市 有海静枝

痛みえず執行猶予三ヵ月
ドクターに凡な症例だとしても
脱ぎやすくおしゃれな服で検査室
ペディキュアを忘れた足で内視鏡
いつか逝く荷物を降ろし風になる

防府市 坂本加代

水面下なんでもありのにごり水
悪人に見えぬところが恐ろしい
盲導犬静かに座るコンサート
葉桜になつて落ち着く散歩道
次の策練つて反論後回し

鳥取県 石谷美恵子

辛抱強い五臓六腑がいと嬉しい
ブレーキを皆でかけんと舐められる
ちまちまと男愚図るな値が下がる
貢ぎ損我が子ですから悔いはない
サア一立つで立とうと膝へ言い聞かす

あやとりの川を流れる花筏

鳥根県 伊藤 寿美

終着駅誰あれも居ないかもしれぬ

高齢化独り暮しが揺れている

わたしにも届くムンクの絵の叫び

グッドラック以下は余白となる日記

鳥取県 斉尾 くにこ

長い時たつて正解だとわかる

立ち尽くす痛みと細いふくらはぎ

気が合つてリズムが合つて息が合う

にんげんは壊れものですおだいじに

清潔におしゃれにメイクする会話

鳥取県 竹 信 照 彦

妻の入れるコーヒー朝の喝になる

飲み屋無し月一・二回街へ出る

晩酌は子が発泡酒ほくドライ

我が家から徒歩で三分無人駅

免許返納すれば頼るは無人駅

鳥取県 西 谷 悦 子

大樹から枝葉が茂り家族の絵

越えてゆく樹へ喝采をしてあげる

頭体操新聞パズル挑戦す

わたくしの役目を終えて今日畳む

森友とアメフトニュース明け暮れる

散歩道朝練の子の清清し

新鮮な話題がほしいごはん時

雨ラララあじさいロード大合唱

直球が胸にバシッと痛かった

亡き友を想い昭和の歌を聴く

鳥取県 松 川 行 男

関取りが抱いた曾孫の笑み届く

姫路城やがて曾孫の遊び場に

花が咲く馬鈴薯だつて年頃だ

ニンニクも背伸びしている頑張るぞ

雨降つてそれから先は言えませぬ

鳥取県 山 下 節 子

舐めるなよ結果を見たら驚くぞ

雑談をちまちま纏め答え出す

登山道インスタ映えの崖登る

舐めるなど心の奥じゃさけんでる

囃に乗るなあんたが主役ではないよ

鳥取市 池 澤 大 鯨

部屋ひとつ城を構えて自立する

隠れ里書齋寝室すべて兼ね

足の踏み場部屋の中ほどけもの道

隣室に妖怪がいて大音響

秘密基地模様がえなら僕がする



根性も母のお腹に置いてきた
叱られる夢に寝汗が六十五

鳥取市 奥田由美

リタイアが不足うみだす子の学資
一人だけ児童を運ぶ朝のバス

今年またボルシェのとなり燕の巢

鳥取市 加藤茶人

終活に参加ケーキについ釣られ

女医さんを目当ての虫菌まだ疼く

頻尿に尿洩れ老いたなと思う

ゲストから見れば上座は俺の席

笑つとれば薬もいらぬ寄席通い

鳥取市 岸本孝子

梅雨入りと聞けばなめくじほくそ笑む

ニューモード着るには年を取りすぎた

年金にすっかり馴れた暮らし向き

一緒には行くことできぬ終の旅

くたびれた家にもずしり重い税

鳥取市 倉益一瑤

また一人神がともだち拉致をした

引き算が続き枕を裏返す

飴舐めてこれから喋らないつもり

三面鏡の裏にかくれている事情

作り話きつと寂しい人だろう

長通寺の本堂入り息を呑む
冷泉が描きし冬の日本海

鳥取市 田中天翔

十六枚の襖絵に会う初夏の幸

日本海の波濤高くも暖かい

日本画の波濤の白は真珠なり

鳥取市 棚田大

苦しさを舐め舐め続け強くなり

人や世を舐めた言い方控えてね

凶に乗るなそう言う上司声弱い

凶に乗るな俺に言うより国に言え

池の鯉鯉職見て跳びはねる

鳥取市 谷口回春子

孫の写メ忘れた頃にやってくる

大事なことは直ぐに忘れる処世術

曖昧のままがベストの記憶力

記憶力回復すれば元の鞘

川柳塔期待と不安バトルする

鳥取市 永原昌鼓

あちこちでセクハラニュースまだ続き

指舐めて新聞めくる老いの癖

凶に乗るな相手がちよつと弱いだけ

東京を眺めたスカイツリーから

子の名前すぐには読めぬ漢字増え

戦争を語る厳父にある弱さ

鳥取市 中村金祥

一人っ子爺じと喧嘩して育ち

ラッキョウに梅私の夏が始まった

鳥取市 前田楓花

七難八苦乗り越え過ごす古稀の道

手を合わす墓前の孫はおとなしい

寂しげに水辺の螢フワリ舞う

筋力も体力も無い肥満系

お守りのようになってる保険証

米朝会談落語と勘違い

鳥取市 夏目一粹

一枚の舌を二枚にして生きる

待つところ静と動とがいがみ合う

単独会見拍手喝采エールする

鳥取市 山下凱柳

スコールのような浪費で無一文

宇宙にも苛めがあるの流れ星

驚きより悲しくなったアメ事件

着地点未だに見えぬ加計に森

人情の輪ゴムが伸びる老いの坂

阿吽の呼吸言葉交さぬ老い二人

鳥取市 平尾菜美

よく滑るベンだ未だに変えぬまま

百歳の海になる日はもう近い

受験の前か終か弾けるピアノ

鳥取市 吉田孔美子

ストレスが解けないままに老いてゆく

菜園が生き甲斐という母の汗

あなたがいいえにはでももついて来る

班長はトイレ掃除と決まってる

冬枯れの葦自然にはさからえぬ

遣されてやはりと読み耽る系図

鳥取市 福西茶子

プールから浮かず泳がずただ歩く

恋の数まだ足りません逝けません

和尚さんに習わぬ経を褒められる

鳥取市 吉田弘子

ハイハイ あなたにだけの返事です

寝不足と胃痛の因はたかが趣味

月一の誰かに出合う待合室

草むしりさえ性格が出るざっくばらん

すんなりと古稀を迎えた訳じゃない

風呂新聞順番はなし侘住い

鳥取市 両川 無限

残念を引きずり長い影になる
尽くしても介護日誌に残る悔い
いい嫁になったがめつくなってきた
黒猫に踏まれてばかりいるピアノ
とてもいい人で皮肉が通じない

倉吉市 猪川 由美子

森友加計で出るわ出るわの嘘や膿
安倍総理の逃げの答弁辟易だ
目まぐるしい世で生きるのも大変だ
米朝韓の裏取引が熾烈です
ポロポロにされ拉致の家族は老いや死だ

倉吉市 牧野 芳光

今日のリズム八分音符で動きだす
幼な子は素直だけれど恐ろしい
十字架が傾き×印になる
サイレンが消える施設の入口で
雑草と戦い雲の上に行く

倉吉市 山中 康子

修羅かかえぬ裁戦へ名乗りでる
立ち上がる勇気をくれたのは亡夫
欠点も長所もはらむ生真面目さ
口外を恐れて何もしゃべらない
世界に誇る日本いつとり戻す

米子市 後藤 宏之

口喧嘩終って次は指相撲
あのタヌキときどき葉っぱ札にする
こっそりはやめたビリでもしょうがない
生きていくための違反だ仕方ない
適当な溝を作ってお付き合い

米子市 後藤 美恵子

萎える気力母の日喝を入れられる
もう少し歩幅広げと影が言う
十三回忌ほちほち寡婦の自縛解く
樟脳の臭い着ている衣更え
政権の不信が胸でとぐる巻く

米子市 竹村 紀の治

バスの中スマホの人と眠る人
褒め言葉だけは聴こえる耳である
来賓のバラが邪魔する飲みっ振り
若者は優先席の字が読めぬ
オルガンは懺悔をさせるように鳴る

米子市 中原 章子

長い年生きた証しの皴刻む
さかなくんとてもいい顔目標に
計報欄知人いないか目が泳ぐ
敬いの有無が関係変えてゆく
人間のエゴが種なし果実生む

米子市 成田 雨奇

くそ真面目一人いる会うまくゆく
生きにくい時代だ魔法使いには
わが家には家長の座る椅子が無い
ああすればよかった記憶巻き戻す
何か出来そうタイムアウトまで

米子市 吉田 陽子

老いたなど気付いてからは日々真面目
生き延びて時効が一つまた一つ
飾らないことだ自身を持つことだ
方向音痴一人歩きを忘れてた
ペン恋し土に親しみ過ぎた今日

松江市 石橋 芳山

木造の校舎が匂う雨の前
サークルを逃げて三角錐になる
混沌の助の奥は無重力
考えることなく白色レグホン
甘いところばかりを見せている明日

松江市 藤井 寿代

無料で配るキミの笑顔が眩しくて
地球よりデッカイ望み抱いている
真夜中の饒舌すぎる製氷機
巻尺で計って植えるトマト苗
鉤裂きが貴男の返事だったのね

松江市 松本 知恵子

新緑のきらめく森で湧く力
懸命に生きた証の杖の音
厄介な返事ひと晩置いてみる
あじさいに三度目の雨姑去って
獣道増えて笹百合摘めぬまま

松江市 松本文子

出世などせぬが故郷に顔を出す
その先は書かぬ忘れた事にして
迷うてはならぬ私はここに居る
そつと咲き散る花偉いなと思う
早口ことばで皆んな素通りして行った

出雲市 伊藤 玲峰

病む友の笑顔見たくて手を握る
消えそうな命をそつと撫でてやる
「また来て」と縫る眼に頷いて
寂しいね空も涙を堪えている
甘えまいまだ動く手や足がある

出雲市 岸 桂子

すんなりと赤くはなれぬサクラランボ
善人に化けているから肩がこる
糸切っていつか翔ぶ日のオモチャ箱
自分史の途中にあった水たまり
詰め過ぎを嫌がる脳と冷蔵庫

出雲市 小白金 房子

政界の嘘が哀しい子のしつけ
どの道を行っても青葉類なでる
そろばんの弾く音よしまだ呆けぬ
赤紙を知らぬ若さの長い足
一枚の白紙希望と書く楷書

出雲市 多久和 敬子

賑やかな食事昭和の大家族
雑談が弾み決め事また明日
大人でも「ちゃん」で呼び合うクラス会
粘り勝ちやつと射止めた福の神
雨風に耐えてきれいな花になる

雲南市 菅 田 かつ子

趣味ですと夢中になつている深さ
世知辛い時世ですねとワンカップ
美しく咲いた薊に触れた悔い
サンキューと言えばにつこり振り向かれ
病み上がりの夫の背を拭く哀れ

雲南市 松 本 昌

過疎地こそ人間らしい生きる道
夜回りがあり安心の町に住む
許されて許して生きた八十年
臓器一つ摘出されて生きている
弱点があり愛される地域の和

雲南市 松 本 はるみ

これ程に生き長らへし昭和の子
辛いとも思わなかつた少女の日
あつさりと逝きたい青葉のゆらく頃
人生は無限の中のひとしづく
今さらに来し方の道うねり道

岡山県 池 田 たか子

野の花を供え地蔵と笑い交わす
神様の試練時間が足りませぬ
親と子の解けぬバズルが重くなる
バーゲンの派手なブラウス鍬をふる
川柳が何だかんだと輪がぬくい

岡山県 高 岡 茂子

健康本ならべるだけで医者がよい
友との遠出「楽しかった」と独り言
なければ不便使えば不安免許証
雑草もみみずも土にしがみつき
孫にほしいこの雑草のたくましき

岡山県 田 中 恵

リサイクル出来ぬ頭がいとおしい
駆け引きの下手なポチですまつしぐら
天然の母は犬語も聞き分ける
ふらふらとするなど影に叱られる
苦も楽も鏡の中で黄昏れる

岡山県 山 縣 のぶ子

俺の飯まだかとタマがつきまとう

負けて勝つ夫婦相撲の半世紀

腹割って友と川柳語り合う

スキップで西へ東へ稽古事

ほんやりとしていて何故か人気者

岡山市 工 藤 千代子

紫陽花が夢二の色で咲いている

梔子は金子みすゞの香りさせ

向日葵はまだ幼くて工藤りこ

母に似たコケシを買っただけの旅

炊きたてのご飯みたいな夫です

岡山市 丹 下 凱 夫

お歳ですねと言われるとムツとする

わたくしのパワースポットです トイレ

あじさいの藍の深さのひばりの忌

一途さのその一途さのかたつむり

あじさいがとても綺麗ですねと かしこ

岡山市 永 見 心 咲

心斎橋歩くパワーにぶつつかる

隠したい背中ばかりが覗かれる

青空に羞じない様に歩き出す

寿命ですと引かれた線のどのあたり

まな板のくほみも鍋の焦げ跡も

岡山市 前 田 恵美子

慣れ過ぎて苔むす妻の座を洗う

もう朝か目覚しのベル鳴っている

梅の実がコトリと落ちて塩を買う

墓もでき思う存分翔んでみる

母の服5年吊して片付ける

笹岡市 藤 井 智 史

熱くなれ恋はいつでもイリュージョン

フレッシュな未来に跳ねているワタシ

一本の道じゃ物足りなく思う

カップルを見ると心でアカンベー

友だちが皆ザビエルの顔になる

広島市 岸 本 清

食レポで不味いと言った人はない

甘くても汚い店は入らない

CMと同じサブリでこの違い

シャンプーもヘアブラシももう無縁

ここだけの話は羽根が生えていた

竹原市 石 原 淑 子

のほほんと生きて時どき悔いの中

花を愛で料理を愛でて空の青

とりとめのないはなしですバラが散る

ダブル虹孫の未来へ目を細め

異常無ししっかり食べと言われても

竹原市 岩本笑子

菓飲む朝のパンですお静かに

言いたい事飲み込んでます正座して

花言葉ひとつ覚えてテレビ消す

ありがとうカーネーションは無言です

健康診断あなた自信はありますか

松山市 古手川 光

麦の秋パッチワークになる伊予路

公務員の辞書から公僕が消えた

国会答弁朗読会じゃあるまいに

認知症検査政治家にも役人にも

平成の水戸黄門は居ませんか

松山市 宮尾みのり

山野草そつところに添うてくれ

くだらないことは忘れぬ脳のバカ

友だちは皆ガラケーで仲良しで

箱根別府いいえわたしは道後の湯

向島の空家は他人事でない

松山市 柳田 かおる

ほめられた記憶がポケットの中に

かんだんな円がきれいに描けない

南窓開けてジェラシー吹きとばす

巣立つ日が近いツバメののどぼとけ

泥付きを選ぶ野生の味がする

大洲市 中居善信

テレシヨップもう縁のない物ばかり

焼鳥屋久しく行ってない傘寿

定位置のはずを探している眼鏡

まだ妻が妬いているから大丈夫

太く短く絵にして君は旅立った

西予市 黒田茂代

黄の椿咲いてるわたくしの浄土

約束したようにダリアの芽が覗く

木苺を摘み童心の中にいる

ばらの香を沈め一日小糠雨

人送る五月の緑さやぐ日に

西予市 西田美恵子

雨には雨風には風の彩が有り

教科書のような女で肩が凝り

端っこを歩く男を油断する

私の紐を最初に掴んだのがあなた

完熟になってトマトの意気地なし

高知県 小澤幸泉

七十余年神の支えと妻の鞭

紫陽花を植えし友逝く団地道

夢いっぱい両手両足両カバン

何人もの笑顔を闇に捨ててきた

孫五人あと三人は生まれそ

東かがわ市 川崎 ひかり

大切に生きた今日へありがとう

断ち切れぬ思いひとすじ拉致家族

鮎を吐くその目切ない鵜飼い船

切ないネ嫉妬の文字も女偏

街の水飲んだ子郷へ帰らない

北九州市 小松 紀子

うぐいすの鳴き方うまくなりました

年かさね無いものねだりやめにする

夢ひとつ生きた証しをのこしたい

しんこくに考えない方がよいよ

これで良い私の歩幅みえて来た

唐津市 坂本 蜂朗

群の中程を泳いで今日も無事

非売品と書いてあるので欲しくなる

二十年影も形もない更地

妻の愛酒が次第にまよくなる

惚れているので我慢する深呼吸

唐津市 山口 高明

十三仏の慈顔拜謁薬師堂

雷神もたまに成される粋なこと

入院の母が口説いた僕の妻

あの女の言動何時もスリリング

受話器の向こうへ律儀あたま下げ

熊本県 岩切 康子

表賞金会員みな釣になる

お土産の重さは愛の深さかも

撰生の反省ばかり血糖値

貯め日記思い出せないボールペン

おやつには胡瓜トマトに換えました

熊本市 杉野 羅天

箒草主人のいなままに生え

並で良い並の寿命が欲しいから

マドンナが誇る言葉の棘の数

太る筈です一口が多過ぎる

詭弁が飛び交う社会の上層部

沖縄県 森山 文切

可能性すらも絶たれて折れたバラ

黒塗りの書類西城秀樹死ぬ

試し書き覇気が溢れるボールペン

ストレッツしながら想う君の鼻

十年前の自画像に睫毛足す

札幌市 小沢 淳

男の沽券背筋伸ばして空元氣

人間が一番恐いのはヒト科

銭湯というオアシスが消えていく

陽は西に長い旅路もあとわずか

サラリーマン終点はどこ根なし草

弘前市 浅田隆樹

妻が棲み娘も住んで僕は居る
画面には写らぬ僕の苦勞性
怠け者ほど人生問いたがる
医者言う事はだいたい当てられる
チャーシューと孫のメンマを交換し

弘前市 稲見則彦

アスバラの甘さゴーヤの苦さ好き
暮らしぶり現状維持がやとです
わたくしをわたくしにするオノマトペ
繁榮のあの街この街猫の街
四捨五入されてばかりで進めない

弘前市 今愁女

仕合わせな寿命^{いのち}終えたしスクワット
快調に朝の百回スクワット
リモコンで社会の窓をあける朝
天気予報に外出予定組み替える
縮まずに一日一回外に出る

弘前市 須郷井蛙

ワタシバカ眼鏡忘れて無重力
洪水も早魃もなし天の川
採り立ての野菜美味しく朝の卓
教科書を見ながら出来た大根葉
修学旅行全員参加拍手する

弘前市 高橋洋子

茶柱は立てぬ抹茶の自尊心
お人好し貧乏くじを引かされる
きっぱりとノーとは言えぬ恩の数
この先を語れば愚痴の海に入る
歯車が未だ錆びずにダイヤ婚

塩竈市 木田比呂朗

父母へ言い訳ばかり盂蘭盆会
真夏日の子報にサブリ確かめる
仕舞湯で一句浮かんで明日も晴れ
免許証ニュースにまよい深くする
曝露記事いつも美味しい週刊誌

男鹿市 伊藤のぶよし

世渡り上手ドミノの輪には加わらぬ
事実は事実わたしは私隠せない
草草と書いて残り火たしかめる
揺れる葦かぜが詩になる色になる
待つのは苦手ハチ公に譲ります

横浜市 菊地政勝

医者を替え明日の世の中見てみよう
欲しいもの溢れていてもままならず
兄さんが仕切る卵のかけご飯
都合よく忘れてくれぬ過去のミス
最後だという同級会へ若作り

さいたま市 星野育子

盲導犬遠巻きにする電車内
周囲には気にせず伏せる盲導犬
選曲はどの御三家か世代の差
空耳か家族の声がする空家
パートさん募集広告さん付けで

上尾市 中村伸子

雨音がシヨパンに合うという噂
A型と何故か間違えられている
母の歳米寿遠いか近いのか
非通知のワン切りまたは午前二時
新幹線を懸けた正義感

朝霞市 前田洋子

撮ってくるいつか乗りたいなつ星
車体には私が映るなつ星
前に行く亡夫と同じスニーカー
来るのですサブリのチラシ亡夫宛
久々に取ってずっしり紙の辞書

東京都 川本真理子

本気度を確かめられる夏がくる
くさり二本分の自由を持って余す
つい愚痴が出る幸せだからだろう
パッドエンドも覚悟している風さやか
生きる意味あいまいになり裏表

八王子市 川名洋子

母の日に思う存分母の味
無防備な後ろ姿に癒される
春風に乗れない羽をもて余す
ポケットを空っぽにして春の野へ
また友がきつとあの世でクラス会

愛知県 早川遯行

車庫入れにS字まだまだボケてない
一向に減らぬ酒代防衛費
駅弁を二人で一つ老夫婦
仏像に憑かれ京都に移り住み
人混みを掻き分け半跏思惟の像

犬山市 金子美千代

ぬぐってもぬぐっても漠然とした不安
待つて下さい脳の回路を繋ぐまで
おしゃべりが一番アンチエイジング
お誘いはやっぱりあなたから欲しい
過疎のよう本屋が0になった町

犬山市 関本かつ子

雑用という一日の休息日
終わりたい口調と分かる電話口
頂いた豆でお返し豆ごはん
家族葬とは思えない参列者
オバサンのコーラスどこか演歌調

鈴鹿市 小河柳女

世の波にふわりと乗って恙なし
過去からびよんと現れた教え子

男女の粹越えて働いた疲れ

道は幻分け入っても分け入っても

言霊を探し探して夜が過ぐ

富山市 島 ひかる

熊くまのいの胆を飲んで元氣を取り戻す

トランプの一声世界震わせる

神世から続く日本を釣り上げる

清正や漱石みやげ話など

仲間から川柳大賞出た報せ

可児市 板山 まみ子

お互いの失敗ネタにつつきあう

パンだけを買うつもりでも肉野菜

家計簿に無駄があるから生きられる

上に立つ人の条件嘘が好き

梅雨寒がちよつと嬉しい夏嫌い

(前月分) 高知県 小澤 幸 泉

戦争はもう止めにして鐘鳴り止まぬ

義母眠るそのままでよいありがとう

新しいいのちささがるまた一人

金婚の記念の日まであと五年

青春はまだ終らない靴磨く

水煙抄

(つづき)

静岡市 渡辺 芳子

山奥の点在住宅どんな人

山奥の稲田の畔の菖蒲園

散つてない心に咲いてる花がある

クロバー四ツ葉押し花幸せを

真つ白い画布へ迷わず夢を描き

揉み手する笑顔の中にある打算

ヤジロベエ風をつかんだ跡がある

ピカソ展首が斜めになつて出る

(前月分) 京都市 櫻崎 篤子

いい土になるよう故郷へ戻る

孫の声きけばお金の要る話

気が付けば私三食昼寝付き

年金があつて急場が無事に済み

第167回 大阪川柳の会

日時 8月7日(火) 午後1時開場・午後2時締切

会場 大阪市北区梅田 駅前第二ビル5階
大阪市立総合生涯学習センター 第一研修室

宿題 (各題2句)
△「はらり」安部 美葉選 △「自慢」確氷 祥昭選
△「少し」藤井 宏造選 △「今」森中恵美子選

会費 1000円 欠席投句 8月6日まで 会員に限る

会員募集 年会費千円 会報を年6回奇数月にお届けします。
〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4-706
本田 智彦 宛

川柳塔の

川柳讃歌

184

上方芸能評論家 木津川 計

残念です縁切れたと笑う医者

工藤 千代子

あらゆる商売人、事業家のお礼のことはお越しを「である。しかし、医者だけは間違ってもそうは言えない。完治しての最後の挨拶も難しいが、右の医者は賢明だ。「縁切れ」と言い、残念がる。以前「順調な老化と言われてホッとすると詠んだ川柳塔人がいた。私のかかりつけ医に教えると感心して使い始め、「好評です」という。千代子さん、今度は貴女の句を教え、好評を広げてもらいましょう。

微笑みを忘れていたら四面楚歌

谷口修平

生きてゆく辛さである。だから橋高薫風は「人の世や 嗚呼に始まる広辞苑」の名句を残した。涙なくして人の世は渡れないからオー・ヘンリーも「人生はむせび泣きとすすり泣きとほほえみから成り立っている」と綴った。

人生の三分の二を占める涙は、しかし残りのほほえみによって救われるのである。今春逝った広島カープ・衣笠祥雄の口癖は「スマイル、スマイル」だったという。修平さん、今日からはスマイル、スマイルで挽回しよう。

定年で初めて入る社長室

大坪 一徳

定年でNTTを退いた私の同輩は、入社式で壇上の社長を見て以降、一度も社長を見なかつた。社員総数二八万二〇〇〇人の中の吹けば飛ぶような将棋の駒である。一徳さんは会社を去る日、社長室へ入れてまだよかつたのだ。涙を飲んだ日もあつたらう。だから一徳さんはこうも詠んだ。「悔しさは発酵させてパネにした」下積み之苦澁そのパネが一徳さん、貴方の心身を強靱にしたのです。これからは人生の解放区で自らが主人公です。

鈍行に変えて楽しむ旅ふたり

内藤 憲彦

『阿呆列車』シリーズの内田百閒は、どこへゆく当てもなく、ただ列車に乗るためだけに終点までのり、そのまま引き返してきた。今号に福西茶子さんが「裸馬にも二人乗りバイクにも乗った」と詠んでいるが、無鉄砲に疾走した若い頃は遠く、年老いれば鈍行が生理にも合う。百閒のように気取った旅が一番得意。憲彦さん。振り向けば古女房がいて、で

いいのです。ときめきよりやすらぎです。奥さんとの鈍行の旅をいつまでも続けて下さい。

吹き溜まりですが仲間という安堵

穂谷 和郎

「出世した友の話で座が沈み」と競争社会の真実を衝いた川柳家がいた。だから「友だちがみな貧乏でありがたい」（岸本宏章）の句である。そんな吹き溜りの男たちが貧乏神を追い払おうと陽気に騒いで追い出したかった。ついに貧乏神が逃げだそうとしたから「あんまり陽気やらから出ていくんやな」と聞くと、「いや、たいへんおもしろいから仲間を連れて来るんや」。和郎さん、こうなったら貧乏神を巻き込んで、陽気におもしろくいこう。

側近は誰もいません婆ひとり

永原 昌鼓

女に仕える男の側近もいる。吉本興業を大成させた吉本せいを描いた「花のれん」で山崎豊子は直木賞を受賞した。せいの側近が通称「ガマ口」だが、まことに忠実な働きぶり、そのせいが息を引きとるとガマ口は「わてはご寮人さんが在はらんと」と嗚咽するのだ。昌鼓さん、「あなたが在はらんと」と泣いてくれる「婆」さんの側近が在てくれる幸せです。面倒見のいい側近を大事にしてください。

自選集

小島蘭幸

熊本城とクレインと梅雨の青空と
会えばすぐ僕のでのひら見るひとよ
逆風を楽しむこともある扇子
面一本やがて握手になるだろう
雑沓をひらりひらりと抜けて初夏

往ったきり

八木千代

「たましいは現世のままよ」との説も
「一切は空 無になるだけさ」との論も
有れば佳し 無ければそれはそれで良し
往ったきり誰も戻らぬ界だから
ならば名残の景をじつくり見ておこう

山本希久子

半分白いわたくしの日記帳
どこから来てどこへ行くのだろう家族
それからの私に暗い日が続く
今日よりは明日の晴れを疑わず
仏壇の前では油断してしまふ

板尾岳人

抱き合えばバリバリ音がする背中
ほんまもんの愛はいつでも拗ねている
生きている間に恋をしてみたいし
人間の貌して恋をするタヌキ
嬰兒の拳の中にある宇宙

川上大輪

赤い糸少し短いようですね
大切な左手だけ頼りない
そつとしておこう草にもある命
水の無い川で溺れることもある
あたたかい言葉ばかりが突き刺さる

木本朱夏

磯の香に向かい歩いてきたけれど
間違えたらしい潮騒遠去かる
旅に居ていまは迷子になる時間
身の内を寄せては返す波の音
捨てられた魚網に朽ちている時間

小西雄々

軍隊の夢はまだ見る年は百
貸衣装が濡れる雨傘持っていない
初恋を宝石箱から出して見せ
一年の速さへ何も言わないよ
頭陀袋他人に見せぬ物もあり

齊藤 焔

白神の森で五感の振子を巻く
天翔ける夢ばかり見る木馬たち
大輪を咲かせてくれたのは葉っぱ
手植えた子らの田んぼにある未来
倒木のいのちこもり茸付け

新家 完司

鏡戸を開こう外は春の丘
前頭葉あたりに黄砂たちこめる
薄物が眩しい初夏の美魔女たち
子や孫に見せてはならぬ千鳥足
二日酔い酒豪酒仙にほど遠く

高瀬 霜石

九回の裏にやっぱり泣いた夏
父さんもいっしょに悩む夏休み
検診の終わった後の生ビール
ドーナツの穴は哲学的である
ボタン押しましたー黒い雨降りました

竹 治 ちかし

気が付かず老けた仕種も父に似る
息ひそめ待つ一分の長いこと
もう少し生きる予定を抱く日記
記念日と互い知っても何もなし
妻が好き子が好き知らぬ里も好き

津守 柳伸

解禁を待たずいたたく鮎料理
マンネリを破る夕日へ旅ごころ
水切りを欠かせぬバラが生き伸びる
新ジャガも新玉ねぎも調理待つ
雑草と悪戦苦闘蟬しぐれ

都 倉 求 芽

無理は承知プランだけでも楽しくて
体中の穴から老いの弱さ漏れ
老いひとり心の仕度くり返す
生年月日書きたび年齢のしかかる
雲切れたところから明日が夕焼ける

土 橋 螢

いさかいを起こしてからの梅雨模様
ふとそこで拾いし噂 夏の蝶
夏帽の埃りはらって旅終る
待たすこと待つこと平気ビール飲む
鉄びんの湯を大切に梅雨ごもり

西 出 楓 楽

告知受けた息子へかける言葉なく
悪夢なら覚めて欲しいと願う日々
心から笑ったことがない二年
神仏を恨んでみたり折つたり
五十六まだこれからという歳に

仁部 四郎

単身のババ方言でメールする
タレントの方言に付くカッコ書き
県人会方言というバスポート
方言が似合う知事だが国に負け
パワハラか東京弁で押し付ける

前 たもつ

へのへのもへじ楽書帳の一ページ
園児の散歩三組も会って今日は吉
老化順調言うて自分に言い聞かす
精いっぱいのお後孫子に見せておく
想定外家族で集う礼拝堂

政岡 日枝子

大空のその一角で見るサツカー
山ほどの夢が小さくなる齡
心開けば犬にもわかる米子弁
何もかも許せるおもい病みあがり
片道の切符が終いの船だろう

三宅 保州

窓開けてほしいと言っている楳
ほんとうのことを言ったら波が立つ
嫌いではないとは好きでないのです
ひとり旅淋し二人は煩わし
自分探しの旅で自分見失う

宮西 弥生

その時の渋茶は耐えて来た証し
人間も鬼も越えて来た火も水だ
花束を譲って世のため人のため
ダルマに眼入って坂がくずれ出す
最高の仲間と交すびつくり酒

福士 慕情

おらが郷さくらとりんご岩木山
空よりも川で泳いでみたい鯉
木の芽和え亡母のレシビ生きている
枝豆にビール嬉しい初夏の風
夕焼けが明日も晴だといっている

村上 玄也

また明日がくると信じて生きている
男にもアラフォーが居て焦ってる
タツチの差嗚呼悔んでも悔んでも
ふざけたようにしか礼言えぬ御仁
ニュータウン五十年経ち老タウン

森山 盛桜

巻鬚の力強さに負けている
少しずつ亀裂を埋めて行くことば
離れたり付いたり不可思議な身内
おじぎ三種をしなくても生きられる
何ハラか解らぬほどに増えて来た



森の集句

「選外人生」

不二田 一三夫

仁義を忘れ梅ぼしの味を忘れ

選外というペンだこを頼りにし

台本の負けアドリブへ拍手くる

笑ってるのは高座の二人だけ

チャルメラはやくざを捨てた男とか

女ごころへ土足で上がって来た男

熊がおじぎしてると人間が思うだけ

土佐犬の元横綱は飼いごろし

なんの字を引いたか遺書の横に 辞書

骨揚げが調理士だった箸さばき

1971年

ぼろぼろにしといて沖繩身請けする

狂乱の1974年

北まくらさせた姿の日本地図

誤植だらけ のような人と添い

なに考えていたのか わが家通り返し

(同人句集「川柳塔」昭和49年7月7日発行)

温故知新

『高杉鬼遊川柳句集』から

退職金たこやき屋ならできそうだ

偶然がまたやつて来ぬ宝くじ

大阪の雪に寝ている子を起こし

ロッキングチェアで悪い夢を見る

右を向けいから左向いてやる

バイキング戦後の飢えをわすれたか

万灯会あの世もさぞや暑かるう

母ちゃんの下着は誰も盗まない

うどん屋の恋も新鮮ではないか

天の川いじめにあつた流れ星

一票を狙う笑顔だ油断すな

法善寺 パワー戴く水を掛け

やわらかいてのひらだつた終列車

さくら咲くまでは生きよう誕生日

表札が傾いてますお父さん

下手くそな刀と思う斬られ役

地獄にも温泉があり如何です

あの世でも待つて下さる塔がある

水煙抄

川上大輪選

河内長野市 原 熊 知津子

まだ他人行儀な君と傘の中

不信がつのである太陽が揺れている

別れの日は突然空が落ちてくる

傷跡を隠す優しい夜がくる

友達になるには歴史まだ足りず

恋やがて仕立て直して愛となる

岡山県 小 野 美那子

一歩引きうるさい声を通らせる

逝くときや裸言うてせつせと貯めている

先生に誉められたくて石の上

銭の花残念ながら肥料ざれ

皮肉にも預けた財布ザルでした

やっと忘れたのに昔がうるさい

佐賀県 真 島 久美子

幸せな証拠だ人の世話ばかり

人として脱皮している泣いている

分を越えたところで砂の城消えた

侘び寂があつて静かに骨になる

生きるって簡単コンビニとスマホ

向日葵の愚痴もたまには聞いてやる

豊橋市 藤 田 千 休

記録には載らぬ記憶がまだ消えぬ

只者じゃないなお主の目の配り

五線譜に私の歌を囁かれる

大根と牛蒡が競う脚線美

耐震の我が家を軋ませて夫婦

断捨離が出来ない核をもてあます

西子市 井 関 はるえ

部屋に鍵子供が遠く遠くなる

しがらみが歩幅肩幅せまくする

淋しくて指切り待っている小指

滝のよな汗夏草と四ツに組む

背骨ガタガタ鳴りっぱなしの終電車

手の中で少し不安な紙コップ

倉吉市 岡崎 美知江

流し雛童女にかえる春の刻
考えを一寸変えれば風が吹く
砂塵舞う人それぞれの風の彩
行く道の仮説並べて悦にいる
座禅組み善人顔になっている
一〇〇均で使うお金は惜しくない

倉吉市 大羽 雄大

腕組みを解いてから会うクラス会
生命線揉めば伸びるかやっている
百均で万札使いすみません
もやもやが晴れて余白が広がった
梅雨入りに合わせ台風乗ってきた
プレゼントちよつと自慢の自家野菜

山口市 中前 幸子

紙風船ころころ追憶の中で
ほろ酔いの影が喜劇を演じます
風の街行方不明の主語探す
自己主張など許されぬ風見鶏
それなりの答えを探す炎天下
酸欠の街出払っている救急車

福井市 伊藤 良一

クラス会老化の位置を探り合う
明日の風はいる窓なら開けてある
老いの群れ増えても増えぬ介護の手

公園に子供が群れている安堵
人間を試す北風南風

新しい響きを探し辞書を繰る

大州市 花岡 順子

鳴き砂へ海の返事は波ばかり
黙秘権砂にもぐっただけの貝
ピエロにもオアシスがあるコーヒー屋
オアシスは母の心の中にある
十円の違いへ主婦の踏むベダル
新しい記憶さらりと抜け落ちる

山口市 青木 隆子

支援箱大きな声に誘われて
被災地支援日本も捨てたもんじゃない
スキップを上手く踏めない六十路坂
体力落ちウォーキングだけ死守してる
亡き父が時折背なを押ししてくれ
あいづちを打っているよなぬいぐるみ

福岡県 本田 さくら

今日明日はお一人様で超気楽
電池切れ時計に命与えねば
足の痛みあの石ころの所為にする
鍛えよう心がルスにならぬよう
進化する科学は夫婦置きざりに
このサンマ海で楽しく泳いだか

和歌山市 北原 昭枝

好きな道駆け抜けて行く青田風
途中下車しながら続くふたり旅
苦も楽も一緒にのんでいる菓
丸洗いこころ無にして命の灯
肖像画見守り語りかけている

和歌山市 定松 宏枝

太陽を見ると洗濯くり返す
髪型を変えると夫の世辞一つ
核家族ついに一人の四畳半
帰る家あると元気に働ける
大切にしてるからこそ距離を置く

和歌山市 西川 千鶴

頑張れと言われりや余計へこみます
二番目に愛していると言われても
合掌し釣銭もらう癖がある
邪念湧き最初の一步踏み出せず
紫陽花に移り気氣質見透かされ

和歌山市 福島 一雄

歴史的シンガポールの二人寄席
俄雨助けられますコンビニに
雨と風ままにならない好きな人
父の日に子等の魂胆何もない
目覚しの雀近頃何処に住む

岩出市 村中 悦男

点滴の残りわずかに出る焦り
看護師に好かれるような顔にする
入院を休養ですと励まされ
リハビリの長い廊下に夢を抱き
退院を自動ドアに見送られ

京都市 櫻崎 篤子

猫も友も逝って私を何故残す
友逝ってふり返ること皆涙
悲しさをまた乗り越えて生きること
子も孫もいてもわびしい日暮れ時
しみじみと手に取る古いヤジロベ

大阪府 小栢 こずえ

嫌だった仕事も出来て今日の幸
お世辞でも聞けばやっぱり良い気持
繰り返すうちに自信が付いてくる
いただきますこちそうさまで今日終る
マイペースいつまで続くこの暮し

大阪府 高木 道子

急ぐ道パトカー前で邪魔をする
香に埋もれ戸惑う夫の花魁
笑ってる遺影私の愚痴が浮く
雑用も潤滑油となり日々過ぎる
オレオレの幼稚な電話受けて立つ

大阪府 畑 中 節 子

物忘れブレーキきかぬ古い傘寿
どくだみの花の愛しさ鎌止まり
夕散歩鹿が顔出す山辺道
老いという言葉捨てて煙が待つ
山の色変われば風の香も変る

大阪府 磯 島 福貴子

若気のいたりはずした道を今もどす
難題の数独解けずもやもやと
逆転勝ち救ってくれた徳俵
美人薄命無縁の私白寿まで
六月の雨何故か紫良く似合う

大阪府 小 野 雅 美

少しだけ輝きたくて爪飾る
ジャンプ力鍛えて鳥になる途中
ホースから水撒き私だけの虹
上書きを重ね大きく見せる父
見え見えの勝ちを譲られ笑われる

大阪府 柴 本 ばっは

口げんか止めとこ今日は薔薇園よ
林檎もバラ科桜もバラ科不思議やね
ミニ薔薇のアーチの中で悪だくみ
棘はナイト薔薇に手だしはさせませぬ
王妃の名付けられ少し照れる薔薇

大阪府 森 廣 子

今夜だけ恋人にするお月様
太陽が泣いて沈んで行きました
友達のキリンに今日も会いに行く
ゆっくり行けば楽しい事にめぐり逢う
何時までも掴めないけど夢と星

堺 市 梅 木 澄 空

転倒し娘から自転車禁止令
飛び入りがやたら口出し混ぜ返す
勧誘のビール新聞替えました
詐欺かいな還付金ある言うてきた
老母見舞い帰ると言わず寝てる間に

堺 市 羽 田 野 洋 介

コミックならまあ落ちない読書力
最初はグーさてその次が正念場
飲むほどにアドリブぽんと飛んで出る
時間稼ぎそんな余裕はもうないぞ
まあまだまだ歳重ねても増える夢

池 田 市 上 山 堅 坊

歳なんか忘れて跳ねる恋こころ
スーパリーのラストタイムがよそよそし
若返る友とがやがや飲む時間
聞き上手胸の奥まで洗い出す
インフレが一番怖い年金者

池田市 太田省三

家中のガラスを吹いて梅雨晴間
各論になると採めだす親の世話

クラス会むかし話は順不同

五十回忌妣のすがたは割烹着

見たい絵を立ち止まらずに見ろという

泉大津市 磯野不二夫

言いそうだお茶でも飲んでやりすごす

ああ柳あの処し方は身につかず

今日もまた言葉のみ込み日が暮れる

退職後漂流防ぐボランティア

退職後会話の呼吸見失い

貝塚市 吉道あかね

梅雨晴れ間家事のスピードアップする

劳いの言葉が増える老いふたり

聞き違い言い間違いが多くなる

童謡に涙ぐんだり笑ったり

八時間ぐっすり寝れるのも若さ

門真市 坂本星雨

短いのも病院で待たされる

ナースの笑みの仮面が時にずれている

病得て丸くまあるくなりました

辛いとは言えず家族はなお辛い

飯の世と思う素敵なことばかり

河内長野市 穂口正子

天国へ続く階段もし有れば

意趣返しきっちりしてる小者なり

退屈だそろそろ孫がくればいい

退屈を埋める誘いにスタンバイ

欠けること互いに有って目を瞑る

高槻市 三谷白黒

逝ったのによく似た人に出会います

最後まで付き合いますよこの痒み

バス行ったまだ座っています御老人

おかしいな役人不起訴民は罪

物捜しこれも大事な日課です

豊中市 木藤こみつ

じゃんけんの透明性のある勝負

透明な氷はできぬ冷蔵庫

寂しいと言えば寂しさより募る

遅れてもいいやん来いと同期会

夕刊に遅れぬようにする取材

豊中市 齋藤奈津子

また今日も屋台の湯気に招かれる

目印に気づかぬ夫盗み酒

割り勘に空気読まない飲みっぷり

几帳面一円までも割る幹事

祭好き神輿追いかけてカッパ酒

寝屋川市 岡本 勲

お見舞いに行つてメロンを持ち帰る
酒が出てやつと本音にたどりつく

永遠の愛を誓つて別の墓地
幸せにすると誓つて逝つた夫
よくしゃべる口につけたい万歩計

枚方市 谷 英也

一万歩命の限り続けたい
ランドセル舞う花びらが嬉しそう
散り際が美しいよと言われたい
潔く散りゆく花に応援歌
悪がきが慌てふためくゴキブリに

神戸市 玄 番 美恵子

笑う日があると信じてする介護
母の日は母を偲んで母の味
消えそうな記憶を辿る脳回路
パスポート取つて老後の英会話
足腰に伺い立てて取る旅券

神戸市 田 本 古 鈴

夏の陽は影法師すら日焼けする
ひまわりの大きな顔が気に入らぬ
エレベーター乗っているのは蚊と私
愛してゐるたまに言つては驚かす
こけるより起き上がる数かぞえよう

神戸市 敏 森 廣 光

徒競走孫がシンガリ誰に似た
子供らの笑顔が明日を切り開く
スーツ脱ぎおしゃれ心を試される
人生に勇気をくれるウソもある
コーヒーよりお茶にしようよ梅雨の朝

神戸市 山 根 弘 華

日向ほこ笑い話でもりあげる
貸しかりがなくて平和な老いの日々
笑いから生きる美学を教えられ
歯がゆいがあるの、それで、でてこない
生きるつてこんな事かと空見あげ

尼崎市 近 兼 敦 子

一言が魔法のように効いてくる
笑い声元気の素をいただいて
リハビリになつていますとスマホ持ち
二十年やつと飛びたつ鳥になり
上手いこと言われ踊つてしまふボク

宝塚市 太 田 としお

男ですウンと言つたらウンである
惚れ込んで妻の家に成り下がる
ゆつたりとしてられるのもあと僅か
肩書を外すと唯のおじいちゃん
この頃は親しくしてゐる紙オムツ

宝塚市 岸 田 万 彩

三田市 馬 場 貴美江

ジャンプするために必要だった敵
ネクタイをはずしてからのマイペース
雑草と喧嘩する気にならぬ梅雨

伴侶なしちよつぱり不安老いの旅
風を切り電動カート老いを乗せ
マイルーム狭いが心底落ち着ける

強弱のタンゴのリズム杖の音
ハードルを越えて生れてきた自信

百均で道具揃えた新世帯
官僚は都合次第で記憶消す

三田市 九 村 義 徳

三田市 東 内 美智子

他の子も叱った昭和懐かしむ
上野駅金の卵が居た昭和

黄砂花粉話題消えたらも早梅雨
虫偏は嫌きれいな虹は虫偏だ
宝くじ買ったことなくとびこめぬ

ペランダで甍の波を恋しがり
オスブレイ見上げて泳ぐ鯉のほり

墓参り本家の敷居高くなり
お茶席の菓子紫陽花おちよば口

三田市 幸 田 厚 子

三田市 松 本 ゆかり

うちの織緋鯉が上で仕切ってる
何くそと腹をくくって今がある

逢いたくて窓に小石を投げた夜
逢いたくて駅で二時間待った頃
人の世の余白でそつと暮らします

ロタンは座り私寝そべり考える
目標があなたですとは恥ずかしい

母娘旅こんな素直な母だけ
予定ない一週間で風邪をひく

三田市 辻 開 子

鳥取県 飯 野 菖 子

ほしかった庭付き家も今負担
ゴールない介護疲れが見え隠れ

今日の夢明日に続けと生きている
日射病塩の力で予防する
痛くても歩きなさいと足が言う

未っ子の気分のままで古希生きて
雨の日は無駄な会話で長電話

怪文書届いたバラも散る覚悟
ヨレヨレの服も若い日恋をした

雑草が生命力を見せつけて

島根県 原 徳 利

九回の二死満塁にコマースヤル
駈糸切つて気ままなひとり旅
念珠ロザリオ御幣皆平和主義
時どきはいらさせるゴミになる
悪友は憎たらしいがいいやつだ

鳥取市 大 前 安 子

白髪が混じる呼び名はちゃんのままでけど
迷う時青い自分を呼び戻す
今朝の顔迷いが解けた眉キリリ
プランコへ逆らいを止め揺れるまま
墓へ花告げ口なんかもうしない

鳥取市 副 井 裕

懐メロで戦後の私目を覚ます
露天風呂句作のヒント湧いてくる
日記帳改ざんしても罪はない
この頃は激しさよりも緩さ好き
出欠はコスバ考え決めている

倉吉市 田 中 けいこ

自転車で居眠り運転ひとり旅
歩き方変える腰曲がらぬように
湧き水を売り物にするどこか変
脳に皺ふやす方法ないものか
同級会聞いではおれぬ孫自慢

倉吉市 堀 かずこ

窓の外雨がしとしと泣いている
努力するいつかはきつと報われる
晴天の空を見上げて感謝する
苦勞したあとに幸せきつとくる
バカにされ言い返せない気の弱さ

倉吉市 若 松 由紀子

特別な才能ないが生きている
三食をしつかり食べて一万歩
好奇心のかたまりですよ八十路坂
大南瓜持てあましてる老い独り
茶碗一つ洗い独りの長い夜

米子市 池 田 美 穂

だるま程我慢が足りずすぐ転ぶ
くたくたに煮込んでおいた今日の愚痴
セクハラもパワハラももう許さない
お詫びとはかくあるべしと教えられ
生命線アイロンかけて伸びてきた

米子市 伊 塚 美枝子

こけた事他人のせいにして怒る
何だっけ同じ所を行き来する
旅の宿幼馴染みは無礼講
早過ぎる夏日に身体追いつかぬ
梅雨晴れ間洗濯物が背伸びする

米子市 見山温子

終活の話題で暮れる今日は雨
ちらしげし木の芽竹の子山の味
意外にも仲良し夫婦に見られてる
草餅に遺影も仲間お茶をする
見栄張るまい空財布振り孫に見せ

瀬戸内市 宮宅 比佐恵

ゴミ一つ拾って今日の善とする
明日という青信号を待っている
嬉しさは亡夫の色つぐ子に安堵
人の字のわかる独りの日暮れどき
生き上手少しずらして風を待つ

尾道市 小畑宣之

出会う人みんなが友に見える日よ
やれやれと自分はやらす囃す奴
手配写真にそっくりなので苦労する
子育てに野良猫夫婦苦労する
朝食後家族揃って葉飲む

尾道市 日谷 寛

十戒に背いた恋が切り絵めく
鋭角の恋が歪んで影絵めく
笹舟の恋が流れに身をまかす
神の手にあずけた恋の観覧車
七夕に背中合わせになった恋

竹原市 若年幸子

百段の汗を和ます磨崖仏
浄土とはきつとフリーなところなんだ
傘寿会イキイキ持病どこへやら
晴れマーク七十路の背押す万歩計
雨音へ電話の友の咳続く

府中市 岸田 武

口ほどに怒ってないと見抜かれる
しみじみと話せば友もしみじみと
種蒔けば使い走りのような雨
串刺しの鮎生きている焼いている
胃薬を飲み忘れても変らない

三原市 笹重耕三

雨の日の傘はあなたのためにある
雨の日の暇をつくってやるシューズ
何もかも淋しい雨の無人駅
知恵の輪が解けぬままの老い独り
自分史の余白がたらればで埋まる

徳島県 小畑定弘

屯しても老いを分けあう喫煙所
バスワード忘れてボクに戻れない
詩に耽る老人だとは思うまい
油切れしたのか骨が軽く鳴る
生きてます以下同文のボクだった

松山市 郷田みや

ゴールより出口さがしている私
豆苗は律義に窓の方を向く
納得がいけば乗ります泥の舟
迷いながらゴーヤの蔓が伸びている
アジサイが治してくれた偏頭痛

今治市 渡邊伊津志

蹶いた小石はやはり運命か
念仏の替りに聴いている演歌
少しづつ世間とずれていく齡
さほど差は無いかも知れん虫と僕
必要とされて動いて空元氣

沖縄県 宮すみれ

すきま戸に退屈風が悪さする
胃袋へ五大栄養ごっちゃませ
悩ましか引き出し奥の居候
試着した可愛い服がみんな好き
すき焼きの一切れ肉がかくれんぼ

那覇市 前川真

重たくて母の匂いのする手編み
知らぬ間に父のバトンが袖にある
吉と読む割った卵の黄身二つ
独走を周回遅れでしてみせる
一幕を足してみたいと跳ねる靴

札幌市 斉藤宏子

終活を終えてバトンを子に渡す
タンポポの野で園児等は蝶になる
涼やかに素足で踏んだ春の草
独り寝の闇でささやく亡夫の声
シヤガールの青生き生きと北の初夏

横浜市 川島良子

記憶と記録真実闇に葬られ
逃げ道がいくつもあつた大家族
肝心なことは聴けずに電話切れ
いい波長同じところで大笑い
健康を自慢していた突然死

千葉県 廣瀬良磨

夏がくる角度を変えて見る鏡
途中下車固い靴紐解いてみる
肩車なにやら夏の風が吹く
大都会人影踏んで生きている
本当は南の島で暮らしたい

豊橋市 西郷紀美代

気を使い金も使つて孫を見る
アバウトが許されなくて肩が凝る
そろそろと見直しせねば遺言書
ケーキより現金を待つ誕生日
向きになることもなからう趣味の会

和歌山県 森 下 よりこ

剪定の仕方ですつき見事咲き
道に添う田の一筋に花を植え
サスペンス映画楽しむ雨の午後
あじさいの存在うれし梅雨に入る

和歌山市 倉 橋 悦 子

気怠さが居座る雨の昼さがり
風邪の神せめてドアーをノックして
バブル期のとんとん拍子夢のゆめ
衣替え明るさ求め白ブル

和歌山市 佐 藤 ま き

ピーマンに虫の芸術葉のレース
ミニトマト虫は好かぬか鈴生りに
不覚にも根を蔓延らせ苦戦する
もふもふの毛虫草引き中止する

和歌山市 鍋 嶋 澄 子

誘われて新緑のなかけむる雨
まだ私人間砂漠つき進む
ありがとう気遣いにおう温もりを
逢いに行く貴女の顔を見たいから

和歌山市 福 呂 秀 子

再認識真つ直ぐものを見て歩く
増え過ぎのローズマリー風呂の中
カルシウム気に掛け爪はよく伸びる
梅雨入りで紫陽花個性光らせる

京田辺市 北 野 クニオ

トコロテン夏の木陰でひんやりと
少年の自慢の宝甲虫
先延ばしすればする程付けは大
真桑瓜絶品の味炎天下

大阪府 神 野 千恵子

向い合う二人スマホでする会話
建前で終ってしまう自己主張
プライバシー個性とともに薄れゆく
断捨離で先ずは自分の置きどころ

大阪府 中 内 孚 彦

高僧の不倫に世間ほつとする
貞節を讃える石碑角が欠け
退屈は進む日時計見つめてる
運命の出会い生憎空財布

大阪市 田 中 廣 子

節目には夫かれにいつでも助けられ
年重ねもやもやとなる思考力
足を折り救急車に乗れました
友見舞老いのむなしさしみじみと

大阪市 中 島 栄 子

友の庭花 水道代が五萬だと
声だけはリハビリの友お嬢ちゃん
頼まれれば断り言えぬ難しさ
ほんちよつとの事出来かねる老い一人

早三年弟偲ぶこと頻り

大阪市 樋口 眞

順調な梅雨入りまずはほっとする

体調のたまに良い日は動き過ぎ

懸命さ光るアマチュア写真展

大阪市 前川 善之

あじさいに梅雨が来たよと教えられ

昭和生まれは貧乏ぐらい頑張れる

人生は楽で過ごせる道は無い

この夏は酷暑多いと気象台

大阪市 松田 聰

嘘に嘘重ね重ねて首絞める

嘘をつく堂々とつく偉い人

嘘に慣れ無関心こそ恐ろしい

その場限りの嘘が嵐を呼んでくる

大阪市 横山 里子

胡瓜もみ見知らぬ国の蛸入れて

猫の目をからかっている金魚たち

ライバルと一緒に唄うデイケアー

生家跡土の匂いを嗅ぎに行く

堺市 古川 光雄

何に効くわからぬままに飲む薬

パソコンにやっとなつと慣れたら次スマホ

妻吐息何か不満がありそう

鬼ごっこ出来ない子供いない街

ないないと言えば言う程ある不思議

対話こそ値千金道ひらく

隠してもなお隠しても出る証拠

国憂い正義キャスターひとり逝く

堺市 大和 峯二

カラフルな薬を飲んで元気です

微笑は化粧にまさるお母さん

毎日が亭主日曜妻苦痛

十指では足りぬ亭主の良い所

泉大津市 助川 和美

新聞で折った宛に拉致の文字

紫陽花の色香に負けて梅雨になる

せつかな夏が狂わす花暦

終電車夜のしじまに消える音

河内長野市 中島 一彌

交流戦バのパワフルにセはしびれ

ゴキブリで諍いやめて挟み撃ち

日々日曜向こう三軒両隣

同総会浄土の支部は数が上

河内長野市 渡邊 修

異常気象雨乞いすれば台風か

五月病晴れ間見ぬ内梅雨入りか

湿っぽいボーナス前のこの財布

教育の現場に利権許されぬ

吹田市 岩口 のぞみ

豊中市 荒木郁子

お遍路さん札所めぐして山歩き
山開きラツシユアワ一の登山道
断捨離にとことん気合入れてます
煮え切らず息子結婚逃しそう

豊中市 貝塚正子

今夜だけセコムはずしてあなた待つ
躓きつつ越えて行こうか八十路坂
根性ある小骨だ喉に突き刺さる
拗ねているいつもと違うタマのヒゲ

豊中市 源田啓生

愛してるけれど動かぬこの身体
カムバック叫んで戻る過去ならば
零したらあかんビールを直ぐ零す
盗み聞き猫も大きな欠伸する

羽曳野市 磯本洋一

優しさは空とそよ風にぎりめし
反戦をとなえる国に明日がある
のっそりと動く私はフリーマン
七五三鏡の前を行き来する

枚方市 坂本ミヨノ

寂しさを見抜かれまいと指ブース
大吉に調子に乗って買い過ぎる
老人会若いと言われ遊びぐせ
青春が早くに去って卒寿来た

枚方市 佐藤武紀

行き過ぎた指導ではない狂ってる
失うまい信用だけはあの世まで
失敗をそつと包んで封をする
商店街夏にウグイス鳴いている

箕面市 寺井柳童

お出掛けは傘離せない雨おんな
好きだからとことん話し分かり合う
帰国後は誰彼無しにハグをする
梅雨空を米朝首脳先ず一步

八尾市 前田紀雄

尻拭い多い仕事の宮仕え
ネクタイを結ぶと人格が変わる
アメリカカンファースト世界地図変える
梅雨入りも前頭葉を再稼働

神戸市 興水弘

盂蘭盆を仕切る親父の汗ひかる
生きてます妻より先に逝きません
後期高齢グチはソフトに嫌われず
傘寿越え澄んだ気持ちで歩き出す

神戸市 近藤勝正

地方紙にくるまれ届く母の味
独り居を癒やす勝手のポーチュラカ
廃屋に律儀なバラがこの春も
門先の蛍肴に酒を酌む

尼崎市 清水 久美子

トラキチと聞いて肩抱く握手する
語呂合わせで記憶するマイナンパー
野次馬の好奇をそそるワイドショー
しびれた割には小振りのチヌかか

伊丹市 延寿庵 野 鶴

何ひとつ愚痴をいわずに花は散る
同情はせぬ山葵の自己主張
うたかたの命を残す一行詩
欠け茶碗夫婦の苦節しかと知る

伊丹市 平 井 富 夫

台所喋る家電にわかったよ
婆ちゃんがチョット出かける厚化粧
年金日小さな靴のお客様
眼を細め紅葉お手てで爺ビール

加西市 山 端 なつみ

雨に負け風に負けての農作業
額に汗の仕事にしても儲からぬ
後期高齢跡取り無しの農家です
田植済み蛙の合唱聞く夕べ

篠山市 久保木 剛

のし袋本家だからと気張らされ
早乙女の技田植え機が取り上げる
筆箱にいつも入れてた肥後の守
ものぐさの男がひとりコンビニへ

篠山市 長谷川 善 輔

あのヤンチャ今は嫌われ頑固爺
亡き妻のあの一言がまだ刺さってる
我が家では真似る価値ない父親像
モフモフともふもふによる毛玉ゴミ

篠山市 藤 井 美智子

言い伝え昔の知恵は理に叶う
便利過ぎ少し昔に戻りたい
老いたまに遊び心でコンビニへ
肩痛め右の働き思い知る

三田市 宗 福 清 司

大笑いするネタ探しむつかしい
今ならアウト甘さかげんも変化する
パソコンとテレビ楽しむ狭い部屋
まさかまさかで中止せざるを得なかった

西宮市 福 田 正 彦

嘘一つ秘めて入院罪の床
曲らない我が師が妙になつかしい
事おこしその重大さ理解せず
後手ばかり踏んだ跡には寒い風

奈良県 中 堀 優

精彩なトゲ老うごとに丸くなる
夾竹桃毒があるから美しい
睡蓮は首をのばして息をする
生涯を働き蟻でゆく覚悟

奈良市 尾畑 なを江

幸せかゴロ寝の猫に問うてみる
いつの間にジェネリックまで入り込み
年金で二人と猫の暮らし向き
テレビから今日の献立かりてみる

宇部市 高山 清子

炊飯も核ミサイルも指一本
高齢者支える人も高齢者
新党の顔ぶれ見れば皆同じ
ゴミ捨て場カラスが夜明け待っている

鳥取県 門村 幸子

受け入れて開き直って崖っ縁
トラブルに人間力が試される
無駄話たまにほっこりむだ話
蝶蝶ちようちよ矢車草と平和の囀

鳥取県 下田 茂登子

草取りも出来ぬ身体持て余す
勝つ為なら何でもしてる政治家だ
可愛くてもどうにも出来ぬ絆あり
別れても忘れぬ女が一人いた

鳥取県 橋谷 静江

旬の物さがし求めてスーパーへ
誕生日近づき元氣出て来たよ
毎日の食べる食材自家園で
家族葬増えて友にも会えぬまま

鳥取県 橋本 整

九〇歳まだ若いよと青い空
嫌われぬように暮すのも一苦勞
氣持ちよく体内時計に起こされる
明日の風天にまかせて昼寝する

鳥取市 上山 一平

老いの身に万能スマホ放せない
触れ太鼓汗と涙が人を呼ぶ
かき氷やつとみつけた町の角
水菓子海馬がはずみ佳句を吐く

境港市 中井 虎尾

破れ傘昔さ今はこわれ傘
財布さり一円飛び出旅ガラス
とんちんかんうそがセリフの政治劇
抜いたけど降る雨草の種をまく

米子市 生田 和之

付度もあつて人の世面白い
マイボール十二ポンドが重くなる
ほろ酔いになれば本音も嘘も出る
とほとほと歩いてゴミを捨てに行く

米子市 川本 美津子

猛暑日は金魚に嫉妬して過ごす
変わらない事に感謝の日を過ごす
一輪の花を残して草筆り
ピンボーと我が家のチャイムいつも鳴る

米子市 黒田 紀美江
馴染んでる安いビールが疲れ取り
補聴器に愚痴拾われて大あわて
紅をつけ頬もふんわり若く見せ
四コマ目百歳までは空けて置く

米子市 田村 周子
脳味噌を洗い直して川柳だ
庭のバラ施設にかざり喜ばれ
国会も怪しい答弁聞きあきた
施設でも明るい気分友が出来

米子市 野川 宣子
口開く度いさかいの種を撒く
冷蔵庫開けて閉めての物忘れ
満腹じゃ夜の猷立浮かばない
波風を立てない箸の上げ下ろし

松江 相見 柳歩
いつ攻めてきてもおかしくない近所
バラマキで票が伸びると思うなよ
転び方知って安心して進む
ときめくと十や二十は若くなる

松江 中筋 弘充
百歳の義母がたまに忘れる生まれ年
特老から帰りたいとは言わぬ義母
私より長生きせよと笑う義母
長生きの秘訣を義母に聞いておく

松江 山根 邦代
笑い皺満たされている証かも
古里が喜ぶ記事を読んでいる
サロンへの道はルンルン笑顔つれ
なんでかな分からぬ事の多すぎる

雲南 永見 安子
老いの身も孫に合わせて土日なし
日替わりの気温体もくるいだし
テキパキと出来てた時もあつたのに
断酒してみましょか今夜の一人言

岡山 大杉 敏夫
カジノ法ドタバタ喜劇笑るのか
丸投げの安いトマトの種明し
父ちゃんはまだ満鉄に乗っている
老いるとはくやくしくもあり楽しくも

岡山 大石 洋子
パーキング燕の糞もある処
止まった時計止まった時間暮れ泥む
蜂侵入追いかけるひと逃げるひと
母廃業そろそろ届け出しますか

玉野市 片岡富子

ソースはね一帳羅の服泣いている

駄洒落にも心広げて待つてます

遠くても存在感のバラの赤

加齢かなポーカーフェイスすぐ割れる

広島市 田桑恵子

大盛りの曲ったきゅうり色はいい

団塊の世代行き交うゴミ出し日

空気のような夫不在で落ちつかぬ

尾を止めて金魚はじつと思案顔

広島市 松尾信彦

見る人は見ていてくれたいばら道

ありがたや子らに諭されとも古希

食いしんぼ物産展に鳴らす喉

ほどの疲れも土産二人旅

竹原市 土井輝恵

普段着で来いと言われてまた悩む

若い頃習ったままの化粧順

リフォームで生きる力を貰い受け

後何枚十円切手貼るハガキ

竹原市 六田半徳

何時やるか考え過ぎて始まらず

政権を変えろ変えろと蛙鳴く

うぐいすの声遠くなり入梅か

救急車近くに止まり気にかかる

三次市 伊藤寿子

体力のSOSを聴き流す

よそ行きの服は一着残しおく

カレンダールの印整体内科歯科

お財布は診察券が幅利かせ

高知市 三谷松太郎

願います八十路の脳をご破算で

弁当の蓋の飯つぶ見逃さぬ

わが国は幹腐りつつそびえてる

権力をお借りできたらボクもやる

唐津市 岩崎實

電波時計受賞記念のご紋章

まだうまいひかえておいてちょうどいい

する事は山程されどリハビリが

ともなわぬ体を責めていたわりて

山鹿市 前田幸子

夢だった恩師に会えて泣いていた

卒寿です紅さす自分を笑っている

スクールバス里に子供の影見えず

八十八夜デイも新茶の味に酔う

沖縄県 礒モト

母の日に香る花東文添えて

妖しさの季節外れの彼岸花

百五円不足払いはポイントで

抽選の閃く予感運がつき

弘前市 高森 一 吞

泣かないで隣に僕も居るじゃない

白神の森少年の秘密基地

泣いてばかり泣いて森から出られない

森を出るうそと付度脱ぎ捨てて

白河市 鈴木 たけし

箸置いて見遣るお葉カレンダー

我が庭に里の花木を植えたがり

列車待つ撮り鉄ひとり無人駅

提灯は哀の膨らみ孟蘭盆会

横浜市 長島 亜希子

着せたいが夫に似合うかしゃれたシャツ

無事帰るまで気にかかる歳となり

脳外科医笑ってたから大丈夫

脳の隙間埋める妙薬ないらしい

富士見市 中島 通則

専門部お飾りだった危機管理

戦後生まれ古希を迎える平和の子

借金の重荷と暮らすマイホーム

寝不足と戦いながらメジャー戦

東京都 高岡 弥生

連絡なし元気にしてるそう思おう

日曜日既に待つのは日曜日

体育祭休み取ったら大雨に

バシャバシャとお水楽しむ小さな手

名古屋市 富田 末男

自販機の言葉孤独を和らげる

鏡から判断貰う今日の顔

平成の次のステップ考える

嬉しいね育てた知恵が光り出す

名古屋市 山本 三樹夫

旅人に微笑みかける道祖神

若者の仕事放棄で人不足

特許出し猿まね防止したつもり

根回しが利いたつもりも念をおす

江南市 脇田 雅美

生前葬身の振り方を披露する

悩んでも化かされている方が楽

悩みごとあまり多すぎ神迷う

すみません一言いえばすむ話

豊橋市 小松 くみ子

若笹に侵略される駐車場

なま足に座りダコなど見当たらぬ

どしゃぶりにサイレン鳴らし消防車

牛スジを煮込んでみようスマホ見る

豊橋市 高柳 閑雲

回送のバスがスキップして帰る

バツイチと聞いても今は驚かぬ

ニュースにもならぬ僕らの口喧嘩

弱点を突かれ岩にもある弱味

(渡辺芳子さん、延寿庵野鶴さん、櫻崎篤子さんは42頁にあります)

橘高薰風句抄

〔橘高薰風川柳句集〕平成十三年発刊

秋の雨 しずかに粥がこなれゆく
手術後の白髪いつまで抜かざるや
胃を切除りし秋 犬抱けばあたたかに
焼跡に似た傷抱いて冬近し
胃半分 肺半分の湯呑かな
大輪のぐわらりと菊の散りざまや
悲報来 金魚 鮒 鯉 水の底
病床に聞く訃へ水を飲んですます
ジンフーズ 美人は美德だと思ふ
ハラキリ由紀夫へ 雪降らず 花散らず
死に行く鉢巻の尾を長垂らし
由紀夫の首といくばく距つ焼林檎
まどうなく胃を切除りわれのながらうに
終焉や 裂けてくれない増す柘榴

風花す 雪子が髪を梳くらしく
長男の頭へ手を載せやすき背丈
晩年という日のなかりける男
水仙にはあたたかすぎ風邪の部屋
長尾鶏 李白は如何に叙すならん
通り抜け 花の濃淡夜に入りぬ
陰陽石 つつじの燃える頃となる
男へもやさしい手紙書く男
父の愛娘にあつし 富士桜
切手にも金魚が泳ぎ風薫る
斜に見て天のひとでの大文字
大文字 額の焼ける火なりけり
大文字 酔醒めるよりはかなしや
大文字 夢の多くは夢で終る
松島のふた月たちてなつかしや
入院や わが来し方の土埃

英語 de Senryu⁸⁰

麻生路郎句集 『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代 Kim Horne

必要以上に 米をほしがる所帯持ち

family man

needs rice

over the ration amount

誰の墓だか 赤い蜻蛉が 飛んで来た

whose grave is that

where a red dragonfly

has come to fly

family man 所帯持ち *need* 欲しがる *rice* 米 *over* 以上に *ration* 割り当ての
amount 総量 *whose* 誰の *grave* 墓 *dragonfly* 蜻蛉 *has come to fly* 飛んで来る

～リバーウィローのため息～世界の川柳・俳句²⁰

インドの女性、世界俳句の母逝く アンジェリー・デオドハール (Dr. Angelee Deodhar India)

6月26日、フェイスブックの記事から長年の友人であるアンジェリーの逝去を知りました。彼女とは英国で開催された世界俳句大会(2000)で知り合い、その後、私の主宰する英語俳句の会 *Evergreen* の国外メンバーとして参加していただき、私が主催者として引き受けた第2回環太平洋世界俳句大会(2004大垣)には、インドから飛んできてくれました。今月の『川柳塔』に彼女の作品を紹介するため6月初旬に掲載許可の連絡をすると、作品とともに掲載を喜ぶメールが届きました。だがその数週間後に彼女は逝ってしまいました。アンジェリーは本来、眼科医でしたが俳句に魅了され、世界俳句の母として活動し、インドの俳句運動の礎を築きました。私はいつか「アジアの女性俳句選集」を彼女と纏めようと計画していたので残念です。拙訳を付けました。

moonless night--/ from the harvested field/ the hoot of an owl

無月かな 稔りの畑に梟の声

sharing an umbrella/ your wet left shoulder/ my right one

傘一つ 君の左肩濡れわれは右

Bonfire festival--/ all the songs of my youth/ sung by grandchildren

大かがり火祭 懐かしの歌うたう孫らいて

誹風柳多留一一二篇研究 62

石川道子・小栗清吾
細井龍夫・伊吹和男

山田昭夫

清 博美

524 たんものゝそばでおはり八にへきりな

石川 「白加賀にしなどお針にみくびられ」
(二七七)とあり、裁縫部屋は縫うばかりでなく、呉服屋が反物を持って注文を取りに来たのであろう。あれがいいか、これにしようかと迷っている遊女に、お針が、いかにげんにどれかに決めなさいよ、と言っているのであろう。

ありんすを通ひお針もちつといひ 五 10
まつさきをねたれハ御針口をそへ

明四松3

山田 賛。遊女が煮え切らないので「煮え切りな」。この句は「川柳吉原志」の八朔の項に採られ「しなものをどれか早く極めなんし

也」の頭註があります。八朔の白無垢の句としてよいのではないのでしょうか。
大雪の中にお針か式三人 傍五 13

清 賛、白無垢の生地に賛。

525 夜はなしがこうじて札を立に行

石川 源頼光の居館で持たれた酒宴の席で、平井保昌や四天王が、羅生門に鬼が出るの出ないのという話になり、深夜、渡辺綱が出掛けることになった。しるしの札を立てて帰ろうとしたところに鬼があらわれ、格闘の末、綱は鬼の片腕を打ち落としたという。

羅生門綱おれが行べいといひ 一 二 41

金札をたてたばんから人どをり 一 一 23

羅生門本店よりと書て置キ 宝 13 信 4

清 賛。

526 始皇帝口がいやさに生きつつめ

石川 秦の始皇帝は中央集権国家をつくったが専制政治であり、彼は思想家であった丞相の季斯の建言により、言論統制のため儒家を殺した。始皇帝の死後間もなく秦国は滅びた。

いさめると穴だと始皇おとす也 一 三 25
しんのじゅ者命なるかなと穴でいひ 八 32

山田 賛。批判がいやさに。

527 土弓場へけふもたいこを打に行

石川 土弓場、楊弓場、のち矢場といったこと。七間半離れた太鼓の前につるした的を射る遊びをさせる所。当たるとカチリ、外れるとドンと太鼓がなった。美人の土弓娘をおいて売色も行ったという。

土弓場へせつせと通っているのだが、下手なのであろう、太鼓ばかり。「どらを打つ」とかけているのか。

土弓場も美しひのをまに置 二 二 5 11

さい日の矢とりしりだのあたままだの

二 二 22 乙

清 賛。

528 大あばた小児いしやと八ふりやうけん

石川 子供にとつてはただでさえ怖い医者である。大アバタで小児医者になるとは、もうちよつと考えろよ、というのであろう。

小児いしやひとつのきずハこわい顔

一四一七

山田 賛。と言つたてねエ……。

清 賛。

529 ねこにまたがつて妻のおやあるき

石川 ねこは、芸者あがりの妻の異称。その娘にくつついて暮らしている親である。

猫のおかげで弟はなまりぶし 三四一八

伊吹 賛。猫股婆（＝根性の曲がつた婆をののしつていう語。『日本国語大辞典』）を利かせるか。

清 賛。

530 足がるの仁王にかわる花の山

石川 花の山は上野の山。ここはその昔藤堂家の屋敷があつたが、江戸の鬼門にあたると

ころから、その鎮守のために、藤堂家は立ち退き、東叡山寛永寺が建立された。

かつては藤堂家の足軽あたりがいたであろう場所に、今は仁王様が鎮座している。

萬を引きぬひてさくらをうゑるなり

安二七五

花の山とらの尾今にのこるなり 天七豊一

花の山鬼の門とハおもわれず 一一二三

清 賛。

531 親のそろばんをむす子ハ破さんする

石川 親が管々と築き上げた財産もどら息子にかかつてはご破算である。

やしきなどなんにしようとむす子い、 天二松一

一箱をむす子たん／＼かるくする 二四一九

ためたがる遣ひたがるてふだんもめ 安元宮二

小栗 賛。破産と破算。

清 賛。

532 初かつほはしをはなせとしかられる

小栗 初鰹をせっせと食べている人が「そんなに立て続けに食わないで、少しは箸を離し

てゆつくり食え」などと叱られている様子。友達と一緒に、下戸が初鰹を食べているような場面を想像すればよいであろう。

初鰹などというものは、酒を飲みながらちよちよいと摘んで味わうもので、目の色替えて急いで掻つ込むようなものではないのである。

馬鹿な事鰹をくらい水をのミ 傍五二七

初鰹めしのさいにハあぢきなし 五六

初鰹おらア飯だと業さらし 一五四四

清 賛。

533 土用干下女あれがゑゝ是がゑゝ

小栗 そのままの句だろう。土用干しされている嫁の着物を見た下女が、「あの着物がいい、いやあつちの着物もいい」などと、羨ましそうにほめている光景。

それだけで成り立つ句だが、当時の感覚としては、下女蔑視のニュアンスが含まれているかもしれぬ。

土用干下女下されハ着る気なり 安八仁四

土用干ほめ／＼下女ハ這て行

錦江明三九二

伊吹 賛。目の毒。

清 賛。格差社会が当然という時代のお話。

愛染帖

新家 完司 選

(投句280名)

和歌山市 古久保和子
眠くなる椅子とならない椅子がある

(評) 眠くなるのはデスクワークの椅子、下手な講演の椅子。眠くならないのは酒場の椅子、女子会の椅子。カラオケの椅子等か？

尼崎市 山田 耕治
御守りは成田山より舌下錠

(評) 狭心症発作に速やかに効くニトロなどの舌下錠。神仏を軽んじるわけではないが、先ずは命を守ってくれる常備薬である。

黒石市 北山まみどり
からつぽになるとつてもいい響き

(評) 太鼓が良く響くのは中が空っぽだから。鐘も鍋も人間も同じ。不満を抱え腹の中が燻っていると反応も鈍く声まで湿り気味。

大阪市 宇都満知子
前かがみの登り反りながらの下り

(評) 確かに、登りで反り返ってはいはひっくり返る。下りで前かがみではつんのめる。当たり前のナンセンスなおもしろさ。

笠岡市 藤井 智史
サービス残業は日本の美德

(評) 資源の無い島国を経済大国にしたのはその美德に拠るところ大。だが、若者にも外国人にも通じなくなつたのは時代の流れ。

三原市 鴨田 昭紀
付度とお世辞わたしは日本人

(評) 付度とは人の心を思い遣ること。世辞は人を褒めること。いずれも人を重んじる大和心。利己的な官僚や代議士には不似合ひ。

河内長野市 大島ともこ
愛想笑い顔の疲れが半端ない

(評) 付度や世辞とおなじように「愛想笑い」も潤滑油のひとつ。だが、不自然な笑顔が表情筋に無理をさせているのは間違いない。

奈良市 大久保真澄
お誘いは靈園ツアー食事付き

(評) お墓のことなどまだまだ先と思つていたのだが、食事付きならビクニク気分が出かけよう。買うか買わないかは別として。

奈良県 中堀 優
同じマサル寒いロシアで頑張ろう

(評) ザギトワ選手に贈られた秋田犬。マサルと呼ばれて全国のマサル君は鼻高々。だが女子らしい「マーシヤ」に変更したらしい。

瀬戸内市 宮宅比佐恵
五月病やたら亡き夫恋しくて

(評) カラリと晴れた爽やかな空を見ている

と「あの人がいてくれたら…」などと思う。だが、元気を出さないとご主人が哀しむ。

米子市 成田 雨奇
女房の宿敵は蛾となめくじら

海南市 小谷 小雪
ご機嫌はいかがと笑うかたつむり

高根県 原 徳利
ナメクジに負けちゃならないカタツムリ

香芝市 大内 朝子
やわらかな脳味噌完つていませんか

神戸市 山口 光久
理系です理屈っぽいのが悪しからず

唐津市 山口 高明
親切が過ぎると妻が角を出す

堺市 村上 玄也
メシのことしか言わないと妻苦言

河内長野市 村上 直樹
五月雨とコラボ楽しや妻の愚痴

堺市 内藤 憲彦
角砂糖2個で妻から怒鳴られる

藤井寺市 鈴木いさお
西太后みたいな女が多過ぎる

橿原市 安土 理恵
わたしの伴侶もしもあなたでなかつたら

豊橋市 藤田 千休
妻を撮る逆光線というチャンス

玉野市 片岡 富子
マイルール喧嘩の後はグルメ行く

三原市 笹重 耕三
優劣の劣はわたしの虚言癖

富田林市 中村 恵
まだ若い言われ働く列にいる

倉吉市 牧野 芳光
雨の日はコトリコトリとロバの足

大阪府 米澤 俣子
大儀そうな音で自販機缶落とす

那覇市 前川 真
背なを押すあいだみつをといる便座

横浜市 川島 良子
判らぬと楽しくはないお勉強

松山市 栗田 忠士
ゴロンゴロン夏風邪もらいゴロンゴロン

八幡市 今井万紗子
げてもとと珍味の線の引きどころ

京都府 清水 英旺
味気ないオトコに注ぐ濃い目の茶

京都府 清水 英旺
再検査こころの準備出来てます

尼崎市 清水久美子
鏡の前誤嚥防止の百面相

大洲市 中居 善信
ワイドショー好きでお気楽嫁姑

大洲市 中居 善信
衝動買いをして消えたおかず代

一寸の虫が三分の理を捏ねる

大阪市 平井美智子
おやつから少し外れているバナナ

豊中市 水野 黒兔
京の路地浴衣姿は異国人

堺市 加島 由一
夕焼けが切ない平家物語

岡山市 永見 心咲
カーナビの代わり大山見て進む

松江市 石橋 芳山
自転速度かわって転けてばかりいる

佐賀県 真島久美子
吸った分吐かないケチな女です

河内長野市 坂上 淳司
旅に出てスマホ帰って来てスマホ

鳥取市 福西 茶子
駅トイレで気付くタイツの後ろ前

京都府 榎本 宏子
仲裁に入った筈が三つ巴

京都府 榎本 宏子
ゴキブリに歓待された焼肉屋

三田市 北野 哲男
入れ歯には向かぬ焼肉屋のカルビ

三田市 北野 哲男
丁寧過ぎ人より一步遅れてる

神戸市 能勢 利子
朝風呂中近くに来たと姑が寄る

神戸市 能勢 利子
酒でのむ薬期待をしています

岡山市 大石 洋子
足並みをそろえ大根かがやいて

山口市 青木 隆子
妄想のため込みキャベツ横たわる

宝塚市 田中 章子
許そうと決めて心は平穩に

弘前市 高瀬 霜石
許すつて上から目線みたいかな

大阪府 古今堂蕉子
ハンドルは八十までと決めている

池田市 上山 堅坊
ゴミ収集今日は無いから朝寝しよう

池田市 上山 堅坊
飲兵衛がやっぱり先に逝く合掌

池田市 上山 堅坊
熱い恋で作った冷めた子供達

大阪市 大川 桃花
もやもやを胸に飼うてるトラファン

三田市 堀 正和
タイガース雨天中止の後は勝つ

鳥取県 齊尾くにこ
九回の裏だと妻に起こされる

沖繩県 森山 文切
気遣いを気遣いさせぬ難しさ

八尾市 宮崎シマ子
本当は暇だとバレた信号機

豊橋市 高柳 閑雲
大きいのも無いが小銭もあまりない

三田市 上田ひとみ
ジムがわり句会へ行くさあ今日も

東大阪市 北村 賢子
お出掛けへあちこち補修する素顔

島取市 山下 凱柳
締め切りに追われて駄句オンパレード

西宮市 福島 弘子
兩三日爪切りもした句も飽きた

米子市 生田 和之
平句末尾せつせと投句した褒美

塩竈市 木田比呂朗
選者との波長合わずにまた帰宅

奈良県 渡辺 富子
足腰へ言い聞かせてるまだともう

西予市 黒田 茂代
手料理に体操百まで生きそうだ

伊丹市 延寿庵野鶴
淀みなく生きて明日の布石打つ

岡山県 折鶴 翔
悩んでも悩まなくても明日は来る

河内長野市 山岡富美子
明日という鎮痛剤が常備薬

河内長野市 梶原 弘光
じつと待つなかなか朝の来ない夜

豊中市 齋藤奈津子
降りしきる雨にゆっくり朝寝する

富士見市 中島 通則
退職後増えた芸能豆知識

和歌山県 森下よりこ
日焼け止めらしい近頃のマスク

明石市 梶谷 和郎
独り居のテレビの友は柿の種

島取県 細田 裕花
直球をファウルで躲すお役人

京都市 都倉 求芽
反対派いつの間にやら僕一人

岡山県 池田たか子
たわいない諷い老いのゲームです

松江市 梅瀬みちを
おじいちゃん何故か短いズボン穿く

河内長野市 木見谷孝代
干からびそうになって飛び込む映画館

紀の川市 山東日出男
太陽を奪い合ってる夏の草

沖縄県 宮 すみれ
目を閉じてミクロの美音逃がさない

米子市 竹村紀の治
こっそりと食べてごっつり皮下脂肪

大阪市 谷口 義
近頃は菌間ブラシもしサイズ

奈良県 長谷川崇明
竹の皮何枚脱げば成る真竹

島取市 永原 昌鼓
今日もまたマージャン励む呆け防止

松江市 中筋 弘充
防犯カメラの主な仕事は盗み撮り

枚方市 谷 英也
我が家には豆腐さえも居てくれぬ

倉吉市 岡崎美知江
曾孫の歌流れるスマホ好きになる

大阪市 高杉 千歩
スマホだけ信じて今日を確かめる

高槻市 片山かずお
イベントなしで今年も父の日が暮れる

和歌山市 上田 紀子
幸せで夫婦喧嘩も出来るんだ

奈良県 安福 和夫
亭主の座生前退位済みでした

箕面市 広島 巴子
隠蔽も捏造もなく古い二人

島取市 池澤 大鯨
温泉行き家族の都合折り合わず

岡山県 山縣のぶ子
古タンス捨てて未練を持ち帰る

堺市 大和 峯二
九条は今も元気だ役に立つ

和歌山市 坂部紀久子
心の隅にこびりついている青春譜

米子市 後藤 宏之
七転び転んだままで時がたつ

島取県 山下 節子
財産はちまちま貯めた知恵袋

河内長野市 藤塚 克三
惚けてても詰め放題は牙を剥く

香南市 桑名 孝雄
五時チンで晩酌一日のケジメ

八王子市 川名 洋子

晩酌はでんと一本発泡酒

寝屋川市 岡本 勲

女房が鈴をつけてるビール瓶

大阪市 岩崎 玲子

夏肥えを覚悟で好きなビール飲む

大阪市 大治 重信

国会に反論しつつビール飲む

橿原市 居谷真理子

赤よりも深く酔いそう白ワイン

高槻市 松岡 篤

飲み会の下見のために飲みに行く

箕面市 中山 春代

居酒屋のメザシが臭う停留所

広島市 岸本 清

酒友に亭主閃白見当たらず

弘前市 稲見 則彦

昼酒をためらいながら飲む背中

鳥取県 橋本 整

百歳を目指す男の麦焼酎

枚方市 丹後屋 肇

浮き沈み傾きながら独り酌む

松原市 森松まつお

五杯目を過ぎたあたりで毒になる

富田林市 山野 寿之

検査値に酒やビールが畏まる

三田市 東内美智子
難聴にビールが良いと特訓中

河内長野市 中島 一彌

朝風呂で嫌な昨日の自分剥ぐ

加西市 澤中 朋子

パソコンですんなり書けずお茶にする

大阪市 樋口 眞

息子来てパソコン少し軽くなる

大阪市 津守 柳伸

百歳をめざす病歴自慢して

熊本市 杉野 羅天

予約派がセレブ気分で来るお店

朝霞市 前田 洋子

儘ならぬ事はササッと流します

鳥取市 夏目 一粹

足のツボ手のツボいつも揉んでいる

大阪市 柴本ばつは

独りです希望ないけど自由です

大阪市 坂 裕之

まだいける自転車漕いで小旅行

沖縄県 禱 モモト

世の中の大波小波およいでる

青森県 松山 芳生

集合写真みな友情の面構え

八尾市 山根 妙子

ひよんな事アメフトルールはぼ覚え

鳥取市 岸本 宏章

大顔に短足僕も日本人

加西市 山端なつみ
髪薄く理想の自分遠ざかる

八尾市 村上ミツ子

髪は無くてもシャンブーはいたします

三田市 多田 雅尚

御朱印帳神社仏閣入り乱れ

芦屋市 黒田 能子

大丈夫かな葉いっぱい飲んでる

高槻市 初代 正彦

監視カメラ偶にいつぶくしたかろう

大阪市 金川 宣子

娘が誘う終の住処へひとつ飛び

四条畷市 吉岡 修

大物のきざしだろうか孫三浪

河内長野市 穂口 正子

へそくりの保全管理がむつかしい

門真市 坂本 星雨

歳時記の春と秋とが薄くなる

鳥取市 田中 天翔

梅雨入りのトマト畑に傘を差す

神戸市 奥澤洋次郎

年寄が年寄の尻を笑ってる

西脇市 七反田順子

美人でもお骨揚げたらただの骨

神戸市 細川 花門

地獄へは花見遊山で参ろうか

府中市 岸田 武

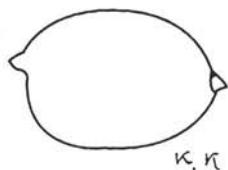
あの世では遊び惚けてやるつもり

共選欄

檸檬抄

(薫風書、カットとも)

(投句 354名)



「像」 山 口 光 久 選

路郎師の像へ一礼して披講
 席題はみな考える人になる
 戦友の残像夕陽にレイテ島
 少子化の進んで寒い未来像
 苦労した話だんだん虚像めく
 廃校に金次郎像置き去られ
 悪いことしたのは僕の虚像です
 高架下欠伸している地蔵様
 無茶したらあかんと残像が言う
 シヤボン玉虚像の世界ふわわり
 群像の中のひとりに描かれる
 寡黙だが妻子を守る親父像
 通帳を開くと妻はロタン像
 偶像の母を手本として生きる
 温厚な両陛下です肖像画

堺市 村上 玄也
 大阪市 江島谷勝弘
 広島市 松尾 信彦
 枚方市 海老池 洋
 堺市 柿花 和夫
 鳥取県 山下 節子
 明石市 梶谷 和郎
 唐津市 坂本 蜂朗
 三田市 久保田千代
 奈良市 山本 昌代
 和歌山市 北原 昭枝
 河内長野市 藤塚 克三
 神戸市 山崎 武彦
 西宮市 亀岡 哲子
 芦屋市 黒田 能子

「像」 齊 尾 くにこ 選

雲動く想像力を掻き立てて
 仏像の目に優しさと恐ろしさ
 偶像礼拝ヒトは人間らしくなる
 ふるさとの映像に泣く過疎の村
 無住寺の仏像盗む罰当り
 ビフォーアフター消費者騙す画像処理
 行き詰まる資本主義後の未来像
 国宝と聞いて仏像また拝む
 想像外八十過ぎたら新天地
 実像を五百羅漢に問う迷い
 自画像はオコゼ以上の蛸未満
 路郎師の像へ一礼して披講
 路郎師の胸像に会う塔まつり
 物言いへ映像分析大歓声
 リビートの映像怖さを倍にする

大阪府 神野千恵子
 大山市 関本かつ子
 堺市 柿花 和夫
 堺市 遠山 唯教
 堺市 若松 雅枝
 堺市 坂上 淳司
 大阪市 近藤 正
 高槻市 富田 保子
 和歌山県 森下よりこ
 鳥取市 加藤 茶人
 鳥取市 福西 茶子
 堺市 村上 玄也
 弘前市 福士 慕情
 鳥取市 吉田 弘子
 大阪市 古今堂蕉子

色あせた自画像に朱を入れてみる
 残像を追いかけどこまでも孤独
 釈迦像の如く優しい和尚さん
 噂話虚像実像入り交じる
 年金の勇姿が瘦せる未来像
 真実をより真実にする虚像
 裸婦像を違う視線でキミとボク
 自画像に父の凛々しさ母の笑み
 新しいものに想像力が湧く
 核の無い世界は夢か菩薩さま
 銅像が語る歴史の一頁
 粗削り円空仏の笑みが好き
 マスコミのつくる虚像が振り回す
 愚痴ひとつ砂像に言って旅終える
 虚像でもいいの私はお姫さま
 上からの目線銅像のブライド
 愛される母でありたい未来像
 知己の顔探し羅漢の森に居る
 仏像の微かな笑みは母に似て
 砂時計過去の実像さつと消し
 一枚の舌を二枚にした虚像
 猛暑日の寺に如来像の色香
 自画像で改ざんしたいシミとシワ

| | | |
|------|-----|----|
| 奈良県 | 渡辺 | 富子 |
| 松江市 | 石橋 | 芳山 |
| 尾道市 | 小畑 | 宣之 |
| 鳥取県 | 門村 | 幸子 |
| 高槻市 | 富田 | 美義 |
| 下松市 | 有海 | 静枝 |
| 宝塚市 | 田中 | 章子 |
| 和歌山市 | 福井 | 菜摘 |
| 笠岡市 | 藤井 | 智史 |
| 大阪市 | 若本 | 安代 |
| 熊本県 | 岩切 | 康子 |
| 尾道市 | 大本 | 和子 |
| 和歌山市 | 武本 | 碧 |
| 鳥根県 | 原 | 徳利 |
| 鳥取市 | 福西 | 茶子 |
| 青森県 | 松山 | 芳生 |
| 紀の川市 | 楠原 | 富香 |
| 那覇市 | 前川 | 真 |
| 鳥取市 | 倉益 | 一瑤 |
| 伊丹市 | 延寿庵 | 野鶴 |
| 鳥取市 | 夏目 | 一粹 |
| 沖縄県 | 森山 | 文切 |
| 三田市 | 谷口 | 修平 |

白壁に残像百選の夕陽
 砂像づくり砂に命を宿らせる
 裸婦像に勝ったと思うダイエツト
 国宝と聞いた仏像目が光る
 記念像今では誰か知らぬ人
 何思う阿修羅三つの顔かたち
 交差点手向けた花と石ふたつ
 尊徳の像が並んでいるスマホ
 想像を絶する怖い老後来る
 切腹に待ったをかけた内視鏡
 映像に写ったブレイラフブレイ
 自画像がツイイケメンに仕上がった
 阿修羅像トップモデルの姿して
 痛いほど哀しいゴツホの自画像
 五百羅漢きつと私の像もある
 ヴィーナスのブロンズ像に嫉妬する
 映像が暴く事実を偽りを
 仏像を彫れば誰かに似てしまう
 自画像が私の嘘を吐き出した
 自画像はゆっくり描くつもりです
 人気ラーメンまずはスマホが食べに来る
 戦友の残像夕陽にレイテ島
 体制が変わり引き倒される像

| | | |
|-------|-----|-----|
| 大阪府 | 米澤 | 椒子 |
| 鳥取市 | 岸本 | 宏章 |
| 高槻市 | 富田 | 美義 |
| 米子市 | 中原 | 章子 |
| 三田市 | 幸田 | 厚子 |
| 奈良県 | 長谷川 | 崇明 |
| 大阪市 | 原田 | すみ子 |
| 富田林市 | 山野 | 寿之 |
| 和歌山市 | 上田 | 紀子 |
| 札幌市 | 小沢 | 淳 |
| 箕面市 | 寺井 | 柳童 |
| 四條畷市 | 吉岡 | 修 |
| 弘前市 | 稲見 | 則彦 |
| 紀の川市 | 山東 | 日出男 |
| 吹田市 | 須磨 | 活恵 |
| 和歌山市 | 定松 | 宏枝 |
| 三原市 | 笹重 | 耕三 |
| 防府市 | 坂本 | 加代 |
| 大阪市 | 藤田 | 武人 |
| 三田市 | 上田 | ひとみ |
| 堺市 | 内藤 | 憲彦 |
| 広島市 | 松尾 | 信彦 |
| 河内長野市 | 中島 | 一彌 |

虚像だとしても私の顔が好き
姑の残像笑顔だけになる

海南市 小谷 小雪

今の世に文句言いたげモアイ像

大阪市 原田すみ子

虚像だと思つても信じたい

奈良県 安福 和夫

残像が僕の回路を狂わせる

岩出市 藤原ほか

自画像が私の嘘を吐き出した

河内長野市 梶原 弘光

初恋の君は天使の像のまま

大阪市 藤田 武人

虚像かもしれぬと思ひ踏み出せぬ

茨木市 島田 誠一

映像でウソの証言覆す

上尾市 中村 伸子

残像が消えぬ正夢かも知れぬ

富士見市 中島 通則

つぐられた虚像が一人歩きする

京都市 三宅 満子

青空のない少年の未来像

堺市 源田八千代

虚像とは知らずひたすら追つた日々

三原市 鴨田 昭紀

想像夫妻は見ていたように言う

宝塚市 岸田 万彩

モアイ像地球を思い悩んでる

貝塚市 吉道あかね

アイドルの虚像に躍るペンライト

尼崎市 藤井 宏造

裸婦像の前では老いも足止める

豊橋市 藤田 千休

戦いはもうやめようよ阿修羅像

藤井寺市 若松 雅枝

他人の為命を投げる理想像

桜井市 安土 理恵

秀句

面接日カチンカチンの像になる

宝塚市 太田としお

実像も虚像もゴミに出しました

札幌市 斉藤 宏子

またひとつ地藏菩薩の涎掛け

佐賀県 真島久美子
大阪市 平井美智子

銅像が凶器へ変わる大地震
形だけの仏像になる座禅堂

池田市 太田 省三

まどろみの坐像はわたくしの昼寝

河内長野市 村上 直樹

ドクターの前ではモアイ像になる

羽曳野市 徳山みつこ

あなたなら抱かれてみたいグビデ像

弘前市 高瀬 霜石

婚活はミケランジェロの顔でする

大阪市 栃尾 奏子

砂像にはちよつと触れたい指がある

佐賀県 真島久美子

ピーナスとグビデ今夜もじゃれている

岡山市 永見 心咲

想像は自由誰とも出来る恋

松江市 梅瀬みちを

プリズムの虚像に紛れ総理逃げ

鳥取市 倉益 一瑤

偶像の崩落セクハラパワハラ

三田市 村田 博

人の世に笑いに耐える仁王像

松江市 石橋 芳山

一本の木から生まれた如来像

大阪市 升成 好

ピエタ像の前に帽子を脱ぎ忘れ

神戸市 細川 花門

円空の像がゴッホに見えてくる

鳥根県 伊藤 寿美

芸術の傲慢裸婦像に時雨

名古屋市 富田 末男

懺悔するたびイエスの像はびくついて

橿原市 居谷真理子

風雪に耐えクラークが大意説く

三田市 野口真枝子

路郎像人の陶冶を見据えてる

横浜市 菊地 政勝

秀句

モアイ像 話せばきつと楽になる

東大阪 佐々木満作

猛暑日の寺に如来像の色香

東京都 川本真理子

現像液に残されていた新事実

沖繩県 森山 文切
堺市 澤井 敏治



動物たち (2)

現代川柳界の句会や大会では「課題吟」がメインになっています。その課題として出てくるのは「人の心や行動」そして「人の暮らしにかかわること」などが中心です。動物物で出てくるのは「犬」や「猫」ぐらいで、野生の動物が課題になることは極めて稀でしょう。そのような状況を考えますと、今回取り上げる「熊」や「象」「豚」などは、ほとんど自由吟で作られたものではないかと思えます。

山菜の穴場は熊のテリトリー

熊と蜂出ないと信じ山歩き

クマさんに出会わずすんだハイキング

柿食いに来たただけだった親子熊

生息地がせばまる熊も人間も

森に木をもどせと熊は里に出る

示談成立檻から森へ帰る熊

都会では想定外のことですが、山里や山林に近い郊外などでは餌を求めて出てきた熊に遭遇することがあります。もともとは熊たちのテリトリーであったところへ、宅地開発などで人間が進出してきたのが原因に違いありません。

春になると、山菜採りに行った人が襲われたという事件が毎年のように報じられるのはご承知の通り。そのように人間に危害を加えた熊は射殺されますが、畏にかかったのは、「もう二度と出てくるなよ！」と説得され「うん、わかった」と頷いたように見えたら「示談成立」で山奥へ放されます。

ぞうさんのテンポで一日が暮れる

いつものように歩くだけで象の鼻

ゾウに鼻サイに角ありカバに愛

自衛権キリンも象も持っている

当たりました倒れた象を起す役

意外にも脆かった象の脇腹

撫でてみた象に目がない鼻がない

象は地球上で最大の陸上哺乳類。中でもアフリカゾウの雄は最大10トン（平均で7トン）にもなるとのこと。その動作はゆったりとして王者の風格さえあります。

「ぞうさんのテンポ」は「ぞうさん」という童謡を思い出します。ゆったり過ぎた理想的な一日だったようです。

前4句は現実の象（童謡の内容も含めて）が対象ですが、後の3句は象を抽象化して述べているように思えます。

落ち込んだ時に見に行く豚の鼻

豚の鼻平和な形だと思っ

幸福な豚暖かい糞の上

種豚の世に満ち足りた面構え

親豚は食うことにのみ汚れはて

人間の思惑通り肥える豚

豚は愛嬌のある顔なのでペットとしてミニブタを飼っている人もいます。しかし、「ミニ」と言っても成長すると50キロを超す程にもなりますので相応の覚悟が必要でしょう。

食べて寝るだけ、「平和」の象徴のような豚ですが、生まれて半年で百キロを超して出荷されるとのこと。トンカツやカツカレーを食べるときに思い出したくない非情な現実です。

守田 啓子

天谷由紀子

斉尾くにこ

岸本 宏章

ひとり 静

森田 律子

尾藤 一泉

丸山 進

長谷川博子

恩地 克枝

紺矢 肇

岩井 三怒

加藤 陽一

「すんなり」

(投句 238名)

村上 直樹 選



車庫入れがすんなり出来るうちは乗り
すんなりと行けば行ったで欲が出る
すんなりと答えられない裏事情
すんなりと手に入れたからすぐ飽きる
すんなりといかぬやっぱり金がいる
根回しが効いてすんなり進む議事
仕付け糸解いてすんなり娘は嫁ぎ
どうせならもったいぶらず受けなさい
すんなりといったためしの無い禁酒
もめててもすんなり決まる飲む話
すんなりと老いを認めぬつけまつげ
堰止めに流れを作る智慧袋
知られざる苦勞があつて今がある
一回でオツケー今朝の血圧値
すんなりと飲めた胃カメラ晴れる鬱
大阪弁ならすんなりと口説けます
しなやかな姿態に老いの白昼夢
全額を負担すんなり募じまい
職退いてすんなり主夫になりました
顔パスで割引受けるシニアの日

大山市 関本かつ子
河内長野市 梶原 弘光
羽曳野市 藤原 大子
河内長野市 原熊知津子
四條畷市 吉岡 修
高槻市 片山かずお
伊丹市 延寿庵野鶴
奈良市 大久保眞澄
堺市 澤井 敏治
松原市 森松まつお
東京都 川本真理子
神戸市 富永 恭子
東大阪市 佐々木満作
朝霞市 前田 洋子
京都市 三宅 満子
神戸市 上田 和宏
豊橋市 藤田 千休
大阪市 樋口 眞
橋本市 石田 隆彦
池田市 太田 省三

すんなりと白状されて拍子抜け
すんなりと育ち気にせぬオール三
連れ糸孫を抱かせりや解けだす
民話なら鬼もあつさり丸くなる
根回しがあつたと誰も言わないが
すんなりと別れたなんてきつと嘘
機種変でいともすんなり終わる恋
切り捨てた愛振り向かぬのも情け
すんなりとゆかないんだね老いるつて
夕焼けの匂いすんなり測れない
首縦に振れぬ痲が蹲る
ピンコロリ逝けばとみんな願つてる
佳句
すんなりと行く筈は無い嘘に嘘
鬱の字がすんなり書いて鬱が晴れ
いい予感すんなり描けた今朝の眉
A I が取つて代わつて席に着く
誕生日免許返納した傘寿
人
すんなりと伸びた新芽に出る個性
地
透明になると素直に融け込める
天
ありがとう胸の底から言えました
軸
すんなりとは馴染まぬスマホ俺はオレ

堺市 村上 玄也
貝塚市 石田ひろ子
出雲市 伊藤 玲峰
男鹿市 伊藤のおよし
松山市 宮尾みのり
藤井寺市 太田扶美代
大阪市 高杉 力
大阪市 柴本ぼつは
青森市 守田 啓子
青森県 松山 芳生
富田林市 山野 寿之
宝塚市 太田としお
大洲市 中居 善信
松山市 栗田 忠士
香芝市 大内 朝子
篠山市 酒井 健二
大阪市 宇都満知子
吹田市 須磨 活恵
土佐清水市 辻内 次根
大阪市 若本 安代

「部 屋」

多 久 和 敬 子 選
(投句 238名)



太陽と握手したくて飛び出した
王様は譲らぬ西日あたる部屋
文春がマークしている部屋明かり
添い寝から卒業をして子供部屋
みの虫のゆらりお一人さまの部屋
探し物一つ部屋中海にする
単身で帰ってみれば部屋がない
閉じこもる部屋はなかった昭和の子
僕の部屋と貴女の部屋を繋ぐ虹
マンションの間取りにはない隠居部屋
子の部屋を開けると転げ出た大志
鍵のない部屋です隠し事がない
空の巢を花にぎやかに飾りたて
子が巣立ち開かずの部屋があくびする
部屋割りで笑い上戸に泣き上戸
花のある部屋に明るい灯がともる
雨降って部屋を言葉の海にする
部屋の隅隅を忘れた玩具箱
香をたき父母呼び出して愚痴ひとつ
昇進か左遷呼ばれる社長室

大阪市 榎本日の出
富田林市 中村 恵
豊橋市 藤田 千休
南あわじ市 萩原 狸月
西予市 黒田 茂代
海門市 堂上 泰女
名古屋市 山本三樹夫
大阪市 平賀 国和
奈良県 中堀 優
唐津市 仁部 四郎
高槻市 片山かずお
紀の川市 楠原 富香
犬山市 金子美千代
京都市 三宅 満子
河内長野市 藤塚 克三
堺市 遠山 唯教
鳥取県 細田 裕花
出雲市 伊藤 玲峰
唐津市 坂本 蜂朗
三田市 野口真桜子

寝室が二つ夫婦の別世界
ひよいと来て部屋の空気を和ませる
乱雑な部屋に戻ってほっとする
自分の部屋たどり着けない午前様
部屋数にボチのハウスも入れておく
妻書斎 僕台所 菜を刻む
亡父母の機嫌もよろし青曇
空っぽの鳥籠がある部屋の隅
すっぴんのわたしに戻るマイルーム
部屋干しなど私やつぱり太陽派
床の間の達磨転んだことが無い
仮の世の仮の部屋から見てる月
佳 句
鬼は外みんな部屋から出て行った
覗いてはいけない部屋が胸にある
生意気も意固地も居なくなった部屋
老いたかな脳の小部屋に灯がつかぬ
日当たりの良い部屋与党占拠する
人
主は留守 埃ウフフと部屋の隅
地
色のない部屋から君に打つメール
天
ちっぴけな部屋とでっかい夜の闇
軸
部屋毎にエアコンつけて減る対話

横浜市 菊地 政勝
大阪市 寺井 弘子
米子市 成田 雨奇
河内長野市 大島ともこ
鳥取市 田中 天翔
河内長野市 森田 旅人
高槻市 初代 正彦
大阪市 平井美智子
香芝市 大内 朝子
大阪市 古今堂蕉子
弘前市 福士 慕情
東京都 川本真理子
堺市 澤井 敏治
宝塚市 岸田 万彩
沖繩県 森山 文切
紀の川市 宇野 幹子
倉吉市 牧野 芳光
鳥取市 福西 茶子
大阪市 高杉 力
弘前市 高瀬 霜石

初めは教室

題一汗

居谷 真理子

時は夏、汗とくればビール。ビールが多く詠まれましたが、佳句の勝正さんは「屋上」が効果的でした。風を感じます。

また、題を「汗」と勘違いした方がおられました。私もよくやる間違いです。それにしても汗と汁。そんな漢字の面白さを駄洒落でない川柳にできないものか。どなたか挑戦してみませんか。

(原は原句 参は参考句)

原 草むしり流した汗に缶ビール
参 草むしり汗に褒美の缶ビール
原 汗涙人生たしかな贈りもの
参 汗涙たしかな生の贈りもの
原 汗みどろ流しすつきり頬の艶
原 汗腺のクリーニングで呆防止

「汗腺のクリーニング」、いいですね。

参 汗腺のクリーニングで頬の艶

原 友と会い名前忘れて冷汗が

参 冷汗は出るが名前の出ない友

原 リハビリで汗が爽やか明日がある

参 リハビリの汗が明日を保証する

原 汗臭い部屋女子マネ跳ねている

参 女子マネは愛す部屋の汗臭さ

原 汗流す姿を神も見てるはず

このままでもいいのですが。

参 汗流す姿を神も見てたはず

原 自分には良く分らない汗臭さ

参 自分だけ知らぬ自分の汗臭さ

原 夏ゴルフ球より汗との戦いだ

参 ボールより汗と戦う夏ゴルフ

原 墓掃除終えてべったり汗染みる

参 墓掃除やつております炎天下

原 つないだ手に汗かいている初デート

参 つないだ手の汗はずかしい初デート

原 風吹いて野良着の汗も味がある

実感でしょうか、気持ちよい句です。

参 風吹いて野良着の汗に滋味がある

原 勝負あり手に汗握り観戦す
参 人様の勝負に手に汗を握る
原 しあわせは人のためにも汗流す
参 しあわせは人のためにも流す汗
原 想い人のかいた汗さえ香しい
「想い人」―情緒のある言葉です。手持ちの辞書には「思ひ人」となっていましたので。
参 思い人汗も清らで香しい
原 汗かいてみてもビールで五分と五分
参 汗かいた分はビールで取り戻す
原 お葬式胸のハンカチとり忘れ
「ごめんなさい」状況が読めません。
参 汗涙一緒にぬぐうお葬式
原 青春の心の汗を流そうよ
参 青春の心は熱い汗流す
原 だんじりを引けば少年おとこ汗
参 だんじりの少年おとこくさい汗
原 初歩き汗を拭き拭き後を追う
参 汗拭き拭き歩き始めた孫を追う
原 ニュースでも高令の事故汗がでる
参 高令の事故のニュースに冷えた汗
原 していない大汗流す程のこと
参 していない大汗流す大仕事

(田)廣 子

勝 治

孚 彦

(小)雅 美

清 司

光 雄

奈津子

こみつ

夢 香

一 平

貴美江

幸 子

くみ子

真

剛

翔

不二夫

洋 一

朋 子

開 子

一 平

原 滝汗に目鼻すっかり流された 美穂

参 滝の汗眉も目張りも流された

原 正直な汗で混ざった物はない 紀美代

参 正直な汗で欲得混じらない

原 冷汗を流した度につく自信 廣光

参 冷汗を流した数とこの自信

原 甲子園勝利と悔いの混ざる汗 美智子

参 甲子園勝つも負けるも汗涙

原 汗拭いぬぐい格闘雑草に負け (高道子

「ごちやごちや」しました。十七音に整えて。

参 雑草の強さ私の汗に勝つ

原 今日の日汗明日へ飛躍の糧とする 一彌

参 今日の日汗明日のためにかいている

原 若い美女に声かけられて汗ばんだ 武紀

アハハ

参 若い美女に声かけられただけで汗

原 冷汗のないしよ内緒が跳ね回る すみれ

参 冷汗の内緒話が知れ渡る

原 一筋の道に輝く汗がある 昭枝

参 一筋の道に輝く汗の跡

原 消臭剤よ汗のにおいは悪者か なつみ

参 消臭剤が汗のにおいを悪者に

原 汗はむ候絵手紙送るあじさい画 厚子

参 アジサイの絵手紙汗が引くように

原 汗出して過去もリセット出来たらな (高弥生

ユニークな発想です。

参 汗水で流したい過去あるのです

原 したたる汗が育てているのはこの私 (大安子

原句の焦点は「私」ですね。「汗」に焦点

を絞ってみました。

参 したたつて私育ててくれる汗

原 スマホの指先だけに汗をかく (大洋子

参 スマホ族指先だけに汗をかく

原 全力で取り組む汗は美しい 三樹夫

その通り！表現に勢いをつけました。

参 全力で取り組む汗は美しい

原 ジムで汗お昼ごはんが美味しくて 里子

これも素直すぎる句です。少しひねって。

参 ジムで汗お昼ごはんがうますぎる

原 言い訳に冷や汗そして脂汗 優

辞書により「言訳」「言い訳」、「冷汗」「冷

や汗」、どれもアリ。統一してほしいものです。

参 言い訳に冷や汗やがて脂汗

原 踊り手の虹色の汗夏が来る (斎宏子

「虹色の汗」、美しい表現です。

参 踊り手の虹色の汗夏祭り

原 仕事してしあわせ色に光る汗 こそえ

この「しあわせ色」もいいですね。

参 働けるしあわせ色に光る汗

原 ポケットに隠しておこう手の汗は 雄大

参 ポケットの中で手に汗握ってる

原 長風呂で瘦せられる汗多く出す ミヨノ

参 長風呂で瘦せる瘦せるの汗を出す

原 子の試合見るだけの親汗つたう のぞみ

参 子の試合見ているだけでつたう汗

原 汗だけはしっかり掻いてまだ補欠 和之

参 汗だけは誰にも負けずまだ補欠

【佳句】

屋上のビールで流す今日の汗 勝正

カタツムリ汗を知らないマイペース 徳利

言い訳の汗は冷たく脇の下 由紀子

麻生節までも冷や汗かく総理 通則

汗かいて得た報酬の積み重ね 隆子

ダイエットやせた気になる汗の量 美枝子

【今月の推せん句】

汗っかき倍働いたような顔 長島亜希子

夢が夢で終わらぬように汗流す 黒目ひでお

ガマの油思い出させるサウナ風呂 貝塚 正子

川柳塔鑑賞

同人吟 川端 一步

17月号から

百歳時代どんな楽しみ増えるやら

村上直樹

長寿国のビジョンを示して欲しい。目の選挙用政策でなく、国の基本政策を。

同時にわれら高齢者、望む要求要望を川柳で大いに訴えましょう。

我が家のピカソ私はいつも二頭身

籠島恵子

ピカソはお孫さんでしょうか。この句を読んで、うちもうちもと賛同の声が寄せられた気がします。家族団樂の姿が見えるようです。

スマホほど必死にやっつけない仕事

森松まつお

思わず、ほんとだ、と思いました。思い当る人みんなが「仕事」をしたり、「勉強」したりしたら日本中大変革が起るかも知れません。

食べて寝て読む書く笑う泣くもよし

山中康子

考えて見れば意識するしなみに拘らず、これを毎日こなしている訳です。しかもどこに重点を置か人も人それぞれ考えて。人間はえらい。その上に高額の税金を納め、苦難に耐えています。

過去に無い物を求めて今日と明日

竹信照彦

これは川柳というより私は箴言だと思えました。どの川流入門書にも古い材料や表現でなく、ちよつと新しい工夫をやつてみようとなります。明日のために。

ライバルに感謝追い越してみせる

田中ゆみ子

「ライバルに感謝」その言葉に惚れました。「追い越して見せる」に唸りました。「ライバル」を「母」に変えました。真面目で前向きな姿を見ました。

削られてソーラーパネル並ぶ山

川崎ひかり

さてこの景色をどう評価したらいいのでしょうか。山は削られてみどりが少なくなるのは困る。でもソーラーパネルで電力を補う利点はいいことです。一方、原発再稼働反対の声も。迷う時は直球で、原発はアカン、これが優先か?。

豆を煮るとろ火のような恋もよし

中山春代

△とろ火のような恋▽に魅かれて選びました。どんな境地か分かりませんが、勢いよく燃えてすぐ消えるのではなく、豆を煮ることが好きなおばあちゃんに聞いてみます。

ほろ酔いの時のわたしが本物だ

岩崎玲子

ほろ酔いのわたし何と魅惑的な表現でしょう。こんなお手紙を頂いたら大方の男性はコロリと参ってしまふ。本物のお人に逢いたいものです。

我慢せず言いたいことは言っていく

坂裕之

私も同じ意見です。そして意見が違えば話し合い譲り合う。言わなければ溝が深くなつていても分りません。あの米朝ですら会話の道を探つたのです。言いたいことは言う。間違つたら謝る。

断捨離の途中泣いたり笑ったり

松山 芳生

わが家の経験を見ているかのような作品にびっくり。幸田露伴は「老人になるとケチになる」と言いました。若い者にはこの心境は分つてくれないようですね。

まあいいか齢に甘える自分流

吉田 弘子

老いぬれば甘えることも何とやら。そして自分流で生きる。陰で何と言われよう。まあいいか、でいきましょう。

十年後おそろしい歳迎えそう

上田 ひとみ

元氣は宝と言いますが、考えてみればおそろしいことです。本社句会いまのメンバー十年後みんな来ていると思わないが、十年前のメンバーがかなり来ている現状。嬉しいのか恐ろしいのか。

ほどほどに手抜き上手に老いていく

二宮 紫鳳

ほどほどの手抜きの程度は分かりませんが趣旨は大賛成。戦中戦後苦勞した身体です。妻への愛情、朝の散歩、読書の量、句会への参加。お酒は別もの。わたしの「ほどほど訓」。

透明になり時々悪ざしたくなる

今井 万紗子

男性はよくこの種の句を作りますが、作者が女性とはちょっと驚きました。「時々悪ざ」を変に考えた私が恥ずかしい。

日本が案山子のようになる気配

関本 かつ子

日本の案山子はいまどうなっているのでしょうか。作者の思いと違うかもしれませんが、案山子の多くは減反の影響で農家の納屋で失業中。或いはどんな風雨にも耐えて物言わぬシンボルに。さて句の真意はどうでしょうか。

少子化で小学校が消えそうだ

榎本 日の出

私が住んでいる小学校全校生徒数206人。隣の小学校生徒数97人。隣の小学校に合併の話があったが父兄の反対運動で今は沈静。でも少子化対策は国上げて時には超党で取り組んで欲しい課題。

政府は可能な限り三人目を生んで欲しいと言うが、条件は整っていない。経済的援助もないでは困る。無駄を削つて国の百年の計を真剣に考える時でしょう。

守ったら護つてくれるはず憲法

吉岡 修

何と言つても戦後七十三年戦争がなく平和であった実績が証明しています。暗雲がない訳ではないが戦争はごめん。

戦いはいつも地球の人間同士

水野 黒兎

何故戦争はなくならないか、答はなかなか出て来ません。全世界の戦費、わずかの時間ストツプすれば世界の難民を救う費用が生まれると言ふ。戦争で儲けるという考えをどこか地球の果てに。

被爆二ツポン何とか知恵を絞らねば

徳山 みつこ

世界的な流れは、核禁止の方向に進んでいます。国連会議で核禁止条約が採択されました。それを日本政府は認めようとしません。日本がよい方向に進むよう知恵を絞つて声をあげましょう。

南北が魔術を使い手を結び

磯部 義雄

魔法の手かどうか分かりませんが、南北が和平に向かっている事実には拍手を送りましょう。この快挙は必ず日本にもよい影響になることを信じて。

水煙抄鑑賞

17月号から

山岡 富美子

日傘くるくる毒舌を跳ね返す

中前 幸子

なにげない一言も時と場合ではぐさつと来る。しかし、それを陽気に跳ね返した幸子さん。「日傘くるくる」が効いた。

標準語と思いきいでた国訛

藤田 千休

「あかん」という大阪弁。広辞苑では、多く関西で使うと解説するがいまや全国区。グローバルスタンダードの時代を潤すお国訛りが弾む。

一つしかないので捨てることにする

真島 久美子

まさかそれ「赤絵」?と俗物の私は慌てる。焼き芋なら半分にできてもたった一つのもの、分けられない物は潔く捨てる事が出来る。というのもリーダーに必要な資質なのであろうか。

真つ正直に生きてきました皺と染み

坂本 星雨

堂々と「真つ正直」という星雨さんに敬意を表す。皺と染みでは私も負けないうが病と闘う星雨さんとは違う。

どうか頑張る星雨さんを、紫陽花も野の花も癒してと心の底から願う。

行間の謎をゆつくり解いている

北原 昭枝

手紙の行間か、或いは心の襞のことであろうか。説明を省いて、奥行きと陰影に富む句に仕立てた。

新しい私を生んでくれる朝

池田 美穂

どうしてあんなことを言った、なんであんな所で転ぶのか等、昨今の失敗に苛立つ。しかし乍らそれも過去。朝の鏡は、もう昨日の私ではない。女の立ち直りは素早い。

いざとなったら開き直つて八十路

森下 よりこ

伊達や酔狂で八十年生き延びたわけではない。戦後の飢餓もバブルも乗り越えた世代。足腰は脆くなっても、決してたじろがぬ強さと自信を秘めているのだ。

河内生れ河内の酒が肌に合う

柴本 ばつは

地酒がブームになって久しい。量産品にはないこだわりがマニアを酔わせ、歌心に火を付けるのであろうか、気負いのない「ばつはさん」の一句がうかぶ。

白黒で割り切れなくて皆好き

森 廣子

白黒でスバツと割り切れることなどはこの世にない。ただ「皆好き」になることはできるという大人の廣子さん。

謝るのは今本降りになる前に

原熊 知津子

土砂降りになれば傘も合羽も役に立たない。「ごめんなさい」とさっさと言えば済むものを、ときには意地がこじらせる。素直に謝ろう。爽やかな一日のために。

売ろうかと思う子牛がそでを舐め

岡本 勲

三立てを食おうがトラキチはめげぬ

清水 久美子

愛というのは理屈ではない。それが美形とは言えぬ子牛であろうが、連敗中の猫のような虎であろうが、切なくも愛おしいのがファン心理なのだ。

第42回 全日本川柳2018年 熊本大会 選考結果

(当日 569名/事前 1,968名/ジュニア7,262名)

高校生・一般の部

文部科学大臣賞

フクシマの草へ言い訳などするな 山梨 小林信二郎

参議院議長賞

にんげんの深いところにある火口 京都 西ノ坊典子

川柳大賞

駆け登る若さに怖いものはない 広島 福田 淳子

大会賞

半分はこの世に在らず日向ほこ 奈良 板垣 孝志

百歳の笑顔が連鎖して満ちる 神奈川 後藤 洋子

いただいた恵み大きくして譲る 青森 北山まみどり

円卓のどこへ座ってみても風 大阪 平井美智子

人間が駆ける絶頂期の音だ 青森 千島 鉄男

枯草になるまで百の嘘を吐く 静岡 望月 弘

素直さへ神のパワーが降ってくる 富山 伊東 志乃

どう生きる老人力を滾らせる 福岡 小池 一恵

席譲る日溜まりひとつ生みました 青森 北山まみどり

二世帯に豊かな知恵が響き合う 鹿児島 上之園とし子

固唾のむ満座を包む言葉の森 北海道 松村 滋

小学生・中学生の部

熊本県知事賞

すわるときちよつとつめたらあと一人 熊本 小4 貝塚 蒼宇

熊本市長賞

くまモンとともに広げる笑顔の輪 熊本 小5 土田さくら

熊本県教育会賞

ふじ山の上にもドスンと座りたい 広島 小4 北畠 麻貴

熊本市教育会賞

温暖化地球のパワーへらしてる 富山 中2 尾塩佳代子

熊本県文化協会賞

楽しくてすわってなんていられない 熊本 小3 吉原 巴菜

全日本川柳協会賞

豊かさに気付いてしまうおままごと 佐賀 小6 真島 芽

教育新聞社賞

けしごむのパワーごしごしままのつもの 岡山 小3 小田上優菜

にげみずのようにゆたかさとおどかる 富山 小4 江畑 小夏

豊かなら笑ってよって悲しい目 熊本 中1 高野 美結

(太字は本社同人)

『麻生路郎読本』余滴 (47)

「川柳職業人宣言」前後⑦

兼 原 道 夫

昭和11年6月30日に川柳雜誌社同人を辭退した増井汀柳は、もとは「川柳たまむし」を、山本雨迷や鳥山一步と出していた。その「川柳たまむし」の創刊に、路郎は深く関わっていた。

「川柳たまむし」昭和7年5月号は、創刊五〇号四周年記念号として発刊されている。表紙には、路郎の次の言葉が掲載されている。

〈光るもの流る、ものみな美しく、われ等が川柳その中にあり、われ等がいのち川柳の中にあり、永遠に光り且つ流れよ。〉

路 郎

同号で、鳥山一步が「路郎さんとたまむし」と題して思い出を語っている。

〈路郎兄*1早いものです、兄を平市に

迎へてわれらスポーツ人が柳會を開いたことがこの「たまむし」の濫觴らんしょうなつたのです、あれからも五年になるのです。何が痛快だといつたつて、兄にとつて、あの冗談半分に見えた句會が、まさかに*2「たまむし」を生まうとはおもひもよられなかつたことであらうのに、それにわれらは、「われらのために、路郎さんが来て下さつたのだ」といふ喜びと誇りを胸一杯にして「おい、これを記念に川柳の雜誌を出さうぢやないか」「賛成々々」「誰が編輯をやる」「そら増位君が一番川柳に古るいから君、頼む」と山本君が云つたとき、私は「いやいや、増位君は卓球タイムスをやつてるし、僕にはテニスがあるし、君やり給へ」と山本君に押しつけると「僕は駄目だ」と逃げるのを、増位君と二人で「兎に角やり給へ、手傳ふから」と無理に編輯役を納得させたものが、實にこゝに五周年を迎へたのだから、路郎兄、想つてみても痛快ぢやありませんか。〉

*1「川柳たまむし吟社創立句會(大阪)」の記事が、「川柳雜誌」昭和3年3月号に掲載されている。報告者は雨迷。

〈二月一日料亭平市に於いて發會をし

た。川柳たまむし吟社の同人は、庭球家としての鳥山隆夫氏を初め我國卓球界の權威である卓球タイムス社同人及雜誌公憤の石井氏に加ふるに川柳雜誌社主幹麻生路郎先生の出席もあつて非常に盛會であつた、出席者は宇城、一庭、汀柳、雨迷(筆者註)以下六名略)氏であつた、尙投句せる者に、登山家として、秩父宮殿下の御供を仰せつけられし、朝日新聞社の藤木九三(筆者註)以下四名略)氏もあつた。〉

路郎は、兼題「酒」「命」の選をしている。汀柳は、〈校長は意外に飲める人でした〉(酒を呑む手附も女二十六(算盤でゆかぬ命を持ちつゞけ)命をば捨てればわけのない話)と、それぞれ二句ずつ入選している。

*2「川柳たまむし」は、昭和3年4月に創刊号を発刊。

「川柳たまむし」昭和29年2月号で、「たまむし回顧(一)」と題して、増位汀柳が次のように述べている。

〈昭和三年二月に私たちスポーツマンのグループに依つて川柳たまむし吟社が創設

され、早くも同年四月に「川柳たまむし」創刊号を刊行した。当時一步はテニス、汀柳は卓球の夫々雑誌を出していたので、自然川柳は雨迷の担当と決められた。

創刊号には路郎氏の祝吟五句を飾つた外全く柳界の別天地と云つた独自のもので、尤も川柳の何もかも我武者羅な熟を挙げていた。(略)

句会には路郎、万よし、乱耽、愚陀の諸氏の来会を得て賑つた。然し、この例会は二十回きりで集議により廃止した。(略)

五月号(筆者註―昭和7年)は五十号四周年記念号として出している、丁度この時、私の家を改造して卓球会館を建設したので併せて川柳の会合にも利用、後に大阪朝報句会、川柳雑誌句会を盛んに催したものである。(略)

昭和九年は「たまむし」最後の巻となつた。(略)四月は例年通り六周年記念号として、十一月終刊号には同人一同筆を揃えての訣別文と、路郎氏の挨拶を載せている。

(略)

当時「たまむし」は永久に続けてゆける様に、総てに恵まれた條件のもとに育つて来たものを、敢然と打ち捨てて終刊を宣し

た。第七卷第十一号通卷八十一冊を一回の欠号もなく、遅滞なく月刊の使命を果し、「川柳雑誌」の中に入る事となつたのである。

「川柳雑誌」昭和9年11月号「社告」に、○山本雨迷 増位汀柳の兩君は編輯同人となられました。尙山本雨迷君は橋本緑雨君の後を繼いで本總務を擔當せられました。橋本緑雨君は總務待遇とします。とある。

川柳雑誌社の事務所が、大阪市住吉区平野西之町八三番地の橋本緑雨宅から、大阪市天王寺区上汐町一丁目五一番地の増位汀柳宅(卓球会館)に移転した。それに伴つて、諸家消息を記録していた緑雨の「西之町MEMO」を、「上汐町から」と題して汀柳が担当することになった。また、昭和10年4月には、福田山雨樓が東京の鉄道局に転勤のため、山雨樓が担当していた、いわゆる編集後記である「編輯の窓」も汀柳が担当するようになった。

川柳雑誌創刊以来、社のために尽くしてきた橋本緑雨が一線を退くことになったために、路郎は、雨迷と汀柳を編集部を迎え入れたのだらう。

ところが、川柳雑誌社に入り二年も経たないうちに、増位汀柳は退社した。前掲「たまむし回顧(一)」で、次のように述べている。

「川柳雑誌」に加はり約二年、「たまむし」一同は鋭意その役割に努力したが、遂に容れられず川柳放棄の結果を生んで了つた。また、「川柳たまむし」昭和29年2月号で、山本雨迷は「たまむし復刊」と題して次のように述べている。

「川柳たまむし」は昭和三年に創刊してから八十一号を数えたが、麻生路郎さんと鳥山一步とが話をすゝめてたまむしを川柳雑誌のなかに生かすこととなり、路郎師のもとに私が編集長の役割を受けもち、汀柳が自宅を事務所にしてハリキツタ迄はよかつたが、私自身も役割を果たせなかつたし、汀柳も雑務に追われがちや何やらかやらので、川柳雑誌のなかに「たまむし」が育ちそうでもなかつたので何時しか川柳を忘れるようになり、そうこうしているうちに太平洋戦争が起つて文藝とかスポーツとかいつたものの刊行が出来なくなつて川柳とかはなれて既に二十年の歳月を経てしまつた。」(次回に続く)



(投句208名)

大阪府近郊を震源地とした先の地震、そして今回の西日本を巻き込んだ大水害と、心休まる暇も無いとはこのことだと思えます。



川柳家にも被災された方が有り、その全容は分かりませんが、ただただご無事を祈るばかりです。

こんな世だからこそ、川柳を軸とした結束力が望まれます。では…。

せつけんがカタカタ鳴った若かった

(評) 歌の一節が思い出されるようです。あの頃は本当にみんな若かったです、そして純情(?)でした。

私の灰汁を掬って蘇る

(評) 身の内の灰汁をきれいに掬い取れたらどんなに気持ちいいことでしょう。

まさしく蘇れる、ハズです。

遺伝子の子はしつかりと継いでいる

(評) 似ていないようで似ているのが親子、特に無意識の折りなどにハツとさせられることもしばしばです。

銭湯で世間のルール教えられ

(評) そう言われてみれば、本当にこの通りだったと思います。知らないオバサンにあれこれ教わったことも。

思い切り泣いたらおながすいてきた

(評) 泣く、ということはいいいことなんだそうです。その上におなががすいてくるなんて健康そのものですよ。

洗っても洗ってもなお獣臭

(評) その獣臭を洗い落としてしまいいのか、いや、そうでもないような。不思議な気配が漂います。

スマホから離れた朝が眩しくて

(評) 若者の間に蔓延しているスマホ依存症と言える状態は困りもの。ホイと手放せばまた違った景色が見えますよ。

満天の星と行水した昭和

(評) あの頃は大人たちも行水していたと記憶しています。空を仰げば星が降つ

て来そう、なんてロマンチック。

頑張りを見ている方も辛いです

(評) 頑張っている本人よりも、黙って見守っている方が辛いかも知れませんが、実を結ぶ日が近ければいいですね。

風呂上がりまだ考えているロダン

(評) 考える人のあのポーズは風呂上がりだったんですね。なるほど、なるほどと大笑いさせて頂きました。

欲望という名の桶に底がない

小さいよりやはり大きい方がいい

責任はあるがとらない三代目

秋田犬ロシアで辛いんですか

しごきにも耐えた手足よありがとう

五右衛門はシャボンをうまく使えたか

あの頃の井戸端会議なつかしい

さっぱりとすればお口も軽くなり

素寒貧なんとも勇ましい姿

大洲市 花岡 順子

弘前市 福士 慕情

和歌山市 古久保和子

犬山市 金子美千代

松江市 石橋 芳山

大阪市 小野 雅美

下松市 有海 静枝
あれれれれ記憶まで洗い流した

佐賀県 真鳥久美子
飲めそうな気がする桃のバスクリン

鳥取市 倉益 一瑤
透明になって言いたい事がある

堺市 内藤 憲彦
父に母はくに娘が風呂の順

枚方市 寺川 弘一
好きなこと我慢長生きしたいから

大阪府 柴本ばつは
まだ納屋に置いてますねんあの盥

沖繩県 森山 文切
幸せになれるクスリを買わされる

三田市 野口真桜子
こりすぎてローズマリーの香にむせる

大阪府 宇都満知子
本物の醤油はやはり樽仕込み

吹田市 山本希久子
いつも一人いつも誰かを待っている

熊本市 杉野 羅天
シャンプーも酒も小さくなりました

大阪府 大治 重信
紅の牡丹をくぐる蟻の列

橿原市 居谷真理子
番台に頑固が座り湯が熱い

芦屋市 黒田 能子
幸せなひと時まずは湯につかる

河内長野市 穂口 正子
さっぱりと忘れてあげる好きだから

岡山市 永見 心咲
ダイアナの石鹸だから慎重に

奈良市 山本 昌代
ゆつくりと解してほしい肩の凝り

河内長野市 藤塚 克三
虚偽の跡いくら拭いても落ちません

豊橋市 西郷紀美代
失言をしてからの悔い探す穴

東京都 川本真理子
流すこと流されること生きていること

黒石市 北山まみどり
とりあえずお待ち下さいご勝手に

大阪府 江島谷勝弘
シャンプーよりも熱潤をたのんます

香芝市 大内 朝子
行水のたらい懐かしいな昭和

神戸市 奥澤洋次郎
アナログに還りゆつたりした夕べ

倉吉市 山中 康子
娘とたわむれた菖蒲湯がなつかしい

河内長野市 大島ともこ
泡切れも頭の切れもいま一步

藤井寺市 鈴木いさお
先はまだ長いチャンスは寝て待とう

八尾市 宮崎シマ子
風呂場までビール勝手にやってくる

羽曳野市 中川ひろ介
田植え終えゆで蛸酢みそ半夏生

米子市 池田 美穂
困ったわワイロが泡の中にある

倉吉市 牧野 芳光
三世代同居に耐えているのです

豊中市 水野 黒兔
美人の湯まだ母さんに出ぬ効きめ

大阪市 平井美智子
ポコポコとゆうべの悔いが浮いてくる

土佐清水市 辻内 次根
真夜中に芋焼酎の作り方

藤井寺市 若松 雅枝
お迎えは歳の順とは限らない

岩国市 上村 夢香
「神田川」聴いてあの頃想い出す

西宮市 福島 弘子
見兼ねたか夢の中にも父の喝

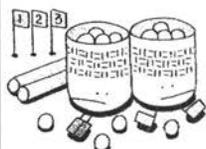
男鹿市 伊薇のおよし
風呂酒飯と言える幸せかみしめる

可見市 板山まみ子
欲張ると身を減ぼすと知らされる

箕面市 広島 巴子
感謝込め洗う父の背丸くなる

橋本市 石田 隆彦
新元号昭和をさらに遠くする

10月号発表 (8月15日締切)



(平本 勝彦 画)
柳箋に2句

川柳塔社各賞選考規定

- ① 川柳塔社には、路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・各地柳壇賞の六賞があり、毎年10月に表彰する。
 - ② 自選集の作者は、すべての賞の対象としない。
 - ③ 各賞とも、原則として同一人に同一賞を受賞しない。
 - ④ 路郎賞・川柳塔賞については、準優秀作の場合、上位は差し支えないが、同位または下位には受賞しない。
 - ⑤ 二賞の選考委員は、その任期中は賞の対象としない。
 - ⑥ 路郎賞・川柳塔賞の選考要領については、下記の通り定める。
 - ⑦ 愛染帖賞は選者が決定し、主幹の承認を得るものとする。
 - ⑧ 檸檬賞は二名の選者がそれぞれ5句ずつ選出した10句中から主幹が決定するものとする。
 - ⑨ 一路賞・各地柳壇賞は、常任理事会の委嘱を受けた選者が受賞句を決定し、主幹の承認を得るものとする。
- (備考)
- この規定は、現行の選考規定を一部改定したもので、常任理事会で承認の上、平成二十七年から実施するものとする。

二賞選考規定

- ① 路郎賞 川柳塔欄の入選句から5句
川柳塔賞 水煙抄欄の入選句から5句
昨年9月号から今年8月号までの一年間の入選句の中から自選し、8月号に刷込みの応募用紙を使用の上、8月10日必着で本社宛郵送する。
- ② 第一次選者は主幹・理事長・副主幹・副理事長・編集長とする。各賞15編ずつ選出し、第二次選者へ郵送する。
- ③ 第二次選者は折り返し、路郎賞、川柳塔賞の各選考結果を本社宛通知する。選考には順位をつけ、第一席(5点)、第二席(4点)、第三席(3点)、第四席(2点)、第五席(1点)の五編の番号を予め本社で用意したハガキに記入のこと。
- ④ 第二次選者
本社関係 主幹・理事長
地方関係 【4】「プロック (11) 選者数
【東日本】(2) 北海道・東北・関東・信越・北陸・東海
【近畿A】(4) 大阪
【近畿B】(2) 滋賀・京都・兵庫・奈良・和歌山
【西日本】(3) 中国・四国・九州・沖縄・海外
合計13名
- ⑤ 地方関係の選者は、適宜交代制を取り、均衡をはかることにする。
川柳塔欄・水煙抄欄に6ヵ月以上出句した人に応募資格を認める。

平成三十年二賞選考委員

第一次選者（七名）

小島 蘭幸・新家 完司・川上 大輪・西出 楓楽
木本 朱夏・鶴田 遠野

第二次選者（十三名）

本社関係（二名）

小島 蘭幸・新家 完司

地方関係 【4】 ≪ブロック（11）≫ ≪選者数

【東日本】（2）北海道・東北・関東・信越・北陸・東海

福士 慕情・松山 芳生

【近畿A】（4）大阪

米澤 俣子・柿花 和夫・伊達 郁夫・片山かずお

【近畿B】（2）滋賀・京都・兵庫・奈良・和歌山

古久保和子・堀 正和

【西日本】（3）中国・四国・九州・沖縄・海外

黒田 茂代・森山 盛桜・中居 善信

昨年九月から今年八月の間に

誌友から同人になられた方へ

「路郎賞」「川柳塔賞」のいずれか月数の多い方を選
択して応募下さい。

ただし、「路郎賞」には川柳塔欄作品から、「川柳塔
賞」には水煙抄欄作品からの応募となりますので、間
違いのないようお願いします。

平成三十年各賞選者

愛染帖賞 新家 完司

檸檬賞 山口 光久 斉尾くにこ

一路賞 水野 黒兎 政岡日枝子

各地柳壇賞 藤村 亜成 山本希久子

本社 七月句会

◇七月六日(金) 午後一時
アウイーナ大阪

大阪北部を震源とする震度6弱の地震に見舞われて二週間余り、雨に関わる特別警報が飛び交う六日、路郎忘七月句会は、91名(内投句者8名)の参加で開催された。まさに雨にも負けず、多数の方々、とりわけ選者をお願いしていた美馬りゅうごさん所属の番傘をはじめ、多くの他柳社の方々のご出席を得ていつも以上に活気ある句会を持つことができた。初出席は北山恵一さん(大阪市)と森茂俊さん(茨木市)。

豪雨による交通機関の影響で、出席がかなわなかった木本朱夏さんの今月のお話は、九月句会のお楽しみということになった。ちなみに、夜明け前に自宅を出られた蘭幸主幹は午後一時間、完司理事長は午後三時前に会場に辿りつかれた。

月間賞は森中恵美子さん(摂津市)

(司会) 真理子 (脇取) 志津子・まつお

(受付) 蕉子・万紗子 (懸垂幕墨書) 耕治

(清記) 憲彦・勝弘

席題「飲み物」

西出 楓案 選

野菜嫌いスモージーなら通る喉
飲み会は計算通りいきません
牛乳と青汁だけで済ます朝
ハイカーの幸はごくりと岩清水
カルピスからワインへ進み恋実る
夜毎夜毎梅酒の味見して眠る
ラムネから飛沫シユワツと夏を呼ぶ
ラッパ飲み絶対好調はまだ続く
冷えたビール虎が勝とうが負けようが
定年で焼酎党の仲間入り
ビール飲んで水割り飲んでお勘定
幸せの渴きでしようかお茶ばかり
先ずビール御代わりをしてみたら
袈裟脱いだ和尚の悩み聴くお酒
思い出が喉にはじけるラムネ瓶
全没の痛みを癒やすコップ酒
ビールしかない息子の下宿先
飲み物で気遣いわかるおもてなし
青春の苦さをコーヒーに溶かす
ラムネから浮かぶ三丁目の夕日
飲み放題 三分分とはいかぬもの
お帰りと冷えたムギ茶が飛んでくる
頂上で飲む極楽の余り水
陽気な酒だ皆互いに苦勞人

宇都満知子 柴本ばつは 村上 玄也 初代 正彦 村上 玄也 山田 耕治 鈴木 かの 小島 蘭幸 上田 和宏 奥澤洋次郎 上田 和宏 大楠 紀子 坂 裕之 加川 靖鬼 岡部 幹和 坂上 淳司 山岡富美子 田中 廣子 小野 雅美 山本 進 古今堂蕉子 鈴木 栄子 美馬りゅうこ 今井万紗子

魂の渴き潤すうまいお茶
甘い水待つてて煮え湯飲まされる
今日の首尾フツシユワツと毎ビール
飲むためにまだまだ命乞いをする
初恋の味縁日のニツキ水
梅雨晴れ間梅酒が出版待っている
甘口も辛口も無し酔えばいい
生中で乾杯すればみんな友
酒はちんちんビールキンキン日本人
茶柱の今朝を喜び合う二人
歳なのか真水に勝るものはない
ワインの赤とシャンソンを聞いている
卵酒あしたは医者へ行きなさい

大楠 紀子
小金澤貫一
伊達 郁夫
清水久美子
居谷真理子
山岡富美子
龜山 常男
森口 美羽
内藤 憲彦
山野 寿之
江島谷勝弘
小島 蘭幸
山田 耕治

和の嗜みPETのお茶がわやにする
遥かなり昭和レスカが通じない
朝々をたのしむ佛さんのお茶
水を飲み塩をなめよと夏の行
稠冷まし昔はなしがくどくなる

鳥田 誠一
銭谷まさひろ
森中恵美子
大久保眞澄
油谷 克己

花に水僕にお酒というサブリ
アンニユイ午後はホットのレモンティー

藤井 安造
澤井 敏治

天 酒一合一合ほどの夢を見る
伊達 郁夫

究極の飲み物母乳だと思っ
軸

兼題「持 つ」

松尾美智代 選

持ち寄りで食べてしゃべって夏神楽
持ち時間目に見えて減る砂時計
持つほどに欲深くなる人のさが
左手の客はスマホと決めている
一膳の重たい箸を持つ夕餉
もう今は妻の役です荷物持ち
重荷持ち平均台を行く暮し
持ち金はきれいに使い逝かした
俺は持つお前持つな不公平
持ちましよう若い見知らぬ手が伸びる
足し算の好きな財布を持ち歩く
柄杓さえ持つ手が少し重くなる
輕輕と持ったプライド重くなる
背筋のばし持ち続けたい意地とはり
弁当を持つと安心する鞆
ロボットがころ持つ日がいつか来る
表情に裏と表を持つお金
煩惱をしつかり持つて生きている
どんぐりの知恵を持ち寄る会議室
最期まで歩き続ける夢を持つ
荷物なら僕が持ちましょキミの分
核兵器持つて非核を叫ぶ国
ジョーカーを隠し持つる妻の笑み
生まれつき綺羅星を持つシンデレラ
母はまだ僕のへその緒持っている

山根 妙子
清水 英旺
森田 旅人
銭谷まさひろ
中村 恵
上田 和宏
水野 黒兎
柴本ばつは
平賀 国和
大久保真澄
川端 六点
藤原千恵子
山口弘委智
能勢 良子
穂山 常男
西出 楓葉
山野 寿之
上山 堅坊
森 茂俊
上山 堅坊
立蔵 信子
大内 朝子
平井美智子
清水久美子
山田 耕治

待ち合わせ文庫一冊持つて出る
微笑みの陰に互の持つ事情
バラの棘心の奥に持っている
持つべきは友窮状に助け船
奥の手は持っているけど見せません
ガンバレと片道切符持たされる
持て余す時間に見合う趣味探す
貧乏ですが糊しろは持つてます
手弁当で被災地支援ボランティア
原発をたくさん持った被爆国
ぬか漬けにこだわり持つて夏の膳
厳しさと優しさ母は二刀流

鈴木 栄子
奥澤洋次郎
内田志津子
村上 玄也
榎本日の出
今井万紗子
金川 宣子
鈴木 かこ
磯島福貴子
藤井 宏造
美馬りゅうこ
山口弘委智
水野 黒兎
太田扶美代
古今堂蕉子
松岡 篤
澤井 敏治
油谷 克己
森 廣子
天

持つ人のところへ寄っていくお金
持てるだけ持たせて母の上機嫌
血や肉になった蔵書は捨てられぬ
持った時から断捨離が待っている
里の風こころ和ます味を持つ
人
持ち味のやさしさ發揮してナース
どんな時にもぶれぬ物差し持っている
地
一つ持ち一つ忘れていく荷物
軸
小さいけれど持ち続けている夢がある

片山かずお 選
兼題「ざらり」
ざらりとは行かぬ女の嫉妬心
方言をざらりと添える道の駅
思い出をざらりと割る地震
不都合はざらり忘れる良いあたま
切れば治る外科医ざらりと言ったのに
喉元をざらりと過ぎていく思案
友達の俣でいようと逃げられる
場を讀んでざらりと話題変えた友
年齢は聞かぬざらりと干支を聞く
夕涼み浴衣美人と袖が触れ
子を連れて帰って来た娘のざらり
俺が死んだら嫁はん子供頼むわな
父などはざらりと捨てて息子たち
ざらりとは流せないから悶えてる
うな茶漬けざらり盛夏も受け流す
言い難いことをざらりという若さ
うちわ手に浴衣ざらりと京の夜
両の掌をざらりと掬す黒揚羽
すき焼きはやめて茶漬けの仲になる
気配りの苦言ざらりが身に沁みる
年の功ざらりと嘘も言えますよ
北新地ざらりと男嫁すまま
そうめんで嬉し寂しの一人膳
騙されてやるうざらりと聞き流す

米澤 俣子
北野 哲男
水野 黒兎
松岡 篤
澤井 敏治
中村 恵
伊達 郁夫
水野 黒兎
銭谷まさひろ
大西 將文
古今堂蕉子
太田としお
日野 愿
森 廣子
栃尾 奏子
山岡富美子
森 廣子
丹後屋 肇
両澤行兵衛
岡部 幹和
上田 和宏
藤井 宏造
藤原千恵子
加川 靖鬼

しがらみをさらりと捨ててから気楽
断捨離を決めてさっぱりした我が家
ゆつくりと歩きさらりと昨日脱ぐ
過去すべてさらりと消して嫁にゆく
宮仕えさらりと捨てて趣味の道
妻の愚痴いつもさらりと聞き流す
反抗期無視という武器持っている
判子をボンさらりと悔いのない別れ
男と女さらり別れたなんて嘘
肌触りが一番夏のTシャツ
男って何サさらりと言う女
万感をさらり切り裂くシュレッダー
寸前でさらりと逃げた福の神

住

キザなことさらつと言えた星月夜
愚痴小言さらりと流し生き上手
子の嘘を父は笑顔で聞き流す
ごちゃごちゃせんとあつさりあの世行きはった
間違いをさらり認める太い骨

人

野暮なこと言ふなとさらり冷やっこ
妻の愚痴さらりと躲し趣味の道
今日の憂えさらり捨てよと陽が沈む

地

山本加お里
中川ひろ介
穂山 常男
西出 楓楽
平賀 国和
松尾美智代
能勢 良子
鈴木 かこ
太田扶美代
宇都満知子
油谷 克己
上山 堅坊
大西 将文

天

美馬りゅうこ
前田 紀雄

軸

西出 楓楽

兼題 「細かい」 藤村 亜成 選

ドカンと花火細かい事はぶつ飛ばす
説明が微細で核心に遠い
細かい字読ませる気ない契約書
右斜め四十五度で撮れと言う
ちりめんじゃこの雄と雌とを選り分ける
感情の細かい人とする疲れ
さりげなくきめ細やかな旅の宿
細かいことはあとでゆつくりまずは飲み
計画は細かく資金大雑把
細かいこと褒めて大変喜ばれ
一本では役に立たないかすみ草
細かいの無いと言うなら替えたげる
子の手紙ルーベで拾う小さい文字
細かいで何でも可でも領収証
戸口まで新聞届くいい国だ
義母が来る前は障子の棧を拭く
入れ歯には細かい粒が恐怖なり
細かい字で大事を記す契約書
若沖の秘密隠れていた産毛
細かいといくらでも言え溜めている
一円が合わず残業しています
日に日にと具材細かい老夫婦
ミリの誤差許せぬ人の無精ひげ
拘わりのコンマ一ミリ匠の技

鈴木 かこ
中村 恵
穂山 常男
栃尾 奏子
西出 楓楽
森口 美羽
上村 夢香
木藤こみつ
水野 黒兎
上山 堅坊
藤井 宏造
山田 耕治
山野 寿之
太田としお
前 たもつ
澤井 敏治
磯島福貴子
前 たもつ
加川 靖鬼
日野 愿
川端 六六
山下 純子
吉村久仁雄
内田志津子

住

釣り糸のあたりに弾む竿の先
細かいこと言われ広がるメランコリー
師の言葉身に沁みるまで咀嚼する
骨太を忘れ各論ばかり時間無駄
妻の愚痴細部にわたりむしかえす
こまかい連めだかの子供生まれてた
青汁に乳酸菌が百億個
生態系犯す大海のブラゴみ
みみつつい事は言うなとケチが言う
くよくよの細かい悩み天日干し
細かいこと黙ってできる人がいる
大仏の前で細かい嘘をつく
細かい事みんな忘れる青い空

人

細かいし恥は知らんし嘘つくし
細かい事言いすぎたかな妻の背
点字から広がる手探りのあした
背心の指からもれる罪数多
霧の雨街灯だけが知っている

地

加川 靖鬼
藤井 宏造
本田 智彦
山口弘委智
中川ひろ介
油谷 克己
宇都満知子
両澤行兵衛
大内 朝子
川端 一步
大西 将文
松尾美智代

天

内藤 憲彦
今井万紗子
大楠 紀子

軸

今井万紗子

兼題 「旅」 美馬りゆうこ 選

人生を旅する酒という友と
地球儀を無銭旅行で一回り
待つ人が居るうちにする一人旅
人生の旅路まだまだ好奇心
九州実感日没の差と方言と
途中下車してから運が付いてきた
この世ではいつも旅人さてあの世
退院をしたらと妻は旅プラン
ときどきは鱗を剥がす旅に出る
取り敢えずテレビをつける旅の宿
各停の旅で彼岸はまだ遠い
人間の迷いを解く一人旅
人の世はひたすら西へ向かう旅
どこから来てどこへ行きつのか私
方舟のその後は誰もわからない
心の鍵はずし小さな旅に出る
三年半よくぞ旅したはやぶさ2
旅先で聞き入っている土地民話
妻からの注意書き見る旅の宿
東へ西へ青春きつぷ汗をかか
四万十の旅原風景はここにある
ローカルの訛豊かにぶらり旅
表向きお参りですがグルメ旅
今生と常に覚悟の旅カパン

御当地の名前あるから買う土産
トイレタイムたっぷりお年寄りの旅
一駅を歩き私の小宇宙
朴葉味噌あてにチビチビ飛驒の旅
巴里遠し三食撰ってやつと着く
良い旅と言って人生終わりたい
もう一度私始める旅に出る
渡り鳥地球の風を読んでいる
温泉の素で気分になれますか
一片の土器で古代へ旅が出来
一泊の二間軒を泳がせる
妻だけが活き活きしてる旅の宿
ひ孫なら行けるだろうか月旅行

山田 耕治
川端 六太
平井美智子
古今堂蕉子
木藤こみつ
出口セツ子
内藤 憲彦
加川 靖鬼
西澤行兵衛
松岡 篤
岡部 幹和
初代 正彦
川端 一步

沖繩の話へバリが横入り
宿帳に火野正平のファンと書く
スローライフの首が並んだ砂の風呂
人逝つて人が生まれて時の旅
水の章火の章旅はまだ途中
産道をぬけここからの長い旅
宇宙旅行トラベルミンは効くやろか
天と地をわがものにする独り旅
軸

森 茂俊
内藤 憲彦
柴本ばつは
大西 将文
西出 楓楽
鈴木いさお
大久保眞澄
森中恵美子

兼題 「想像」 小島 蘭幸 選

想像以上に役者一枚上だった
想像もしていないなかつた震度6
天国の句会想像して楽し
核廃絶想像します夢見ます
想像の翼広げて老いも翔ぶ
現実辛い想像はウフフフ
南海トラフにびびりまくっている
想像を遥かに超えたタイの子ら
何にでもなれる私の小宇宙
想像で苦笑仁王のプロポーズ
想像と違つてTシャツの社長
免許証要らぬ車がやって来る
想像通り何時もの人と居る安堵
見たことはないがポインに違いない
想像を越えた七段未だ十五
どう想像しても行きたくないあの世
想像の天国死ぬの怖くない
「駅裏で酔っています」というメール
幼子の夢にアンパンマンが出る
想像の翼ひろげたランドセル
モザイクの下を想つてみたりする
想像と違うわたしの遊行期
百歳へ夢膨らます箸二膳
想像はレモンサワーの味がする
イメージを大事にしたい声のひと

青木 公輔
木藤こみつ
山田 耕治
川端 六太
日野 愿
山本 昌代
清水久美子
鈴木いさお
出口セツ子
川端 六太
森 茂俊
北野 哲男
今井万紗子
栃尾 奏子
和氣 慶一
片山かずお
大内 朝子
平井美智子
油谷 克己
太田扶美代
太田扶美代
西出 楓楽
大楠 紀子
西出 楓楽
藤村 亜成

ヒマラヤを飛んだ想像を越えた

古今堂蕉子

二十年後そこに百歳の青春

奥澤洋次郎

想像の中で自由な翼持つ

出口セツ子

お月さま日本の未来見えません

前 たもつ

ご家庭があるのね庭の三輪車

栃尾 奏子

理想像追いかけて着地出来ない

森口 美羽

雑念の中に裸婦像現われる

村上 玄也

明日からは生れ変わろう傘寿なり

榎本日の出

少年の眼差し遙かはるかはるか

藤井 宏造

これからも夢は延長線にある

立蔵 信子

パリ祭を想うキャミソールの背中

山田 耕治

火葬場は混み合うだろう私たち

森口 美羽

佳

ネッシーもUFOも見た寂しがり

島田 誠一

十年後横にはa i b oくんがいる

立蔵 信子

ぬかるみの中に埋蔵金はある

鈴木 かこ

ヨガ教室にふつとカレーの匂いする

銭谷まさひろ

君とともに想像するよジョン・レノン

居谷真理子

人

未来図のリーダーだったのはアトム

美馬りゅうこ

地

人間に想像力という翼

居谷真理子

天

西方浄土の老人たちと花を観る

森中恵美子

軸

想像の世界で妻とまだ遊ぶ

句会 燦 燦

六月句会を読む 弘 津 秋の子

迷路行く足に合わない靴履いて

森 廣子

地震お見舞い申し上げます。私の住む茨木市は震度六弱でしたが六日後の新潟の川柳大会参加を決意。何とか前夜祭会場にたどり着き亡父の友人にご挨拶。思わず一人旅の心細さを吐露すると喝をいただきました。「一人でも大会に行くという気力こそが(川柳の)身に着く道ですよ」岡山から参加の九十歳の女性柳人の一言です。帰宅してこの森廣子句を、しみじみ味わう梅雨明けです。

もやもやな返事で妻にどやされる

丹後屋 肇

もやもやの湯気も一役美人の湯

金川 宣子

地獄極楽見てきて今は聞き上手

吉村久仁雄

ちよつといつぶく。男も女も本音で話し出すとおつかない。

聞き上手あたりで止める心意気がいい。

七色の葉並べてジャンプする

榎本日の出

そついえは結婚七年目だった

上田ひとみ

七色といえは虹。七年目はラッキーセブン。数字を使ったこの二句は、数字の持つ魔力に負けない句である。

デカイ足デカイ態度の声変わり

森田 旅人

僕より若いのに僕よりも薄い

鈴木いさお

日に三度ジャンプをすると背がのびる

木藤こみつ

秀作が生まれ出そうなもやもやだ

新家 完司

はずしたら私の戻る席がない

山本 進

波瀾万丈おいしくなってきたバナナ

平井美智子

各題からの一句。今月の私のテーマは「気力のある句か否か」

である。

なんだかんだあつた砂丘と海の色

立蔵 信子

新潟佐渡の地を歌った北原白秋の「砂山」を思う。

たしなみ

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願
いたします。
編集部

川柳花の輪(大阪)

岡本 薫報

夕日まで子等のまたネに笑み返す 風
夕日見る僕の終焉見てるよう 勇太郎
夕日に染まり怒り悲しみ溶けてゆく 亜成
無口ですカニがならんだ旅の宿 やすの
オリブが夕日百選自慢する あや乃
それぞれの夕日見ている倦怠期 薫
長い影それよりも遠い妻の距離 正太郎
海に入る夕日見たさに免許取る みちる
リハビリ後夕日背にして帰路につく 昭好
無口より少し陽気が生き易い 泰子
語らずも父の背を見て子は育つ 信子
無口だが目が笑ってる好々爺 敬子
だんまりも夫婦円満秘訣かも 笑子

和歌山三幸川柳会

楠見 章子報

雁風呂へ諸行無常の波の音 和子

啜啄同時鳥の親子にある秘密
さみしくて繋がりたくて鴨になる
バードウォッチング毎日できる村に住み
楽しんで小鳥が守る無人駅
鳥の声聞きたく赤い実を残す
お黙りとくじやくが羽根を広げだす
口下手な九官鳥ですみません
親離れ子離れツバメ見てごらん
若沖の鶏の目に射貫かれる

貴婦人が見たら羨む鶴の足
北方へ群れて飛ぶ鳥雲に入る
火の鳥になって女は空を舞う
諦めた数だけ視野が狭くなる
法要日散った家族を呼び寄せる
鉛筆を削る木の香と森の香と
新しい元号消える昭和の香
樟脳が守る私の一張羅
お茶煎って男住まいの部屋の中
控え目に香水振って逢いにゆく
残り香が染みついている指の先
控え目にポリシー曲げぬかすみ草
引き抜いた草にも命あるのです
人生の道草も又糧となる
床の間の草一本にかしこまる
絵手紙で草の命を追いかける
夏野菜待つ熟成の糠の床
じつくりと磨きかけてる父の靴

日出男 知香 日香 菜摘 ひろ子 明子 千鶴 智三 敏照 昇 宏枝 准一 俣子 一雄 幹子 純子 八重子 次根 当代 昭枝 碧 保州 富香 章子 宏夫 まさ 絹子

じつくりと論せば刺も抜けてくる
念入りに化粧した顔 Nonetheless
殿様の気分じつくり天守閣
じつくりと聞いた意見にある魔法
自画像の口はじつくり語りそう
百姓になりきるために二十年
じつくりと百寿の軌跡うたに詠む

川柳塔すみよし(大阪) 森松まつお報

よう聞きや始末とケチは違うんや 宏造
美味しいと思つて食べるパンの耳 ゆみ子
始末して留学させた帰らぬ子 里子
始末して子等を育てた寡婦の意地 隆昭
始末屋のオッチャン詐欺にあいはった まつお
始末に悪い中途半端なお金持ち としお
笑っちゃう日大の始末の悪さ 勝弘
火の始末良くて浮気の前科なし 克博
断捨離の始末に負えぬ家具家電 満作
始末したあとは後悔などしない 芳香
皺とシミ始末出来ず持ち歩く 日の出
花見大会ゴミの始末はだれがする 一歩
福祉には始末防衛費にはザル 満知子
私逝く後の始末は風まかせ 舞夢
気のおけぬ仲間にさらすまぬけ面 五月
セクハラ市長もそうもならんツラばかり ひろ介
表情の明るさ何かいい事あったのかな かりん
沈みがちな空気相ます八の眉 美籠

表情がすぐ顔に出る善人だ
表情が堅い人程根は優しい
子を産んで女は母の顔になり

微笑みに哀しみ秘めたマリア像
ポタン穴ずれたまんまで電車乗る

ちくはくをおしゃれにします若者は
ちくはくな評価に私埋められる

ちくはくもおかめひよつこ味が出る
ちくはくな会話も通じ合う夫婦

花の散るように散りたい死生観
ロボットが雇用を奪う近未来

白熱の心を奪う名勝負

川柳塔みちのく(青森) 稲見 則彦報

どしゃぶりに対峙している接木苗
自堕落な一日がまた陽が昇る

苗植えた数だけ折り返り深くなる
拉致と核アウトラインも掴めない

新緑のように元気な孫五人
好きなよに使いなさいと朝が来る

ツアアウトここから逆転劇がある
エレベーター二人つきのドッキドキ

私がアウトと言えばアウトです
グリーン車で銀河の旅へ先立ちぬ

人知れず雲になる火葬場のけむり
ブナの森わつと緑に水温む

金婚式リング一本植ええました

シマ子 舞蹴

俊雄 克己

美世子 直子

雅美 美子

由一 妙子

大輔 廣子

芳生 則彦

風来坊 嘉

重虎 美鈴

井蛙 吹喜

慕情 京子

黙人 洋子

一呑

新緑に寿命一日延ばされる
山野草私も凜と咲きたいな

招き猫エレベーターも暇である
アウトでもキッと見つかる生きる道

早乙女によく似て苗のたおやかさ
田んぼアートあの辺植えたと自慢する

アウトライン生き方変える靴を買う
脳休めアウトレットのショッピング

カブ届き美味しなれとつけてみる
世渡り上手夢の欠片で生きのびる

一本の匙がヒト科を掻き混ぜる
八十路坂他人の杖も借りて下り

いいことも悪いことでもお茶にする
当てようと思えば当たらない磔

芸のない男が選ぶ下足番
指の先から四才少女めく

メダルって流した汗で出来ている
半眼の釈迦牟尼仏はお見通し

はびきの市民川柳会(大阪)中川ひろ介報

一人の正義日大を押し倒す
ミートウーの狼煙は強く美しく

一押しが足らず見事な片思い
男社会に風穴開けた女性記者

革命の狼煙を上げるぞ付いてこい
拇印でも離婚届は受付ける
雑草の根性欲しい甘えんぼ

柳子 孝子

ひとし 小とみ

隆樹 英子

初枝 真由美

久美子 のぶよし

龍馬 ふさゑ

花峯 霜石

吞舟 和香子

規子 きよし

遠野 みつこ

壽峰 ちづる

欣之 いさお

大子

鈴木 いさお 選

針金に負けるもんかと松の意地
絶好のチャンスは素手で掴まえる

フライドと一緒に散つてゆく桜
あの世にはずり会いたい人ばかり

夜叉になる覚悟の爪をといでいる
終活をやめて婚活しています

明日はまた違うところが痛くなる
曲がり角なにか期待をしてみよう

湯上りの赤ん坊には敵わない
虚実混ぜ今日の私を醸し出す

佳句地十選 (7月号から)

松本文子 選

夕焼けの向こう歩いてみたくなる
フライドと一緒に散つてゆく桜

あの世にはずり会いたい人ばかり
お手をどうぞラストダンスは花の香と

つぼみから葉桜までを駆け抜ける
一粒の涙が落ちて咲いた花

村道を走りカーナビ黙らせる
メガネ拭く心の窓を拭くように

ヘルパーさん迎える掃除しています
川柳を口ダンのポーズで考える

吹喜 碧

哲子 シマ子

花門 道子

わこ 紀の治

小雅美

明子 吹喜

哲子 成子

隆充 常男

弘光 信二

葉子 雄太郎

雑草という名の草はまだ知らず
久仁雄

漬物の押し石になる君の尻
清

栃ノ心押しして吊つてと我武者羅に
紀雄

押し付けた嫉横道それ出した
高鷲

折に触れ好きの狼煙を見せておく
美龍

押しピンのあと三つあるピカソの絵
まつお

長恨歌愛の苦しみ押し並べ
専平

急いでも間に合わぬ時あるものさ
雄太

足もとは三途の川だ押さないで
シルク

熊が出た狼煙あげます来ては駄目
千鶴子

永田町のろしが上る解散だ
真

押しつける元氣ないので付いていく
さくら

ノーベル文学狼煙上がらず見送りに
洋一

私から貴女に狼煙あげました
フジ

男子誕生狼煙の様に鯉轍
喜久子

雑草もやがて可愛い花になる
一文

婚活の息子の背を母が押す
久仁子

あまいな言葉の中に見る本音
泰子

稲村の狼煙忘れず準備する
ひろ介

竹原川柳会(広島) 古田 太虚報

人生を見事に生きた母の指
鬼焼

外交デビュー見事脅しを止め握手
淑子

赤字家計見事乗り切る主婦の知恵
幸子

告知後も見事な生き様見せる友
慶子

登校の子が撫でていくボチの背な
輝恵

老ひとりアイボットにして生きる
弘子

ベットロス夢の中では元気です
笑子

ご主人様よりも高価な服の犬
夢香

お互いがベットのような若夫婦
宣之

あの日からベットショッブはもう行かぬ
蘭幸

どくだみの花の白さに祈ること
比呂子

白と黒俺はグレーで生きてゆく
一徳

久しぶり川柳作り空白む
半徳

真つ白でないが優しい再生紙
栄香

真つ白い心でいたい百合が好き
千代美

人の世に染まらぬままの白で住む
規代

肩書を消したことから余白の美
敬子

文字よりも重たい空白のページ
昭紀

恋人は緋牡丹母は白牡丹
寛

いかなこのくぎ煮御飯が止まらない
歩美

冷たい雪背負う蓄の息づかい
貞子

雨降りふつと淋しくなるのです
厚子

健康を氣にする年になりました
史子

せばんこう10ばんもらうキャプテンだ
はると

あおいそらしゅうつとひこうきもふたつ
ちか

京都塔の会 山田 葉子報

青もみじ見下ろしてんと大文字
求芽

真如堂初夏には初夏の仏達
元一

新緑の緑に心洗われる
忠子

ブレイキをセットされてた知らぬ間に
ルイ子

ブレイキを忘れアクセル踏む不覚
哲子

母の言葉ブレイキにして子は育ち
篤子

ブレイキをかけると火花散る会議
則彦

やりくりのスリル知ってる勝手口
洋志

遊ぶ時間作るやりくりだけ上手
葉子

やりくりは嫌な姑に教えられ
五月

赤シールともやして日目を切り抜ける
公子

順風の運を味方に昇る椅子
欣之

幸運を生まれながらに持つてる子
弥生

乗り遅れ電車の事故を免れる
菊江

運命だと思えば叱咤にも余裕
文代

悪運にしようぜ気合いで立ち向かう
ふりこ

ボジティブに生きたれば運も花咲かす
美智代

二刀流運も味方に人気者
満子

そこそこの運勢そこそこの余生
扶美代

やりくりで暮らすなかにも花がある
雪菜

やりくりで苦労していた母想う
泰夫

やりくりにとどき背中たたかれる
保子

弁解をやりくりしてる無責任
弘子

やりくりをした遠い日の母偲ぶ
千枝子

脳トレにもブレイキ甘くなる海馬
宏子

ブレイキを忘れて手綱絞められた
靖鬼

好き過ぎてブレイキ踏む気まで失せる
かずお

官僚のブレイキみんな錆びている
美津子

リベンジに燃えて涅槃の庭に座す
千代

臆月のみどり明日を信じた色である
多津子

本堂へ寄り添うように沙羅双樹
正彦

喋つたら止まらない人横にいる
益子

朱の門を額縁にして青もみじ
英旺

川柳塔唐津(佐賀)

仁部 四郎報

孫からの記念の写真卒寿です
入院日覚悟を迫る白いシャツ
袖にしたおとこ何人いたっけな
人の世の起伏分け合う会葬者

川柳塔なら

大久保眞澄報

起き上がり小法師に托す心意氣
長寿国八起ききこころでない暮し
愛の奇跡起る気配のおぼる月
大火傷まだ目が覚めぬ鬼といる
転んだらもう起きられぬ老いの坂
五時起床不要不急のおじいさん
風鐸がやさしく起こす古都の風
身を守るトップの浸る虚偽詭弁
五七五孤独に浸る暇はない
妄想に浸って招く迷い道

明日枯れる花にたつぷり水をやる
ぬるめの湯至福の刻ですひとりです
多分中毒だろうビールが旨い
泥水がどつぷり翼翻す
好き好きと筆にどつぷり乗せて言う
どつぷりの墨で一字を書き上げる
この暑さ象も親子でどんぶりこ
ぬるま湯でじっくりと待つ残り福
そしてそして指の先まであなた色

實 蜂 朗 高 明 四 郎 惠 美 子 比 呂 志 富 子 よう 子 將 文 眞 澄 百 合 子 史 郎 紀 雄 贊 郎 万 紗 子 理 恵 勝 弘 雅 美 甚 之 市 辰 雄 美 代 子 柎 子 成 子

どつぷりと酔わすフォークの弾き語り
CDにどつぷりつかりリフレッシュ
年毎にどつぷり水漬く町がふえ
父と母手をつなぎゆく虹の橋
南北が待ちこがれる虹の橋
七色の夢胸に抱き子が巣立つ
夕立の洗った空に竜渡る
虹色の絵の具で描く夢一重
人生の虹は具象か抽象か
虹はいま頭上わたしは活火山
大空へ虹を飛ばしたシャボン玉
和平への虹の架け橋色足らず
七福神住んでいそがな虹の色
過疎進む故郷へ細い虹懸かる
結願の虹を夢みて百度石
老いてまだ明日に続く虹を抱く

富柳会(大阪)

関 よしみ報

元氣でも知らずに出るとっこいしょ
まだ八十もう八十と思うまい
大丈夫視力聴力平均値
臍曲げて後の祭りの中に居る
後始末他人に委ねた無責任
カラスでも体を張って子を守る
マスコミは後から正義振りかざす
後ろからそとと答えのメモがくる
まだまだと発破を掛けて伸ばす才

ふりこ 孝子 敬子 優子 貫一 のぶよし 光堂 萌子 美智子 盛隆 和夫 倫 國治 崇明 恭昌 伸雄 田鶴子 未知 澄子 壽峰 清 常男 隆充 高鷲

後世へ語り継がれていく勇氣
赤い糸もつれずついに最後まで
糊代のまだを残しているこの世
触れられてあの日の棘が抜けました
満身で命ひろげて蟬の羽化
火の鳥は己が熱さを持って余す
後出して妻には負けておく平和
まだまだを磨いてわたくしが光る
後進に全て譲った日本晴
まだまだと未来を探す夢さがす

城北川柳会(大阪)

近藤 正報

すぐ揺れる同情ばかりするピアス
空き家の庭花に同情水をやる
ランダムに選んだ中の優れもの
真実を真綿に包み幕を引く
母さんのリュックに詰まる常備薬
包んできた愚痴を聞いてと亡母の前
お隣から悲鳴おんなじ番組だ
愛たつぷりと野菜作りは土づくり
扇風機とストーブ同居して平和
核禁止の踏み絵を逃けた被爆国
女子会でよく食べしゃべり充電す
包んでもこぼれてきますモリとカケ
みすゝ読み脳へ明日の風を入れ
会見を観てる夫の声潤む
今だつて夢はそのままいい余生

武人 一文 あかり かこ 奏子 惠 寿之 よしみ 欣之 森子 星雨 榮子 満作 良子 あさ子 麗 直樹 博 堅坊 杵香 勝弘 野鶴 千恵子 北舟

花びらが土に還っていく無情

太陽の恵みに土は裏切らぬ

わがままも一緒に包み介護する

青田すくすく土の温みと陽の恵み

僕よりもボクを知ってる妻が逝く

土弄り命吹き込む母の指

ジェラシーを包み隠している笑顔

同情が愛に熟して結ばれる

男なら泣くな泣くなと泣いた母

もうひと花咲かさな土に還らない

愛おしい夢を包んだみじの手

ボディガードなして町ゆくそっくりさん

フェニックスガードの甘さ思い知り

土の香を嗅いで人間とり戻す

母親は無償の愛で児を包む

寝つくため用意した本眠らせぬ

大逆転神の姿をチラと見た

折り返す復路は違う景色見え

そろそろと埋め頃ですよ土は言う

堆肥まく土の匂いが今も好き

南大阪川柳会

松岡

家族みな父の背広にぶらさがり
リクルートスーツが跳ねる若さだ
終電車背広のしわに見る疲れ
探し物先ず背広を裏返す
背広では貸せまへんかと質屋さん

郁夫 一步 洋志 志華子 宏造 雅美 満洲夫 朝子 和夫 賢子 武彦 寛昭 縣笹 たもつ 高志 弘委智 俊雄 めぐむこ 捷二 正 篤報 更紗 博 弘委智 柳伸 篤

天国からお呼びかからぬ頑固者
採血は右腕からとこだわって
道曲げぬ頑固とおして孤立する
ケータイさえ持たず時代の隅に居る
譲られた席を拒んだ松葉杖
新車を横目に10回目の車検
追い越しに私のバッグひったくり
親の年追い越してまだ生きている
追い越さずそと寄り添う影ぼうし
手を焼いた部下に今では使われる
先輩を追い越していく十五歳
名月をうっとり賞でてホームレス
マタタビを抱いて恍惚トラの顔
うつとりとショパンのソナタ聴いている
うつつをぬかして心ここにあらず
朝焼けにうっとり犬に急かされる
うっとり男も酔わすニューハーフ
美しい夕陽みとれるかたつむり
ライバルが栄転乾杯音頭とらされる
知らぬ人が私と同じ服似合ってる
ウインクされどきつとしたが的は別
たくさんありますが聞いてくれますか
目の手術癒えた妻から老けたわね
疎開時に母の着物を食べました
ご馳走に入歯忘れたことがある
世話をした嫁は遺産をもらえない
上京の今度も富士は雲の中

あさ子 和雄 弘子 俊雄 郁夫 祥昭 ひさ乃 峰子 志華子 栄子 国和 益子 裕子 いさお ルイ子 真佐子 歌留多 たもつ 恭昌 シマ子 勝弘 東風 忠昭 一歩 楓 克己

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西

茶子報

鮎のうるか冷酒に欠かせない珍珠
傾けて道を譲って日傘さす
塩焼きの鮎はかすかに珪藻の味
塩焼きになるとは知らず泳ぐ鮎
町栄え鮎や岩魚の棲み処減る
金が回らぬ傾いたままの墓
俺だけの懐メロ聞くと亡母の顔
懐メロの大好き飲めばすぐ演歌
何だか言っても最後やはり金
やはり歳か宿題まちがえ四苦八苦
百歳の母の口癖ケセラセラ
別嬪が混ざるとやはり飲み過ぎる
五月雨牡丹に傘を傾けて
失恋の鮎を釣ったか僕の竿
竹の子の青春鮎が掘り起し
若鮎の妻も今では河豚豚いて
日の丸は傾め私は直立で
浪費癖家は傾きどう暮らす
庭石が傾き危険感じてる
麗しき若鮎今や不整脈
誘惑に傾く心はねのける
人恋し懐メロ恋し手酌酒

和子 綾子 ゆり子 すみれ 裕 盛桜 実満 照彦 弘子 重忠 みさ子 完司 孔美子 小鹿 蟹郎 恒 茶子 草文 かおる 拓庵 京 満 昌

川柳わかあゆ(鳥根)

松本はるみ報

戦中派思い出させる自然食

ねこやなぎ自然の流れに添って咲き
めぐる四季自然とはいえ感謝です
若き日に見た海今は一人行
斐伊川はどつしりとして里をゆく
久し振り孫と今夜の酒の味
やがて来る荒波立てる日本海

川柳茶ばしら(愛知) 関本かつ子

日韓に慰安婦像のある限り
気にしてる所ばかりが似る遺伝
單身を解かれて帰る部屋がない
美人ではないが不思議ともてている
ドジな金魚メダカすいすい音もなく
庭の隅赤ちゃん猫の音がする

川柳塔わかやま吟社 小谷 小雪

かたつむり紫陽花と濡れかくれんは
城の門ゆつくり暮れて梅雨に入る
おとつと梅雨の晴れ間の紫外線
耳鳴りのあなたに小言届かない
国会の答弁耳鳴りの様に
地検不起訴けさはがぶりと目玉焼き
目玉焼き崩れてこころ見透かされ
目玉焼き母の思い出走馬灯
目玉焼き習い身身赴任する
人生はずつと青春今も旬
パスデーハウスの母色を盛る

かつ子 惠美子 安子 好栄 ハル子
遡行 まみ子 三樹夫 美千代 雅美 かつ子
よしこ 紀子 知香 ちづこ 紀久子 日出男 寿子 ほのか 保子 京子 富美子

菓の中の餌待つ子らが旬にする
やがて秋のち命がみな実る
思い立った今が旬だと腰上げる
女ひとり旬がしばらく長くなる

川柳同友会みらい(鳥取)吉田 陽子

広い海見渡す父の羅針盤
それはタメ子供の夢を消していく
体験の重石を使う時を待つ
しげしげと眺める顔が瓜二つ
喚問の逃げ口上を子が真似る
ライバルは私へ住んだ怠け癖
酔っ払い一人芝居の幕が開く
ありがとうの増える自分に有難う
お互いが気遣い合ってすれちがう
揺れながら夫婦で渡る永い橋
二流半そこらで我慢する余生
乱筆のことわりもせず子へ手紙
どの道を行こう選べたのは昨日
笑顔だけあなたの善意だと思ふ
風は春余白を埋めにやってくる
政治家の嘘から子ども守らねば
シンプル・イズ・ベスト自転車に乗ろう

川柳ささやま(兵庫) 北澤 桐民

程々の雨を喜ぶ野菜たち
生きるとは満ち干もあつて渦も出来

小 雪 徑 子 克 子 あきこ
雄 大 洋 子 真 帆 省 吾 和 之 陽 子 武 志 ダン 吉 安 子 游 子 弘 弘
耕 一 和 代 章 子 美 恵 子 葵
菜 美 耕 一 和 代 章 子 美 恵 子 葵

川柳大阪 山崎 珠生

ただ真面目生きて賞なし罰もなし
みどりさす窓辺身体解剖図
最貧国ゆつくり流れる時が好き
平凡な暮し老には超最高
二刀流どちらも錆びて年をとり
雷鳴にひるむ彼女へ男伊達
料理好き変化に富んで味豊か
高齢者私も正に渦の中
恩師の墓前花を手向けるクラス会
生真面目で空気読めずに浮きあがり

稠 民 真 由 さゆ子 幸子 善 輔 剛 照 代 美 智 子 喜 弘 重 男
芳 香 珠 生 一 歩 雅 美 福 貴 子 満 知 子 (矢)五 月 朝 子 (鈴)いさお 紀 雄 美 世 子 勝 弘 克 己 万 紗 子 かよこ

小児科が整骨院に衣替え
 入道雲湧いて夏へと衣替え
 許されて心の楔解き放つ
 千回は仏の顔を見させている
 許すとは言わず黙ってハグをする
 米寿ですボケといわれぬようにする
 欲張らず老いの暮らしに感謝する

ブラザ川柳(大阪)

梶原

弘光報

靴下を履かないオシャレ今風で
 足袋忘れ裸足で和服トホホホ
 親指が穴からのぞく伸び盛り
 ストッキング黒の出番が多くなる
 片方の靴下誰か知らないか
 干されても平常心の見栄を張り
 干し柿の化粧日増しに白く映え
 温暖化吊るし柿にもカビがはえ
 物干しで風になびかぬ作業服
 梅干しを持ってハワイへ行った母
 雲なびく空木の花の帰郷道
 国の民飢えても平気北のドン
 苦難続き税上がらず今日も酒
 きやらぼく川柳会(鳥取)後藤
 信じても信じなくても賽銭
 冗談が言える家族は円満だ
 老いる程母をつくりと娘らは言う

堅坊 賢子 志津子 まつお 美籠 照月 悦夫 淳司 正子 清乃 五月 文子 和修 久美子 一彌 政夫 弘光 克三 宏之報 紀の治 恵子 治代

暮れて往く優しい言葉支えられ
 朝のほけに逢うますますの眉をして
 生産地きつちり名乗り手を上げる
 曾孫の可愛い瞳ひと目でも
 スポン穿く片足立ちになるスリル
 真つ昼間に蛙の声が互い呼び
 腐葉土にさせむ石庭葉の無念
 規制枠軽々超える裏ルート
 田植え季に見える台地に早苗の香
 サーフインに乗って飛びたい広い海
 この年で若者たちと草を刈る
 川柳で淋しさ埋める春となり
 転ぶなどと言いつつも転んでる
 バナナ一つ氷枕の先に有り
 母の日の儀式を終えて花安堵
 花の散った椿の葉っぱ声かける
 新緑のみどり色濃くかがやいて

多美子 千代 宏之 あやこ 雨奇 美智子 令位子 汪 美佐子 久直 かね子 瑞枝 日枝子 章 美穂 美草 菜々 清報 千里 紀雄 貫一 耀一 寿之 恵 高鷲

八尾市民川柳会(大阪) 中園

自信ある背中後は後ふり向かぬ
 風向きが変るアメリカンファースト
 耳うちし大臣さえも押え込む
 大気澄む大きな朝がくる予感
 持て余すわたしの中の天邪鬼
 邪は嫌い親父の一本気
 存在を無視するとんがった視線
 病床へ二度のお務め千羽鶴

高鷲

好きでなく嫌いでもないでも夫婦
 ふわふわの笑顔も足して星五つ
 好き嫌いどちらにもある女偏
 好き嫌いなくて矍鑠たる傘寿
 川柳塔おっぱい吟社(香川)川崎ひかり報
 親切がすぎてお茶まで出す羽目に
 ここからが勝負見事な切り返し
 手手切るな気使う祖母とする手芸
 ありのまま生きて八十路の白髪切る
 目に見えぬ包み切れない母の愛
 精一杯生きた今日へありがとう

初恵 弘 放任 いさむ よしみ ひかり

倉吉川柳会(鳥取)

竹信 照彦報

分かるまで数学解いた若い日よ
 ササユリの香りが分かる大丈夫
 シルエットあの二人だとすぐ分かる
 国会が分からない事ばかり言う
 会談で分かりあえるか米と朝
 分かるのは確実に歳とったこと
 よく分かる言葉上手で聞き易い
 海からはワカメ山からはワラビいただきぬ
 いただいて持って帰ってゴミに出す
 いただいた命を守る医者通い
 竹の子の生命力をいただいた
 隣からカレーの臭いいただいた
 有り難いブービー賞をゲットする

玲子 けいこ 由紀子 康子 鬼一 瑞子 風露 完司 石花菜 重忠 祐子 茂夫 野蒜

回覧板一緒にいたたく旬の物

川柳に脳の運動求めて

甘い物求める腹の言うままに

ヒントまだ求めぬままに桜散る

求人欄隅からすみと暇つぶし

離民は多く求めず命乞い

金あれば求めが叶う平和ボケ

わただけ見ても変らぬ現在地

空だけはいつも変らぬ現在地

偽りの謝罪はいつも茶番劇

逃げられず活断層の上に棲む

お叱りを頂戴しても罪じゃない

ふうもん吟社(鳥取)

西川 無限報

つばらばう草履ぬくめて天下盗り

セクハラがアカデミーにも飛び火した

傾いたままもう少し歩きます

生きているのが嫌になるまで生きて死ぬ

かゆい所にとどこかぬ子猫ちゃん

花咲いて呉れた庭木が好きになり

双六のような上がりもある人生

退院日点滴ワルツ踊ってる

人間を良くも悪くもするお金

春祭り過疎も頑張る笛太鼓

味方にも敵にも風は変化する

文芸を舐めてかかったこの苦勞

舐めてますあなたの台詞耳に蛸

美知江

恭子

龍枝

日出子

雄大

次男

智恵子

宣子

紀美恵

萩江

醉芙蓉

照彦

蟹郎

房江

善平

清信

一粋

初恵

明遊

毅

美恵子

幸子

みゆき

とも湖

回春子

回春子

軽装で登った山に叱られる

終戦の苦しみ舐めた母は死す

このシワが酸いも甘いも舐めました

秋田犬に舐められザギトワが笑う

辛酸を舐めて男の樹は育つ

多数決何人飴を舐めたのか

頂上決戦辛苦を舐めた者が勝つ

ちまちまと暮す八十路も孫七人

ちまちまとローンを組んで夢叶え

三兄弟顔はちまちま串団子

根気よくちまちま埋める1000ピース

ちまちましたあんななかは大嫌い

ちまちまと小言言うのも母の愛

ちまちま暮らしたけれど愛がある

下ネタはセクハラですよ図に乗るな

図に乗って喋り議員も怪我をする

図に乗るな俺に言うなよ国に言え

C調の自慢話に水かける

図に乗るなおごるお酒は一杯だ

図に乗るなあなたが主役ではないよ

相手見て使うお世辞の裏表

川柳塔まつえ吟社(鳥根)相見

柳歩報

讀美歌の流れ跨いでウオシユレット

逆上り雲の流れを一人占め

もどかしい時の流れが気にかかる

流れつき岸で再起の芽が育つ

宏章

虎尾

振作

楓花

敏夫

一瑤

金祥

一平

薫

栄子

義徳

凱柳

天翔

敦子

茶人

茂登子

大

心咲

勲章

節子

無限

柳歩報

芳山

美智子

豊仙

ひふみ

ひふみ

トラブルに干渉過ぎた顔となる

ゴッホの絵陰しき画風胸を打つ

険しさも少し和らぎ鳴らす靴

銀河鉄道近いうち試運転

本当を巻ききれなくて崩れ寿司

本当を突かれた時は地藏さん

本当は百円ポツチ神だのみ

うそばかり言っても晴れぬ空の色

モーガンはホンント「許されざる者」ね

安倍首相お願いだから言つてよね

本当は君の声だけ愛している

咀嚼する時間を稼ぐ生返事

ハイハイのふたつ返事にある小骨

手をかけた花美しく返事する

宴会の返事は速い皆イエス

はいはいとふたつ返事のポチでいる

返信を待つトキメキはまだ女

極細の手編みあきらめ指であむ

ぼたる川柳同好会(大阪)水野

黒兎報

いつからか一番風呂は山の神

戦利品山分けしてる桃太郎

胃袋をしつかりつかむ山の神

登山道これから登り靴の紐

山の神睨みと笑みを使い分け

低いけど校歌に山は聳え立つ

ほどほどに降って欲しいと新芽達

青帆

輝山

禮子

寿代

とも子

弘充

邦代

瑞人

朋人

柳歩

草庵

桂子

知恵子

あきら

德利

孝子

哲子

黒兎報

則彦

順子

奈津子

守啓

一弥

黒兎

桂子

桂子

桂子

降りかかる試練わたしをテスト中
降りだした雨にまかせ鉢の花
梅雨入りもファッション傘で楽しそう
外は雨つるりとびわの皮をむく
母さんがとことん守る子の笑顔
夫婦してとことん悩む子の名前
百歳を生きて年金貰いきる
飯まだか！長い電話を切るチャンス

川柳塔さかい(大阪) 内藤 憲彦報

はじめての馬券で大穴当てました
敗戦が節目になって今がある
人生の折目節目の寺社詣で
越えるたび度胸をつけた節になる
定年は嬉し悲しの節目かな
リストラの節目郷里の農に生き
私の節目にいつも亡母がいた
十三回忌終えて過去帳ページ繰る
生き方を見直す痛を患って
カルチャーでわいわい古希を忘れてる
世相切る付度はせぬ太いペン
沖繩の願いはずばり平和のみ
ズバズバと言えぬところが良いところ
その歳なら当り前よと娘のジャッジ
大根をずばりと切って憂さ晴らす
嫌いなとこ二つ好きなたこ三つ
「君こそ命」もうメロメロやこのセリフ

郁子 純子 柳童 久子 美佐子 正子 孚彦 春代
廣子 としお 八千代 佳子 光雄 ひろ子 志津子 妙子 玄也 さくら 敏治 和夫 憲彦 五月 舞夢 ゆみ子 清

核心を衝いた助言に立ち直る
節目から涙がにじみ出てきます
喪が明けたさあて羽でも伸ばそうか
満中陰過ぎたら出ると趣味仲間
人生のだじじな人に会う節目
彼氏でき急に読み出す料理本
突然の転機は母のあんた誰
天井板の節目にじつと睨まれる
結婚式大きな節目親も子も
合格を機によく遊びよく遊び
とつこの昔止めたタバコが又恋し
トランプのやる気まんまと真に受けて
富山湾に山並み浮かぶ摩訶不思議
とうちゃんが病んでママさん天下取る
ともかくもやってみなはれ任すから
特徴はやはり母似の丸い鼻
当意即妙やさしい嘘がまだ言える
泊まりたい遣らずの雨に増す未練

サークル檸檬(大阪) 松尾美智代報

くよくよと悩むな所詮小さいこと
優しくも無常でもある大自然
背信に小さな棘がささる悔い
苦し紛れの小さな嘘が渦になる
母の背に小さな声でありがとう
小さな夢いっぱい持って忙しい
可能性あれば挑戦したくなる

みつ江 かりん 進 澄空 唯教 素頓馬 誠一 俣子 満知子 雅明 扶美代 清 憲 富夫 雅美 愿 みつこ 時雄 房智子 智恵子 千代 いわゑ 哲夫 久仁雄 光久

六甲川柳会(兵庫) 奥澤洋次郎報

歩む道はずれてないか胸に問う
川柳は人にながりみな元氣
行き先は幸せの国パスポート
よい目ざめ自分さがしの遊歩道
八十路すぎドック受けよか受けまいか
梅雨なれば予備日の予備日つくりたい
勇氣ある罪告白に救われる
じつと見て何を思うか赤子目
新学期歩道に踊るランドセル
参観日母のうなずき拳手競う
開店の花輪歩道をちよつと借り
人生が知恵をつけたか裏を読む
五十年前しか知らぬパスポート
雨が降り出かける服がきまらない
パスポート一度使って本棚へ
山山山平和に笑う五月晴れ
雨上り隣の庭を誉めてみる
彩りの雨傘歌う園児たち

たもつ 加お里 美智代 扶美代 蕉子 希久子 楓 楽 廣光 保雄 道子 弘華 狸月 洋子 美恵子 芳江 妙子 正彦 じろう 礼子 洋次郎 邦子 洋一 和宏 敏夫 弘

灘に住み地域おこしで酒を飲む
 パスポート持つとしゃっきりする背中
 拉致家族すがる思いをトランプへ
 子雀の水浴びそつと廻り道
 パスポート取った時から気は翔ける
 雨の酒逢いたい友は皆あの世
 無印になって自由をかみしめる
 未知の国の旅を夢みるパスポート
 延命を拒んだ母に薄化粧
 虹の色心に架ける散歩道
 歩道橋に供える吾子の好きな花

西宮北口川柳会(兵庫) 藤井 宏造報

あなたとはどこかでお会いしたみたい
 母一人子一人父の日を知らず
 ジーパンのお下り夫は若く見え
 父の日がすつと過ぎて行きました
 平坦な道を選んで旅半ば
 持つ人が狂つと刃物も凶器なり
 安全日狂つて出来た子が二十歳
 介護日誌途中で終り母しのお
 まだ途中生きたかつたと言う日記
 父の日よ言われてハツとする子たち
 雷鳴が夏強引につれてくる
 父の日に遺影に問うてみる今後
 父の日に自分で買った紙おむつ
 平和主義私いつでもだんご虫
 譲り合い薄れ壊れゆく社会

博史 利夫 盛夫 としお 浩司 日呂志 和郎 美穂 武彦 千賀子 桜子 章子 一徳 順子 堅坊 千代 野薫 新録 紀華 哲子 敦子 正彦 恭子 郁夫 千賀子 洋次郎

嘘一つ老母の病室おたやかに
 今朝の妻調子が狂う丁寧語
 綿密なプラン地震が狂わせる
 もうあかん君に逢わねば気が狂う
 生活のリズムが狂う子もりの日
 途中下車紫陽花に酔う古都の旅
 金よりもひよいと動ける体欲し
 ウオッカとテキィラ飲むと狂い出す
 あれこれを逃れたい日は雲にのる
 平和はけ続いてほしい途中です
 今後にエール今踊り場の雅子さま
 トイレぐらいゆつくりさせてください
 子の言い分腰を折らずに聞いてやる
 会見後ひよいと逃げ道入院か
 ひよいと乗り着いた行先黄泉だつた
 栓抜くと狂つたように不満言い
 竹林へ星の零れて螢の囀
 結婚もひよんなことからゴールイン
 ひよいと来てひよいと帰つた赤トンボ
 待つていてもつとキレイになる私

長柳会(大阪) 辻村 ヒロ報

ばあちゃんの梅干し好きときめかす
 梅仕事亡母に変わつて天日干し
 名産地干されて鳥賊は値を上げる
 梅干しが日の丸弁当鎮座する
 梅を干す十日もたては老いの顔
 反則技をせねば干されるアメフット

弘子 盛夫 浩司 武彦 光彦 野鶴 和宏 宏造 いわゑ 弘委智 美津子 勝弘 秋果 健彦 みよし 邦男 靖夫 忠夫 輝彦 ひとみ

脳にカビたまに虫干ししたくなる
 自分史の暗部晒して天日干し
 くつ下を片足立ちで履きやつたあ
 五本指いつも小指が家出する
 シースルー穿いているのか脱いだのか
 穴開きがこの靴下のデザインよ
 靴下は野暮と見栄はる伊達男
 チアガールハイソックスで空を抜き
 洗いざらいぶちまけあつてスツとした
 わだかまり洗い流して雨上がる
 ウソばかり聞いている耳をよく洗う
 洗うても削れど落ちぬすねの傷
 ごまかすな我慢限界突き飛ばす
 ちようど良いのぞきの穴をふさがれる
 青い鳥よくよく見れば足元に
 木の芽立ち色とりどりに競い合う
 低金利こんな段差にけつまずく

岸和田川柳会(大阪) 石田ひろ子報

好きやでえつおぶやくように言うあなた
 物忘れつおぶやきながら探すくせ
 つぶやきを聞こえよがしに言う策士
 つぶやきもささやきももう同レベル
 お互いのつぶやき聞かず波立てず
 痛い注射やブと心でつぶやいた
 ニュース見てつぶやく癖がきました
 ぶつぶつと言わんと言いな大声で
 つぶやきが国会デモになる怒り

孝代 和子 弘美 純風 直樹 規之 幸子 旅人 英美 正美 淳司 洋二 正博 福子 靖博 光弘 みつ江 一子 常男 規子 多喜子 宗博 律雄 喜代志 義泰

わたくしを急かしてくれる腕時計
狂った過去何も語らぬ古時計
故郷の山河は時計巻き戻す
人の世や人それぞれにチクタク

あの日から時計動かぬ拉致家族
核時計米と北とで針戻す
気配りが老舗旅館を支えてる
羨かな気配り出来る一人っ子

故郷の鮮度が届くクール便
開店へ半額券が客を呼ぶ
笑顔だけです私お配りできるのは
被災地へいつも気配り両陛下

健康に心を配る八十路坂
鶴を折る幸せ薄い白い指
人の世の儂さを見る沙羅双樹
ピンチなど気にせぬ母は太っ腹

ピンチでも記憶がなして通ります
振り向いてくれる仲間の手にすがり
命乞い親に断られた幼い子
見ようではこれこそチャンスだと思

川柳塔打吹(鳥取) 斉尾くにこ報

生きがいはいは花や野菜が笑うこと
五才の子生きたかったね涙涙
生きるとは切ないものかカタツムリ
床の上座譲らぬ要石

おたまじゃくしの手足が出てドキドキ
ドキドキを捲って見ればセピア色

信子 遠野 大輔 昭 英夫 康信 忠太 カズ子 香代 和美 玲子 隆昭 珠子 愿 ひろ子 美籠 洋二 益子 信二 丹吉

ふるさとに骨埋めるため帰郷した
雲と遊ぶドキドキ一つ歳をとる
本気出し生きた我です褒め言葉
婚活で本気度示す勝負服

本気だし貯金しとけばよかったな
公務員出世の邪魔になる本気
本気です本ままで買ってメダカ飼う
火傷するかも知れないが止まらない

靴買って張り切り万歩本気で
三ヶ月分の給料で買う指輪
本気度を試されている核ボタン
八十路坂一日、一日が本気

本心は棘を真綿で包みます
蜜や棘愛を絡めて口説かれた
棘のある言葉の陰に愛がある
好きになり棘も抜かれて尻の下

虎魚の棘素足で踏んだ日の悲劇
弱さから針千本になりました
棘みんな落としてからの丸い月
草餅は棘ある言葉気にしない

あかつき川柳会(大阪) 山本 昌代報

紫陽花がもうすぐ夏とささやいて
満月を背に受け伸びる影法師
近い内きつと返すとまた無心
部屋中の電気をつけていて孤独

明るい方へ背のびしている鉢の花
煮崩れた芋と幸せごっこする

大鯰 美知江 恭子 滋 悦子 照彦 龍江 泰山 美美子 みち子 紀の治 石花菜 岳人 玲坊 貴恵 清 重忠 三津子 宣子 くにこ

日本の母の味です雑煮餅
カタカナのメニューは苦手おでん好き
暇人に今日も嬉しい長電話
居座れば公私も濁るまつりごと

白内障眼帯取れば新世界
切り口上開き直りの麻生さん
国政のガンに名医はいませんか
煮詰まった膿爆発の日は近い

戦争の反省なくて蚊帳の外
付度について乖離の字を覚え
ノーサンキュー安倍と麻生の炊き合わせ
果てし無く原発事故の長い影

目と耳の間でもれていた秘密
灯火管制とけて天井温かい
明るくてうわべも裏もない男
長考に痺れが切れぬ将棋棋士

お迎えが近い近いとよく遊ぶ
能天気腹が減つたら水を飲む
母に負け嫁は煮物をつくらない
DV痕隠す笑顔の明るすぎ

堂々と嘘がつけたら大人です
一言が胸に刺さって長い夜
肉じゃがで釣り上げましたええ男
照明にこだわりを持っているトイレ

見通しの明るさ弾き出ぬ数字
爽やかな二十歳恥ずかしい大人たち
心を隠す明るい面をつけて出る
安倍麻生共犯という近い仲

清 忠昭 和雄 福貴子 行兵衛 秀夫 秀夫 鮎子 一行 直子 英夫 満知子 一志 茶助 一文 紀子 哲男 喜八郎 ひろ介 みつ江 栄子 ひろ子 克己 寿子 信子 穩夫 惠美子 愿

常男 一子 浩子 高鷲 壽峰 紀乃

川柳あまがさき(兵庫) 大浦 初音報

ゆるしてとすがのいのちを切り捨てる たもつ
 切れそうな糸に絡まる子が二人
 乳母車自転車今は車イス
 台所喋る家電にうるさいわ
 整骨院へ百歳目指す押し車
 色恋はなくてひとすじ趣味の道
 うば車のぞいて見れば犬だった
 ぶつとりと便り途絶えて友施設
 金はない言つた途端に通話切れ
 救急車帰りはのれぬ不親切
 頑張つた分生きがえの糧になり
 惚れました頭の中はドーパミン
 なぜだろう好きも嫌いも女偏
 貧欲に我劣らじとまっしぐら
 高級車トイレも持参北のドン
 ウォーキングしても近道してしまふ
 婆ちゃんのホットペにチューして五百円
 ぶつとりと来ないメールに画面拭く
 巣を作る燕も好きな軒がある
 急がねば馬車がカボチャに戻るから
 卒寿まで免許更新するつもり
 ぶつとりと生命線が切れている
 ぶつとりと消える命もあるこの世
 一番は論吉その次酒が好き
 いい夕陽ちよつと狂つてみませんか
 さつき飛んだ蝶を氣遣う俄雨

英坊 菊江 富夫 公子 初音 雄次 たまえ 新録 紀華 雪菜 健二 紀恵 つな子 ひろ介 耕治 祐康 雅美 千賀子 真桜子 花門 修平 こみつ 正和 堅坊 哲夫

米寿やのにあの新人車買いはつた
 走り梅雨わたしの恋も発芽する
 飛ぶ羽根はあるがゴキブリ這い回る
 飛ぶように出世努力の人でした
 妻が好きでも愛犬はもつと好き
 福の神確かに居るが非常勤
 ラブレター梨の礫が気にかかる
 大好きな人と潮騒聴いている
 まっすぐなハートたつぷり水をやる
 幼な顔残し知覧の飛行帽

岩美川柳会(鳥取) 山下 節子報

トンネルを出たら百万都市だった
 としよりの道トンネルが多くなる
 看護師に叱られている鬼瓦
 絶景を見せぬトンネル大嫌い
 ナイテゲールばかりじゃないよ看護師は
 拉致家族長いトンネルもう止めて
 弱き者助けるナース馳せる夢
 看護師に恋を感じた闘病記
 トンネルを抜けて身につく人間味
 トンネルで手を握つても出口まで
 看護師のやさしさほろり勘違い
 桜トンネル過疎の村にも春が来る
 透折というトンネルにナースの灯
 百万の札束持つて死ねやせぬ
 看護師に支えられてる松葉杖
 師でも婦でもいいじゃないか優しけりや

章子 良種 靖鬼 千寿子 宏造 万彩 美籠 ヨシエ ひとみ 海童 重忠 完司 一瑤 一粹 天翔 一平 ポール 弘六 美恵子 蟹郎 たぬ 菖子 幸安 敏子 雅女 振作

最高の看護師やはり妻だった
 大家族東ねる母は大奮闘
 看護師に諭されてゆく検査の日
 あつトンネル完全試合夢と消え
 同窓会タイムトンネルふり返る

大滝句座(鳥取) 新家 完回報

飛びたがる帽子に紐をつけている
 伝統の家族やつぱりサザエさん
 ダウインチとヘリコプターを漕いでいる
 飛ぶ夢はカラスに任せまいとる
 ドンマイと励ましている物忘れ
 つぶやきが化学反応して刺さる
 私は世界に一人しかない
 同窓会自慢話に棘の花
 ここで跳ぶ台詞が背中押してくる
 花時雨舞う伝統の傘踊り
 トランプの法螺貝金の太鼓腹
 盛り塩に誘われひよいと入り込む
 飛ぶつもりでのめり込んだら燃え尽きた
 組板の蟹のつぶやき聞かされる
 毎日を好奇心持ち跳ぶ八十路
 反則につぶやく闇が深くなる
 伝統の御輿が見えぬ過疎の村
 あの頃はふさふさとした富士額
 戦略なくつぶやくようなポチ外交
 貯金減る長生きするともつと減る
 安倍さんヨバやき眩き聞こえぬか

彰夫 公子 千代 凱柳 節子 宣子 宣子 芳山 照彦 紀の治 くにこ 芳光 楓花 麦青 美ツ千 石花菜 大鯰 幸子 風露 由紀子 小鹿 野蒜 正男 道唱 久子 清明

ササユリのおらが自慢の写真帳
 恐怖心抱かずに飛べるアスリート
 伝統より男女平等です土俵

川柳さんだ(兵庫) 田中 童子報

物忘れされど憎めぬ人である
 すぐ忘れ遠い昔は夢に出る
 病名も忘れて飲んでる薬
 買う物をメモしたメモはお留守番
 好奇心どんどん失せる物忘れ
 食べた事忘れなければ未だセーフ
 血圧の基準を下げて増す患者
 震度5に届かず名前出ない都市
 べっぴんかどうかで決める福の神
 良く出来る子はばかり例に上げるママ
 かあさんが駄目と言ったら駄目なんだ
 父さんに及ばないけど彼が好き
 働けるよるこび田畑から学ぶ
 トライアルウィーク中学生のお手伝い
 働いた汗が老後を支えます
 非正規の君のガンバリ見ているよ
 チャンバラ廃り出番の減った斬られ役
 閻魔さんだれの舌から抜く積もり
 良いリーダーに良い側近がついている
 親方の教へ守ると栃ノ心
 やってみなはれ伸びる企業創業者
 ポスの座を追われて群れの外にいる
 リーダーがテルテル坊主つくつてる

重 忠 鈴 野 完 司
 千津子 健二 野 薫 美智子 一 子 加代子 修 平 隆 太 万 彩 徹 利 子 千代美 迪 順 子 つな子 ひとみ 喜 弘 厚 子 宏 造 哲 夫 佑 康 花 門 耕 治

飲み会のリーダーならば出来る僕
 リーダーの資質問われる日本大
 リーダーの質が問われる災害時
 指揮棒が先頭をゆく鼓笛隊
 厚化粧しても騙せぬ影法師
 暑いからちよつと化粧薄くしろ
 外で逢う妻は程よい厚化粧
 天井というのが小エビの厚化粧
 厚化粧これも女の処世術
 改ざんも慣れてしまえば気にならず
 雨の宵ひとりしみじみロゼワイン
 地図にない道が教えてくれた四季

川柳ねやがわ(大阪) 籠島 恵子報

嫌なこと任せて好きなことだけを
 道草で天国行きに遅刻する
 一斉に第九のごとく蛙鳴く
 命輝く新芽にだつて嫉妬する
 梅漬けの一年分を任される
 父の日に父は最後と腕相撲
 失うて番を任せる無人店
 良心に悪しき悪い製品売ります
 データ改ざん悪い製品売ります
 儲け話人には言わずこつそりと
 ポロ儲けの話に乗らぬ玉の汗
 甘い汁吸った蜜が動けない
 果てしなく喜怒哀楽の旅をゆく
 削るのも足すも厳しい五七五

好 文 義 徳 雄 太 郎 哲 男 博 正 和 優 子 堅 坊 廣 子 雅 尚 ヨシエ 武 彦 亜 成 博 泉 朝 子 賢 子 麗 茜 かすみ 洋 堅 坊 高 鷲 仁 郁 夫 高 志 弘 委 智

婚活を優先今日の委任状
 儲けより生きがいのあるポランティア
 ねやがわ旬会一番好きで人も好き
 腹減った時にポエムは湧いて来ぬ
 告知され命のページ繰る重さ
 ふり返り冒険だつたとあの企画
 足腰の鍛錬しすぎ車椅子
 冒険の野心持つ子が偉業なす
 過労死入れて何百兆も儲ける気
 目標を違え進路を見失う
 巡る季に捧げるものは感謝です

藤井寺川柳会(大阪) 大田扶美代報

カジノ法他人の懐紐にする
 その口に乗つたらあかんツケ怖い
 トランプに乗つても碌なことが無い
 終章へまだ踊り場の数がある
 踊り場で息整えて膝撫でて
 夫婦仲伸びて縮んで五十年
 すぐ調子乗るから鈴をつけられる
 ポツポツと想い出共に消えた汽車
 靴紐をきりりと結び医者通い
 紐やないリストラされた粗大ゴミ
 踊る阿呆こころが見せ場と身がくねる
 父の日をベンチで眠り雲に乗る
 アべさんは世界のバスに乗り遅れ
 ほんの一駅でした花野から枯野

真 弓 武 彦 ルイ子 弘 一 寿 子 銀 杏 秀 雄 信 子 鈍 甲 壽 峰 恵 子 紀 雄 みつこ いさお フジ子 六 点 喜代子 まつお 絹 子 久仁雄 光 男 信 二 よしみ 一 歩 扶美代

| 句会名 | 日時と題 | 会場と投句先 |
|--------------------|--|---|
| 川柳 あまがさき | 14日(火) 14時締切 帰る・神・マイナス・自由吟 | 尼崎市女性センター・テレビエ 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造 TEL.06-6494-5187 |
| 川柳塔 すみよし | 18日(土) 14時15分締切 粒・情けなかった事・握る | 住吉区民ホール 〒580-0026 松原市天美我堂3-130-2-404 森松まつお |
| 岸和田 川柳会 | 18日(土) 14時締切 平和・忘れる・とびきり・カバー | 岸和田市立福祉総合センター 南海電鉄「岸和田」駅東へ5分 〒596-0076 岸和田市野田町2-13-19 中岡香代 |
| 川柳 ねやがわ | 19日(日) 13時締切 席題・人気・純情・無駄足 自由吟 | 寝屋川市 産業会館 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 |
| 川柳 藤井寺 | 19日(日) 14時締切 くるくる・実行・席題共選 | 藤井寺市生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0007 藤井寺市林5-8-20-303 鈴木いさお |
| 豊中 もくせい 川柳会 | 20日(月) 13時50分締切 味方・拭く・がたがた 自由吟 | 豊中市立中央公民館 3F 阪急宝塚線「曾根」駅 徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5-26 初代正彦 |
| 川柳 さんだ | 21日(火) 13時30分締切 英語・逆らう・ギャグ・上機嫌 自由吟 | キッピーモール (JR三田駅前) 〒669-1545 三田市狭間が丘5-10-19 谷 祐康 |
| 和歌山 三幸会 川柳会 | 25日(土) 13時15分締切 平和・ほめる・柔らかい | 和歌山商工会議所 4階 第3会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛 |
| 川柳塔 みちのく | 25日(土) 17時締切 紫・おどける・地酒 | 弘前市御幸町13-1「大成小学校地域交流室」TEL.0172-36-6614 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛 TEL.0172-36-8605 |
| はびきの 市民会 川柳会 | 26日(日) 14時締切 群・冷房・スマホ | 陵南の森公民館 近鉄南大阪線「高鷲」駅下車 北東へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ |
| 川柳 ふうもん 吟社 | 26日(日) 13時30分締切 自由吟・画布・紙コップ 唱える | 開発ビル 2F (鳥取市片原1-107) 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥 |
| 南大阪 川柳会 | 27日(月) 18時30分締切 しんどい・小銭・そそのかす 雑詠 | 大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ |
| 京都 塔の会 | 28日(火) 14時締切 ウォーキング・極・すげない・席題 | 京都ハートピア 地下鉄「丸太町」駅⑤出口すぐ 〒607-8231 京都市山科区勤修寺堂田70-16 榎本宏子 TEL.075-591-0424 |
| 川柳 たちばな | 休会 | 立花公民館(尼崎市塚口町3-39-7)TEL.06-6422-6741 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造 TEL.06-6494-5187 |

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6779-3490) へご連絡ください。

8 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

| 句会名 | 日 時 と 題 | 会 場 と 投 句 先 |
|---------------------|--|--|
| 川柳塔 な ら | 2日(木) 14時締切 暑・かんかん・太陽 | 奈良市立中部公民館 4F 近鉄「奈良」駅④番出口 徒歩5分 〒633-0054 桜井市阿部787 松本方 安土理恵 |
| 城北会 川柳会 | 4日(土) 14時締切 逆らう・カット・理由・自由吟 | 旭区老人福祉センター 3F 地下鉄谷町線「千林大宮」駅③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14 江島谷勝弘 |
| 川柳 とんだばやし 富柳会 | 4日(土) 14時締切 活・辿る・自由吟 | 富田田市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田」駅南口から西へ200m 〒584-0043 富田田市南大伴町4-1-10 池 森子 TEL:FM0721-25-0603 |
| 倉吉会 川柳会 | 4日(土) 14時締切 装う・敷居・ こたえる(心身に)・席題 | 倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男 |
| 川柳塔 まつ 吟社 | 4日(土) 13時30分締切 チラリ・仲良し・世間・静か | 松江雑賀公民館 〒690-1223 松江市長保岡町笠浦222-1 相見柳歩 |
| 八尾市民 川柳会 | 5日(日) 正午開場 第65回八尾市民川柳大会 | 八尾文化会館 5階 レセプションホール(プリズムホール) 詳細は川柳塔7月号112ページ下段参照 |
| あかつき 川柳会 | 10日(金) 14時締切 薄い・竹・野望・時事吟 | 大阪保育運動センター(新谷町第1ビル2F) 地下鉄「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2-312 前田紀雄 |
| 川柳塔 さ かい | 10日(金) 14時締切 すかっと・お化け・折句:アコウ | 東洋ビルディング 4F 堺東駅北西改札口から2分 〒599-8103 堺市東区菩提町5-171 矢倉五月 |
| 川柳大阪 | 11日(土) 14時締切 逆転・ロマン・頼る | 地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-11-6 山崎珠生 |
| 六甲会 川柳会 | 11日(土) 14時締切 紙・ケーキ・託す・自由吟 | 六甲道勤労市民センター 5F E室 JR「六甲道」駅南隣 メイン六甲内 〒657-0011 神戸市灘区鶴甲4-11-11 上田和宏 |
| 川柳塔 打 吹 | 11日(土) 13時30分締切 貝・住む・ツヤツヤ・席題 | 倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局 |
| 川柳塔 わかやま 吟社 | 12日(日) 14時10分締切 兼 題=ぼんやり・生き字引・脇役 課題吟=タオル | 和歌山商工会議所 TEL 073-422-1111 兼 題 〒649-6253 岩出市紀泉台366 藤原ほのか 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町2-208-5 柴原道夫 |
| 西宮北口 川柳会 | 13日(月) 14時締切 平均・からかう・じつは・自由吟 | 西宮市立中央公民館 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「ブレラにのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602 梅澤盛夫 |
| ほたる 川柳 同好会 | 14日(火) 13時30分締切 顔・誓う・折句:べ・に・す | 豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール蛭池 蛭池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼 |

柳界展望

★「第六回ふるさと川柳」は4月15日発表。同人成績。

秀句 石橋 芳山

押し寄せる彩りさくら
サクラさくら

秀句 平井美智子

点滴はピンク 午後から雨らしい

★「第18回春はくろほこ川柳大会」は4月15日、鳥取市さざんか会館で参加者321で開催。同人成績。鳥取県教育委員会

教育長賞

倉益 一瑤

嫌なこと嫌だと言えろ
まで学ぶ

鳥取市議会議長賞

永見 心咲

炎抱く切取線にいるおんな

気高町文化協会賞

平井美智子

大人一枚映画館から海へ出る

★第29回時の川柳交歓川柳大会」は5月13日、兵庫県中央労働センターで参加者170で開催。同人成績。

神戸市民文化振興財団賞

新家 完司

神戸川柳協会賞
鈴木 公弘

時の川柳社賞

平井美智子

三才 小島 蘭幸
闇の中にあるのはわたくしのやがて

三才 谷口 修平
哀楽を豊んで返す貸衣装

▽出 版△
村上直樹句集「雲ふわ

りいいなお前は風まかせ」新葉館「川柳作家ベストコレクション」B6

判P95。定価1200円+税。

▽動 向△
○日本現代詩歌文学館常設展に、小島蘭幸主幹と三宅保州理事の作品が常設展示された。

▽ご芳志御礼△
○杉野羅天さん(同人・熊本市)から地震お見舞いとして金一封を拝受しました。

▽削 除△
○5月号P90下段15行目・P105下段20行目、「音もなく散る花のあり人のあり」は、本人の申し出により削除。

▽訂正とお詫び△
○6月号P98、「句会燦燦」13行目。ホーキンス↓ホーキング。P108中段5行目、親指の↓指切り

の。P109上段2行目、あせったって↓やせたって
○表3上段、一路集「少

し」選者藤井智也↓藤井 篠山市 澤 良子
智史。 米子市 雑賀美和子

○7月号P72上段2行 目、大升↓大正。7行目、贈り物↓飾り物。中段1行目、格好↓恰好。P73 常任理事会7月6日

上段15行目、百位円均一 ↓百円均一。P73上段5 行目、はいりずらく↓は 行目、はいりずらく↓は 項を確認。

▽新誌友紹介△
舞鶴市 伊藤 恒 (火) AM10時
紹介者 森山 盛桜
松戸市 菱山ただゆき

竹林の風川柳大賞

(2018年度全国誌上大会) 作品募集

☆作品 雑詠新作2句(所定用紙・または任意の用紙)

住所・氏名・電話番号・所属結社を明記のこと

☆投句期間 7月1日～9月30日(当日消印有効)

☆投句料 1000円(郵便小為替に限る)

☆選者 本田智彦・平石隆子・井原みつ子・島田駱舟

西出楓楽・古谷龍太郎・やすみりえ

☆誌上発表 川柳いのちの詩12月号予定

☆投句先 〒689-0343 鳥取市気高町飯里84-4
鈴木公弘方 川柳同友会みらい事務局

☆主催 川柳同友会 みらい・くろほこ川柳会

**番傘川柳本社創立110年記念
全国川柳大会**

日時 10月28日(日) 10時開場
場所 太閤園(JR京橋駅より徒歩13分)
〒534-0026 大阪市都島区網島町9-10
TEL 06-53356-1110

事前投句 「大 阪」田中 新一 謝選
宿 題 「ときめき」真島久美子 選
「う どん」新家 完司 選
「道 道」大西 泰世 選
「便 り」赤井 花城 選
「ポケット」森中恵美子 選

- ◎当日の出句締切 11時30分
- ◎事前投句・宿題とも各題1句(欠席投句拝辞)
- ◎事前投句は所定の用紙に記入

8月31日(金)必着
会 費 3000円
(軽食・記念品・森中恵美子句集
「ポケットの水たまり」)
懇親宴 10,000円 (要予約)
問合せ・申し込み
〒530-0047 大阪市北区西天満5-6-26-605
TEL 06-6361-2455
主 催 番傘川柳本社

'18 尼崎川柳大会

日 時 8月31日(金)
会 場 兵庫県立ピッコロシアター
尼崎市南塚口町17-18
開 場 12時 **出句締切** 13時
会 費 2000円(大会誌呈・粗品呈)
兼 題 各題2句・席題なし・欠席投句拝辞
「波」笠嶋恵美子 選
「ウフフ」堀 正和 選
「迫 る」松本 柁子 選
「器」水野 黒兔 選
「立 つ」長島 敏子 選
「めろめろ」長浜 美籠 選
懇親宴 4,000円
主 催 尼崎川柳協会
連絡先 尼崎川柳大会実行委員
藤井 宏造
TEL 06-6494-5187

第32回 堺市民芸術祭川柳大会

と き 9月16日(日) 12時30分開場
と ころ 堺市立梅文化会館3階第1講座室
(泉北高速鉄道 梅・美木多駅より3分)

川柳大会 15:00~16:30
宿 題 「刻 む」矢倉 五月 選
「誤 算」長島 敏子 選
「五十歩百歩」井上 一筒 選
(読み込み不可)
「スマート」宮井いずみ 選
「たたむ」小梶 忠雄 選
「ほいほい」川端 一步 選

参加料 1000円(発表誌呈)
投句締切 13時30分
欠席投句拝辞
連絡先 〒590-0016
堺市堺区中田出井町34-31
村上 玄也
(TEL 072-232-4170)
主 催 堺市文化団体連絡協議会・堺川柳協会

文化祭吹田市民川柳大会フェスタ51

日 時 9月24日(振替休日)
午前9時30分開場
各 題 2句連記 投句締切 10時30分
会 場 吹田市文化会館メイシアター
吹田市泉町2丁目29-1
梅田から北千里行で約15分(阪急吹田駅西口前)
宿 題 「名 前」碓氷 祥昭 選
「連想吟」南野 勝彦 選
「こわい」赤松ますみ 選
「頭(あたま)」天根 夢草 選
「まるい」木本 朱夏 選
「仄か(ほのか)」西 美和子 選
会 費 1500円(秀吟賞・軽食・大会誌呈)
★文化祭参加 (夏休みに親子で川柳を作りましょう)
宿 題 「目指す」「腹」「迷う」各題
3句までを1枚のハガキに9句
まで書いてお出しください。
(締切 9月5日)
郵便番号・住所・氏名・電話番号・
大人、子どもの部と明記
送り先 〒565-0851 吹田市千里山西6-63-10
坂本晴美まで TEL06-6384-2466
★食事会 句会終了後、希望者は9月15日
まで申し込み 会費4500円
主 催 吹田市 吹田川柳会



青砥たかこ 選

徒らに生き年輪の見えぬ顔
アンチエイジングピンクの服を着ています
お迎えの年限とうに二日酔
帳尻を合わせ穴掘る年度末
年寄りと笑わば笑えまだ助走
誤解したままの夫婦で五十年
おとほけも年季が入る老夫婦
たしか俺金の草鞋を履いた筈
半分過ぎてもう錆びている今年
忘れてもいい年ですと許される
ほんやりと定年ふいに出るクシャミ
年金日百点取った孫が来る
そろそろと和暦身辺整理する
年上の部下に敬語を欠かさない
年寄りの赤紙届く七十五
来年の約束はせぬチューリップ
年金の天引き額と詰め将棋
惜しみて逝くには年を取りすぎた
モリカケの解明年を重ねても
七段の十年前は五つだよ
まいったなスマホはつきり年当てる
夫婦独楽ぶつかりながら50年
寄る年が速度早めて攻めてくる
年賀状やめたら干支が分からない
年の功縄文彩の佇まい
抵抗もしないで年寄りになった
もぎたての檸檬も年を食っちゃった
ときめく恋はもう心臓に悪い年
一年は短く一日は長い
地震来る咄嗟に動けない年に
中年期 見えぬところに角ができ
きれいなお肌年を聞いてもいいですか
佳 年を経て硬さを増した耳の骨
佳 まだまだと十年旅券取る卒寿
佳 辞めたって返してくれぬ年会費
佳 寂しくて一年中を渦の中
佳 過ぎましたあなたのいない一年が
人 晩年という貧相な海に出る
地 年取に聞き耳たてるクラス会
天 年ごとに雨の匂いが深くなる

かきくけ子
絹田 あさ
山川 守
前川 真
大島ともこ
沢田 正司
十六 夜
ひろ ババ
岸田 万彩
田村ひろ子
田村ひろ子
中筋 弘充
ベースかめ
光畑 勝弘
松長 一步
橋倉久美子
平尾 定昭
あそ か
フーマー
はなぶさ
稲垣 康江
上山 堅坊
岸井ふさゑ
たごまる子
ひで き
心 咲
心 咲
澁谷さくら
まさ と
や ひろ
汐 海 岬
彩 古
板垣 孝志
白鳥 象堂
吉崎 柳歩
平尾 定昭
居谷真理子
雨 径
福村まこと
平井美智子

石橋 芳山 選

取説は年寄り向きに出来てない
いい年していい年ってのなんだろう
晩年という貧相な海に出る
アンチエイジングピンクの服を着ています
パンドラの箱から飛んで出た月日
青と赤うまく混ざらぬ更年期
年齢を体重計が持ち上げる
老人の仲間歳からだろ
たしか俺金の草鞋を履いた筈
半分過ぎてもう錆びている今年
壺の中に今年を詰めて熟させる
右左丈の合わない閏年
一年の空論喉に吐けぬ泥
辞めたって返してくれぬ年会費
記念樹のグーチョキパーの枝分かれ
忘れてもいい年ですと許される
年齢を聞いても薔薇は答えない
少年は電池切れても笑ってる
父の忌へ父を越せないダンディズム
ワコールでピリオド打ってみるボディ
年ごとに雨の匂いが深くなる
年輪に沁み込んでいる旨い酒
年下の男もこんなおじいさん
来年の約束はせぬチューリップ
記録的加齢でしたとこの一年
物置きにきゅうぎゅう詰めの五年間
うちの子ものび太の年を越えていく
年の差を補助輪なしで見せつける
半世紀友とついた差何だった
目が回るくらいに歳をとってゆく
年表を突っ切ってゆく青い馬
ティンクスが崩す人口ピラミッド
佳 Yの手がピンと上がらぬヤングマン
佳 年齢を詐称しているミニトマト
佳 老いるため年を重ねたわけじゃない
佳 うるう年だからあなたを愛せない
佳 地軸へと刻む私の誕生日
人 少年のへそから下がさくらの樹
地 ランドルト環から一年を覗く
天 年齢は不詳怪魚になって行く

莊子 隆
あーさまま
雨 径
絹田 あさ
武本 碧
米山明日歌
山田こいし
葵
ひろ ババ
岸田 万彩
水野 黒兎
西沢 葉火
原 徳利
吉崎 柳歩
岩根 彰子
田村ひろ子
尾崎 良仁
尾崎 良仁
美馬りゅうこ
美馬りゅうこ
平井美智子
新家 完司
橋倉久美子
橋倉久美子
青砥 和子
藤井 智史
加藤 当白
ひで き
中内 孚彦
丹下 凱夫
水 たまり
米山明日歌
平井美智子
た ま き
斎藤 秀雄
く み く み
斎藤 秀雄
怜
森山 盛桜

投句方法 【川柳塔】を検索→【川柳塔 WEB 句会】をクリック

senryutou.net/html/index02.html (サイト管理 森山文切)

編集後記

★波の音よき思い出を繰り返し 薫風

★7月号を手を愕然とした。出久根達郎氏のエッセイ「貧乏神さま」の2行目、「大正」を「大升」、7行目、「漱石追悼の飾り物」を「贈り物」と誤植。編集部員の十二個の眼玉は節穴だった。先生のご厚意に泥を塗ったような失態に、お詫びの言葉もない。思えば編集に携わって十八年、常に誤植との闘いである。「笑話にして下さい」との氏の流麗なお手紙を手に思わず涙が。口の悪いのが曰く、「鬼の眼にも涙」。

★今号「句集の森」の不家・秋田實の弟子であつた。路郎の「川柳雑誌」

の時代に「ペンの散歩」と題してコラムを担当。「川柳塔」に変わってからは編集に携わり、名編集長と謳われた。死去の間際まで川柳塔の編集の赤ペンを握っていたといふ。享年七十三。

★6月18日午前7時58分

大阪北部を震源とする

震度6弱の地震発生。その日は7月号の最終校正

日では私はJ R阪和線に乗っていた。ストップした車内で缶詰のまま5時間半。昼過ぎに再開した

私鉄とバスを乗り継いで

よれよれの状態で夕方帰宅。「バッグにはお茶とチョコと缶切りは必需品」とは友人のアドバイ

ス。はて缶切り? 「缶詰状態になったら切り開

くため」。笑うしかない。

★7月6日路郎忌句会。私は「しぐれの中へ」と

ひとこと

ひやしあめ

五年前の夏、日傘から煙が出そうやと思いつつ、有楽町をふらふら歩いてると「大阪百貨店」の看板が見えた。大きなビルの一階だった。このお店のひやしあめが忘れられない。部厚いガラスコップにこまか

く砕いた水がぎつしり入っていて、そのあいま あいまをひやしあめがながれおちていた。そろそろのんだ。かすかに大阪の味がした。今は缶入りです。大阪百貨店 ここに幸ありひやしあめ

(まえでとよこ)

題してお話の予定であつて戴こう。

前日からの大雨でJ R阪和線も南海線も不通。如何ともしがたく話に穴を空けることに。西

日本は集中豪雨で交通網はズタズタ。そんな中を

森中恵美子先生はモノ

レールとタクシーを乗り

継ぎご出席くださったと

お聞きした。悪天候をつ

いての出席者八十三名!

句会の帰路、記録の大

雨により蘭幸主幹、完司

理事長は筆舌に尽くしが

たい辛い体験をされた。

それはまたご本人に語つ

上

ハイタイさん 水を下

(朱夏)

さい水・水・水 火の玉が遠慮なく食う 顔の皮膚 赤チンをバケツに融して塗ってやる

850句の中から「ヒロシマ 8月6日以後」29句中12 黒い雨 肋骨が焼け残ったまま

筆生の髪の手脱げる顔

ピカドンのドンは聞こ

えず瓦礫積む

被爆者の血を吸い開く

炎日を黄砂のごとく蔽

夾竹桃

紙屋町 電車は骨に成

砂の粒

髪洗う 肌食い込む

原爆に 竹やりのこと

口にせず

・・・・

(勝弘)

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
- (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集・インスピレーション・ナビ（印象吟）への投句は、同人・誌友に限りません。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
- (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
- (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から15時までにご利用いたします。

オニザキのプレミアムロースト

つぎま

杵つき製法の「すりごま」



袋を開けた瞬間に広がる、
香ばしい薫り。舌と記憶に
しっかりと残る、深いコク。

料理をより美味しくする
ゴマを作りたい、真つすぐな
想いから生まれた逸品。

それが「プレミアムロースト」。
素材本来の良さを余すこと
無く引き出した、オニザキの
自信作をお届けします。



株式会社 オニザキコーポレーションセルズ
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL  0120-30-5050

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>